

---

# 悪魔のフォークロア

秋鹿 袖玖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔のフォークロア

### 【Nコード】

N5856R

### 【作者名】

秋鹿 柚玖

### 【あらすじ】

これは血に濡れた女王の逃走劇。  
身に覚えのない嫌疑をかけられた乙女は真実を奪い返すため、そして親友との約束を果たすためにイバラの道を突き進む。しかし絶対絶命の危機に現れたのは、天使のように愛らしい少年と世にも美しい毒舌異端審問官で……。

ちよつと暗めですが、主人公はどんな逆境にも負けない、ポジティブな子です。毒舌の異端審問官にも元氣にくってかかります。彼女は一人じゃない。だから頑張れる。

## プロローグ

さあ、泣かないで、私が物語を語って聞かせるから。兄に置いていかれたのが悔しいのかい？

大丈夫。

お兄さんは君のことを大事に思っているよ。

もう少しすれば、心配して迎えに来てくれるはずだ。それまで少しの間、私が君の側にいてあげよう。

ん？

何を語って聞かせるのかって？

君は血にぬれた女王の話を知っているかな？

そう、有名なあの話だよ。

もう知っているからいいって？

ふふ、そう言わずに聞いておくれ。

これは君が知っている昔話とちよつと違うんだ。

君が知っている話の、裏の話。

そう、悪魔のフォークロアさ。

## 運命の瞬間

美しい乙女たちの運命を別ったのは一体何だったのか。

彼女は言葉なく、薄暗い広間の中心に立ち尽くした。

その燃えるような双眸は、どす黒い血の海に沈んだ美しき乙女に向けられている。

血に濡れた華奢な体が、大きく見開かれた眼が、その全てが神聖な広間で行われた凄惨な出来事を如実に物語っていた。

ゼル離宮で行われた審判という名の裏取引。

その審判の場であるこの広間を惨劇の場に変えたのは、渦中の人魔女と噂されるこの国の女王レモリー・カナンだった。

見る者を惹きつけて止まない白銀の髪と冴えいる青白い月の輝きを湛える瞳は、今はもう見る影もない。

エクロカナンIIの若き女王は純白の身を血で真っ赤に染め、月の女王とその美貌を謳われたかつての面影を失っていた。

審判を下す為に集まった者達は皆言葉を失い、ただ立ち尽くすのみ。

その身を壁に預けて息を飲み、呆然と目の前の光景を見つめていた。

広間に痛々しい沈黙が押し掛かかる。

その彼らの視線の先にいるのは、血に濡れた彼女と床に倒れた可憐な乙女。

白い大理石の床を真つ赤に染め、その乙女はまるで血の海に浮か  
んでいるかのようだった。

死の波は乙女のドレスに真つ赤に変えていく。

血の気ない白磁の肌がその中で一際青白く見えた。

凝ったデザインの流れ麗なドレスの胸には楔のように深々と剣が突  
き刺さっている。

鮮血に染まったそれは妖しく光り、滴り落ちる赤い雫を美しく輝  
かせる。

歌うような美声を紡いだ口はすでに声を失い、ただ何かを訴えか  
けるように微かに動くのみ。

優しい色を帯びたその眼からは血の涙が流れ、底知れない悲し  
みを湛えている。

それでも何かを訴えるように側にいる彼女の方に向けられた。

親友の変わり果てた姿に彼女は震える手で口を覆った。

自らの頬に触れた手は凍えるほどに冷たく、感覚がない。

痛々しいその姿をこれ以上見つめるのは苦痛でしかなかった。  
しかし眼を逸らすことなどできない。

何故…。

その一言に尽きた。

「なんで…?」

呻きに似た声が彼女の口から零れた。

やっと意味を成した言葉と共に冷たい雫が頬を伝った。

真つ赤に染まったその頬に一筋の道が出来る。

悲しみに染まった広間に進む時はその動きを止め、彼女の体を凍  
てつかず。

弱々しく途切れゆく吐息。  
苦痛に歪む美しい双眸。

彼女に向けられたその眼差しは死を前にして、それでも必死に訴えていた。

(タスケテ…)

口が動いた。

その瞬間、彼女の体中に衝撃が走った。  
弾かれたように親友の側に駆け寄る。

血にドレスがかかり、滑りに転びそうになっても彼女は止まらなかった。

一度動き出したら止まらない。  
激情が彼女を突き動かす。

「……なんて無情な女。悪魔！」

広間の端にいる白い司教の服に身を包んだ男が非難に満ちた声を上げた。

だが彼女の足は止まらない。  
血溜まりを駆け、親友の側に座り込む。

その体を無我夢中で抱き起こすと言葉にならない叫びを上げた。  
彼女の悲痛な声が沈んだ広間にこだまする。  
凍りついた広間が悲しみに震える。

彼女は親友を抱きしめ、その青白い頬に手を添え、必死に愛しい人の名を呼んだ。

「エル！目を開けて！！お願い！」

しかしその瞳はすでに彼女を捉えることができぬほど光を失っていた。

どんよりと濁ったそれは悲しみの湧き出る泉のように、止めどなく流れる涙を止める術を失っていた。

## 運命の瞬間2

最後の力を振り絞り、乙女はその白い手を震わせながら血と涙で汚れた彼女の頬に伸ばした。

彼女の頬に触れ、いつものように微笑もうとしたのだろう。

しかしその表情は強張って、歪だった。

祈るように伸ばされた手はその指先で彼女の頬に微かに触れると力尽きた。

無機質な動きで血溜まりに白い腕が落ち、床に溢れる血を弾く。

彼女の頬を涙が伝う。

動かなくなつた親友を抱き締めたまま、彼女は動けなかった。

受け入れたくない事実が徐々に現実となっていく。

無情な時が可憐な人の命を切り裂こうと牙をむく。

それらに刃向かうように強く親友を抱きしめるが、それでも流れ出る生命の源は止まらない。

「エル！目を開けて！エル！！」

問いかけても返ってこない返事に、皆がその乙女の最後の時を核心した。

「エ…エル…」

痛々しいほどに悲しい絶叫が広間に響いた。

血に染まった広間に冷たく陰鬱な空気が押し掛かる。

だが彼女には悲しみに暮れる時間はなかった。

広間の端で呆気に取られたように二人の姿を見つめていた者達のうちの一人が、冷たくなつた親友を抱き締める彼女を追いたてるように弾及の声を上げた。

「誰か、こいつを取り抑えろ！こいつは悪魔だ！見ろ！真つ赤に染まつた髪、肌。これがこいつの本性だ！！！」

その鋭い叫びに応えるように重たく閉ざされていた広間の扉が一気に押し開けられた。

外で控えていた騎士達が手に剣を持ちなだれ込んでくる。

迫る騎士達は大波のよう、刻一刻と押し寄せせるうねりは彼女を飲み込もうとした。

その眼差しはこの国の悪魔を討つことに一片の迷いも持っていないかった。

無表情な騎士達がその血だらけの悪魔を捕えようと広間の中心にいる彼女めがけて鋭い剣の切っ先を向けた。

怒号が鳴る。

大切な人を失つた彼女から、更に全てを奪おうと運命が襲い掛かる。

だがその身を切り裂かれる危機であるにも関わらず、彼女はその騎士達に目を向けようとしない。

ゆっくりと血の海に親友を寝かせると血で汚れた手を自らのドレスで拭つた。

その手でそつと親友の顔に触れ、悲しみに満ちた瞳に瞼で蓋をする。

血で薄汚れた、愁いを帯びた美しい顔が本来の穏やかさを取り戻した。

蹲り、冷たい床で眠る親友を祈るように見下ろした。

「…ごめんね。でも、約束は守る」

俯いたその頬に伝う涙はどこまでも清らかで、美しく煌めいた。彼女の頬を離れた小さな雫は永久の眠りについた美しい人の、血で汚れた頬に音もなく落ち、弾けた。

ゆらりと立ち上がり、ゆっくりと顔を上げた彼女。

血で染まった赤い髪の間、赤く染まった顔が徐々に顕わになる。

鬼気迫るその表情に皆が息を飲んだ。

赤一色の中、彼女の瞳だけが金色に浮かび上がって見える。

強靱な体躯を持つ騎士達ですら、その眼差しに射竦められ、躊躇するようにその動きを止めた。

戸惑ったように彼女を見つめる。

「血で染まった悪魔…。それで上々よ」

自分を遠巻きにする人々を見渡し、彼女は怒りに満ちた瞳を燃え上がらせた。

金色の瞳から血の涙が流れた。

血で真っ赤に染まった髪が風もないのに揺れる。

その瞬間、彼女は変わった。

待ちつけるのは棘の道。

一度踏み入れればけして引きかえることのできない、深く険しい受難の道だ。

だがその痛みさえも甘んじて受け入れる覚悟が金色に輝く瞳に宿っていた。

一際通る、朗として力強い声が血染めの広間に響いた。

「この王座を守るためならこの身が血で染まるつと腕が？げよつと構わない。この思いを果たす為なら悪魔とだって契約しよう！」

## 血に濡れた女王1

森は昼間であるにも関わらずどこまでも暗く、陰鬱であった。

北の小国エクロ＝カナンの王都ベルゼブルの端。

そこに鬱蒼と広がるゴモリの森はその国の者であっても森の奥に立ち入ることを躊躇する程に深い。

人の手を拒むかのように年中木が生い茂り、日の光を遮る。

一度迷い込めば自らの来た場所も、全て忘れてしまう忘却の森。

その森をハニーは懸命に駆けていた。

血で汚れた赤毛の髪を揺らし、道なき道を何かに追われるように森の奥へと走る。

暗い大地を踏みしめる足には何も履かれていない。

身に着けている白い薄手の服はボロボロに破れ、彼女の体の半分も隠してはなかった。

その滑らかで美しい肌も今はその服同様に薄汚れて、至る所に傷を作っている。

大陸の北に位置する為かどこよりも早く冬を迎えるこのエクロ＝カナン。

無謀としか言いようのない姿であった。

その気品に満ちた美貌は見る影もなく、形の良い眉を恐怖に歪ませている。

ハニーは焦燥に駆られた金色の瞳で何度も後ろを見つめた。

その視線の先、暗い木々の向こうに小さな灯が揺らめく。

一個ではない。

数十はあるだろう。

その灯は彼女の後を追うように大きくなり、暗い森を照らす。

近づく度にその数を増やす灯、地に響く足音、怒号。

それに捕まれば終わりであることを肌で感じ、彼女は恐怖に竦む体を震える手で抱きしめた。

傷だらけの体に鞭を打ち、更に森の奥へと逃げる。

その背に射るような野太い声が響いた。

「出て来い！エクロカナンが悪魔！血に濡れた女王！レモリー・カナン！」

（出て来いって言われて、誰がホイホイ出ていくもんですか！）

はあはあと肩で息をしながら、血に濡れた女王と呼ばれたちっぽけな乙女は後ろを振り向いた。

あの灯はまだハニーを見つけていない。

だが、それも時間の問題だ。

全力で走ってきた所為か喉が焼けるように痛み、肺が痺れる。

体中に焼けるような痛みが広がり、鼓動と共に疼いた。

「どっしりよっ…？」

気丈なはずの彼女の口からポツリと気弱な呟きを洩らした。

強い意志に満ちた瞳が不安に揺れる。

後ろ髪を引かれるように来た道をしきりに振り返るが、もう引き

返すことはできない。

追手に捕まれば死は免れないのだ。

先に進むしかハニーに道はない。

道なき道を何かに導かれるように、血の滲んだ足で進んだ。

空を覆う深い森は太古からそこに根を下ろしているであろう巨木がそこここに立ちはだかり、彼女の行く手を塞いでいる。

何度も木の根に足を取られ、突き出た岩にその身を裂いた。  
白い衣はもはや白とは言えないほどに真っ赤に染まり、流れるよ  
うな髪は血がこびり付いて汚らしくよごれている。

地に落ちた女神。

今の彼女はそう表現するに相応しい様相を呈していた。  
陰鬱な薄暗さが心に不安のさざ波を立てる。  
遠くから微かに聞こえる女王を呼ぶ叫びに華奢な肩を竦ませた。

「ダメダメ！わたしらしくない！」

被りを振ると自分を奮い立たせるように勢いよく両頬をパンパン  
と叩いた。

「なんたって、わたしは泣く子も黙る血に濡れた女王よ！悪魔に憑  
かれた女王が気弱でうじうじしてるなんて可笑しいでしょう。癪だ  
けど、あいつらが思う女王を演じてやるうじやない！」

そうでしょ？エルー？

そう心の中で親友に語りかける。

## 血に濡れた女王2

ハニーは自分を元氣付けるようにカラ元氣な笑いを上げた。  
だが金色の眼は一つも笑っていない。

でもその表情から憂いは消え、本来の氣の強さがわずかに戻ってきた。

（悲觀してる暇なんてない。今は前に進むまでよ！この先が地獄なのか、それとも天国かなんて些細なこと。どっちであろうとわたし  
が果たすべき使命は変わらないんだから。むしろ地獄から奇跡の復活を果たす方がドラマティックだわ）

顔を上げると、ハニーは自分に言い聞かせるように頷いた。

そして更に森の奥深くに進んでいく。

彼女には一つの確信があった。

何百年も昔、かつて神と呼ばれた者の神殿がこの深い森の奥にあるのではないかと。

誰も未だ見た者はないが、それでも文献などによればこのゴモリの森に神殿があったと伝えられている。

今のエクロカナンは大陸の国の殆どがそうであるように創造神である唯一の神を崇める一神教を国教としている。

しかしまだ唯一神の存在を人々が知らなかった混沌の時代、人々は救いを求めて、それぞれで思い思いの神をあがめていた。

だまされているとも知らずに……。

人々をだました邪神たちは人々の欲を食い物にする悪魔。

人々の心の闇を好み、混沌を是とした。

しかし闇があれば光があるように、ずっと静かにこの世を見守っていた神は一つの救いの手を差し伸べる。

それが神の子ユーティリア。

彼は迫害を受けながらも神の意思を人々に伝え、人々はやがて目を覚ます。

そして混沌の時代が終わりを向かえ、邪神たちは伝説の王によって一つの壺に封印されたという。

それ以降、この世界には悪魔などは存在しない。

千年以上も昔の話。

当の昔に忘れ去られ、風塵にさらされた過去の遺物。

どんな曰くつきのものでも構わない。

存在するなら、それ以上は望まない。

ただ身を隠す為だけの神殿だ。

一度神としてあがめられていたとしても所詮は邪神である。

人々の心をもてあそびだました悪魔などに興味はない。

いくら悪魔に取り付かれた魔女と呼ばれようとも、人の悪意や欲を食い物にする悪魔に助けを求めるつもりなど毛頭なかった。

(何が悪魔崇拜よ！勝手なことばかり言いやがって！何も知らないくせに)

追手が見えないことが心に余裕を生んだのか、自分の置かれたこの理不尽な状況に腹立たしさを感じた。

「大体悪魔憑きとか、サバトを開くとかありきたりなのよ！人のこと貶めるんだったら、もっとこう、オリジナリティに溢れたこと言いなさいよ！平凡過ぎて、鼻で笑ってしまうわ」

ぶちぶちと口の中で文句を言う。

悪魔憑きや悪魔崇拜、夜な夜なサバトを開き、赤子の血をすする。

すべてはエクロ「カナン」の女王に着せられた、根も葉もない悪意だ。

誰が呼んだか、ブラッディ・レモリー。

だが真実がまったく別のところにあることはハニーが一番よく知っている。

今、血なまこになって兵士たちが探しているのは紛れもないハニー自身。

彼女こそが、血に塗れた女王なのだ。

「まったく！人を陥れるんでももっと方法があるでしょ！やり方が汚いのよ！！」

そうハニーが叫んだときだった。

視界が開けた。

### 血に濡れた女王3

暗澹たる森の奥、深い木々に挟まれるようにそれはあった。

蔦が巻き付き、崩れかけた石の遺跡。

来る者を拒むかのように柱は倒れ、至るところが罅割れている。

かつての栄光の欠片もなく、闇に続くようにその遺跡は暗い口を開けて深い眠りについていていた。

「本当にあつたんだ……」

驚きに声を上げ、目を見張った。

長い歴史の闇に忘れられても、その遺跡は威厳と神秘に満ちていた。

古代の建造物とは思えないほどに堅牢で、崩れる前は荘厳な造りであつたことが窺える。

暗い闇に浮かぶそれはまるで夜の国、冥王の館のようであつた。

しばし言葉を忘れ、呆けるように遺跡を見つめていた。

だが森の奥からガサリと草をならす音と獣の唸るような声が聞こえ、怯えるように後ろを振り返る。

追手はまだここには行き着きそうにないが、その前に暗い森の住人である獣に襲われでもしたら元も子もない。

ハニーは一瞬逡巡したが、すぐに心を決めて遺跡へと足を踏み入れた。

石で出来た遺跡はどこまでも薄暗く、足を通してじんと伝わる氷のような冷たさは彼女の体の芯を凍らせた。

テラスのように広がった玄関を潜り、ハニーは不安げに奥へと進んでいく。

玄関の次に広がるのはガランとした広間だった。

両端に繊細な細工のされた飾り柱が奥へと誘うように並んでいる。玄関先から差し込む弱い光はその広間の入口までしか届かず、その先は完全に日の光の届かぬ闇で、その奥に潜む姿なき恐怖に身震いがした。

ひたひたと足音だけが果ての知れない広間に響く。

闇はその音すらも飲み込み、無に帰そうとした。

自らの肩を抱きしめるその腕だけが唯一の温もりで、希望であった。

暗闇は心の弱き場所を知っているかのように執拗にその隙に入り込もうとし、自分の背に絶望が近付きつつあること感じた。

（だめよ……。負けてられない）

## 血に濡れた女王4

ぐつと前を睨むように顔を上げ、更に深淵の闇目がけてずんずん進んだ。

暗闇の中にあつてその眼が見つめるのはすでに遠く彼方のゼル離宮。

そこに戻るまで何物にも負ける訳にはいかない。

強き信念によって動くその足が止まったのは広間の端に行き当たつたからだつた。

伸ばした手が闇に凍てついた壁に触れる。

それを辿るように彼女は右へ右へと進んだ。

この先に何かがあるのか、それは彼女にも分からない。

ただ運命に導かれるように足を向ける。

どこまでも続く壁が不意に途切れた。

どうやら先に進む廊下となつているのか、細い通路が奥へと広がっている。

広間と同じような闇にあつてもその通路は狭い分、見えなくとも圧迫感があり、奥には禍々しい者が眠っている気にさせられる。

躊躇するようにたたらを踏んだが、闇に留まるよりはましであると自分に言い聞かせ、ゆっくりと一步を踏み出した。

この先は地獄か、冥府か。

(どつちも同じか。まだ地獄の方が賑やかそうでいいわね)

そう自らの行く末を揶揄するように薄い苦笑を洩らした。

その時視線の先に小さな光が見えた気がした。

「あれっ？」

どこまでも続く闇の先に小さな点のような光がある。その輝きは深淵の闇に浮かぶ希望のようであった。

弾かれたようにその光目がけて走り出した。

すでに限界を迎えつつある体であるが、その光を前に湧きかえる心を止めることはできなかった。

近づくほどにその光は大きくなり、それが闇の通路の出口であることが容易に知れるまでになった。

「わあっ」

通路の果てまで駆けたハニーは感嘆の声を上げた。

今までの暗闇と対照的な光の洪水が彼女を包み、思わず目を瞑る。薄く眼を開き、徐々に光に慣れた瞳が捉えたのは、仄明るい日差しが差し込む吹き抜けの小さな広場だった。

左右、奥と彼女が立つ入口以外に三本の通路があり、その十字路に丸く広がるように、その場は開けていた。

高い天井を支える数本の柱に挟まれた中央、一部分だけ高くなつたそこには祭壇のような装飾された石台があり、それを囲むように床には幾何学的な模様が描かれている。

白い石の床はそつと差し込む光に照らされ淡く輝き、闇の奥にあつて光を放つそこはまるで月ようだった。

清浄にして神聖で、そこに漂う空気すら外のものとは違っていた。

「あつ」

呆然と見つめた先の広間に先客がいることに気付き息を飲んだ。祭壇の側に静かに佇む小さな子ども。

年の頃、十ぐらいだろうか。

エクロ「カナンの民らしくない金に輝く髪とどこまでも深い湖に似た青の瞳を持つ少年だった。」

少年はハニーに気付いていないのか、まるで起きたばかりの赤ん坊のような眼差しでおっと空気に漂う光を見つめていた。

## 血に濡れた女王5

彫刻のように端正な顔立ち、薔薇色の頬とくりくりした大きな瞳はまるで天使のように愛らしい。

幼さの残るあどけない表情をしているが、その中に凜とした気品と強さを感じる。

どこか時代を感じさせる黒の長い上衣にはフードがついている。まるで修道士のような服装だ。

しかしその簡素な服装もこの少年が着れば、上質な絹のドレスにも劣らないように見えるから不思議だ。

見惚れるようにその少年を見つめていたが、はたと我に返る。

(このような遺跡の奥に人がいるなんて！)

ただその驚きだけに囚われ、ハニーは少年が自分のことを知っているかもしれないなど露にも思わなかった。

もし少年が血に濡れた彼女の姿に怯え逃げ出し、血に濡れた女王を追う騎士にブラッディー・クイーンは遺跡にいるなどと進言すれば一貫の終わりである。

だがこの神聖な空間は追われている現実も、今まで感じていた先への恐怖をも霧散させる。

ただ一人の乙女として彼女はそこに存在した。

「どうしたの？」

恐る恐る、少年の表情を窺うように声を掛けた。

少年は弾かれたように振り向く。

被っていたフードが落ち、一つに括られた光の糸のような長い金髪が清らかな空気に揺れた。

少年は大きな瞳を更に大きく見開いて、八二一を見つめた。

(しまった…。この格好に怯えたのかも……)

少年の表情を自分への恐怖だと受け取り、浅はかな自分の行いを悔いた。

真実はどうであれ、今の八二一は血に濡れた女王、エクロカナンの悪魔だ。

この事実はすでにエクロカナン全土に広がっている。

今まで女王を尊敬の眼差しで見つめていた国民が急に掌を返したように石礫を投げつける。

これが現実だった。

この少年もどこかでその噂を聞いているかもしれない。

いや、それ以前に血に染まった衣を着た女の突然の出現は子どもに恐怖しか与えない。

「あの、怖がらないでね。あなたに用があるわけじゃないの。わたしはこの先に進むだけだから。だから…」

少年を宥めるように優しく声をかける。

闇で凍りついていた顔を引きつらせ、精一杯の笑顔を浮かべた。

少年と距離を取るように女王は壁伝いに別の通路に進もうとした。

しかし少年は彼女の心配とは裏腹にさして怖がる風もなく、不思議そうに彼女を見つめている。

透き通り、澱み一つない湖のような瞳が彼女に向けられた。

「…やあね、そんなに見つめないでよ。穴が開くじゃない。…ってなんちゃって…。ははっ、面白くないわよね…」

少年が怯えていると思いきこんでいる彼女は心の中で乾いた笑い声

を上げた。

（ははっ。 気の利いた言葉がまったく思い浮かばない）

しかし気を取り直して懸命に優しく見えるように笑い、両手を上げて、自分が何一つ少年を傷つけるものを持っていないことをアピールした。

## 血に濡れた女王6

(わたし、子どもって苦手…。どうしていいか分かんない)

じつと自分を凝視してくる少年に心底困った。

怖がられている訳ではないと徐々に分かってきたが、こころ興味津々に見つめられると戸惑ってしまう。

それに子どもはハニーの理解の遥か上をいく存在だ。

怖がられていないことに安心して近付けば、急に堰を切ったかのように泣きだすかもしれない。

昔、一度エル弟の世話をしたことを思い出した。

どうやってもエル弟は泣き止まず、結局ハニーは匙を投げたのだ。

『うちの弟はこんなに泣かないわ!』

そう言っつてうるたえるハニーを見てエルはこころ笑った。

誰もが心を許す、まるで春の陽だまりのような柔らかな笑み。

『だってハニーが緊張しすぎで、顔が怖いんだもの』

『で、でも』

『あなたがいつも弟たちにやっているようにすればいいのよ』

そう言っつてエルは彼女の弟を抱きしめた。

火の付いたように泣いていた彼はピタリと泣きやんだ。

自分には理解できない感情を持つ子どもをいとも簡単にあやすエ

ル。

ハニーはエルが魔法か何かを使って子どもを操っているのでは怪しんだものだ。

しかしそれを聞いたエルはいつも通りの笑みを浮かべてこう返してきた。

『ハニーには何かの呪いがかかっているのよ。子どもが寄ってこない呪いよ。でも、安心して。けして嫌われる呪いではないわ。ほら、その証拠にこの子はあなたの元に行きたいみたい』

そう言って、自分のドレスの裾を掴む弟をハニーの方へと向けた。

『ようは、慣れなのよ。慣れれば呪いは解けるから！ね』

遠い昔の、懐かしき思い出である。

あの心休まる一時が不意に脳裏に浮かび上がったのはあの頃と今の自分があまりにかけ離れてしまっているからだろう。

優しく自分を呼ぶエルの声。

強気に輝く金の瞳に一瞬憂いが帯びた。

(なんで……あんなことになったの?)

涙を堪えるように顔を歪める。

どう足掻いても起こってしまった現実には戻らない。

子ども好きな優しいエルはもうこの世にいないのだ。

だからこそこの国を守らなければならない。

エルが命を賭して守ろうとしたこの国を。

そして自分の命を。

感傷的に眉を寄せ、ハニーは自らの手を見つめた。

血と泥で汚れたか細い手。

(この手がもつと血で汚れようと、この決意を果たさなければ……)

固い決意を再確認し、ゆっくりと視線を戻す。

その眼がまだ自分を見つめている少年のそれとぶつかった。

吸い込まれるような不思議な瞳がハニ―の中の何かを探るように注がれている。

自分の心を読まれているかのような錯覚を起こす瞳だった。

その柔らかくも揺るぎない視線に心臓が大きく鼓動を打つのを感じた。

(何なの…この子)

戸惑い、足を止める。

そんな彼女を見つめる眼が不意に何かを見透かすかのように深みを増した。

「…何か来る…」

預言者のように確信に満ちた言葉だった。

## 血に濡れた女王7

少年の思いもしない発言に、今の今まで追われる立場であったこと忘れていた自分の浅はかさに舌打ちし、弾かれたように自分が来た道に顔を向けた。

（わたしの馬鹿！追われることを忘れるなんて、どれだけボケてんのよ！）

闇の沈黙を破るように遠く彼方から何か近付いてくるのが分かった。

微かな物音だが、次第に大きくはつきりとした音へと変わっていき。

これは彼女を追う騎士団の足音。

絶望へのプレリユードは追われる恐怖を呼び覚まさせる。体が緊張で固まる。

「逃げなきゃ……」

ハニーは奥へと駆けようとした。

一步踏み出して、気がついたように少年に視線を向けた。

然したる感情の変化も見せずに神殿の奥に続く通路を見つめている少年に不安がよぎる。

このままこの少年をこの広間に残していいのだろうか。

騎士団はこの幼い少年を助けてくれるだろうか。

もし自分を匿ったなどという濡れ衣を着せられ殺されでもしたら……。

逡巡したが、すぐに決断した。

真っ直ぐに少年目がけて、祭壇に駆け寄ると少年の肩を掴んだ。

「怖がらないで。今から来るのは……たぶん正義の騎士達よ。あなたが何もしなければ多分助けてくれる。…でも、もし女王を匿ったと疑われたら、泣きながら『女王に殺されそうになった。怖かった。騎士様達が来てくれてよかった』とわたしの逃げた方を指さしなさい」

少年の示した先に血に濡れた女王がいれば騎士団も少年の言葉を信じる。

ハニーにとっては危険な行為でしかないが、少年を守るためには仕方ない。

「…女王？」

「そうよ。エクロ＝カナン女王。ブラッディー・クイーンよ！」

自分でそう名乗るのは腑に落ちないが、事態は急を要する。

早くこの少年に自分がいかに危険な存在であるかを知らせなければならぬ。

「エクロ＝カナン…」

彼女の言葉を鸚鵡返しに繰り返す少年。

「ああもう！じれったい子ね！」

余裕なさげにハニーは唇を噛み、立ち上がる。

そして切迫した顔でどちらへ逃げようかと辺りを見渡した。

(真っ直ぐに行くか…それとも脇に逃げるか…)

敵は挟み撃ちにしてくるかもしれない。  
ただ今は、この深淵の闇によって守られている神殿がどのような造りになっているのか追っている騎士達も知らないことを祈るばかりだ。

「じゃあ、わたしは行くわ！元気でね」

そう言い残し、立ち去ろうと身を翻した。

足音が段々大きくなってきた。

広間の中に入ってきたのだろう。

彼らがこの通路を見つけるのも時間の問題だ。

(ほんと、しつこい男達ね！モテる女はつらいわね)

心の中で押し寄せる騎士達を皮肉るように笑ったが体は正直だ。

気丈なはずの顔は強張り、冷や汗が流れる。

「そつち、危ない」

「えっ？」

不意に手を掴まれた。

驚き振り返ると少年の曇りない瞳とぶつかる。

戸惑うように少年と目指していた道と交互に見比べ、そしてハニは息を飲んだ。

目指していた奥の道、その先に何か影が揺らめく。

ハニがその影の正体に気付く前に、それはあっという間にその形を現し、行く手を阻んだ。

## 血に濡れた女王 8

それは騎士ではなく、森の狩人である一匹の狼。

少年の身長ほどあろうかという大型の狼は黒い流れる毛なみに覆われていた。

鋭い眼差しでハニーを睨み、大きく裂けた赤い口から刃のような犬歯が見える。

ぐるると喉の奥から絞り出したようなうねり声を上げ、ハニーと少年を獲物と捉え眼を離さない。

「ええ！！何でこんなとこまで狼が入り込んできてるの？」

ハニーは殺気立った黒い獣に怯えたように身を引いた。

絶対絶命の状況であった。

目の前の狼から目が離せるような状況ではない。

しかし追ってくる騎士達の怒号が今にもここに辿り着きそうなほど鮮明に聞こえてくる。

側にいる少年を守るように腕で包み、彼女は恐怖に飲み込まれないよう狼を睨んだ。

睨み一つで狼を射殺せたらどれだけいいだろう。

血に濡れた女王に対する膨大な誹謗中傷の中にそれに似たものがあつた気がする。

悪魔と契約し、手に入れた邪眼で睨まれるとたちまち体が痙攣し、命を落とすというものだ。

（邪眼が本当にあるなら拝んでみたいもんだわ。本当にそんなこと出来たら苦労しないっての！）

遠くからブラッディー・レモリーを呼ぶ声がする。

悪魔と呼ばれ、追われる身であるが真実は狼すら撃退できない、ただの力なき乙女なのだ。

ハニーは腕に包んだ少年を守るようにぎゅっと腕に力を入れた。

「ほんとに！こんなことなら本気で悪魔と契約してるわよ！出来ないからこんな恰好で逃げてんじゃない！」

半ば開き直り、吐き捨てるように叫んだ。

その声に弾かれたかのように狼が飛びかかるうと身構えた。

「何、反応してんのよ！あんたに言っていないわよ！早く森に帰って！」

自分の浅はかさを後悔しつつ、言葉の通じぬ狼に懇願した。

しかしその言葉が言い終わらぬ内に狼はまるで黒い稲妻のような鋭さで二人の喉笛を噛み千切ろうと迫る。

「ぐっつと風を切り飛びかかる狼。」

「くっつ！」

少年を庇うように祭壇の向こうに押しやった。

そして自らも攻撃をかわすべく転がるように祭壇の外に逃れる。

彼女の体がそこを離れた瞬間、紙一重のタイミングで狼がぶつかのように飛んできた。

その勢いのまま床にのめり込む。

石の床が濁いた音を上げて割れた。

ゆっくりと頭を上げた狼の頭から細かな石の床の破片がばらばら落ちる。

狼の足元には大きな蜘蛛の巣状に石の床が罅割れていた。

(なんって石頭……)

寸でのところで狼の攻撃をかわしたが、その狼の攻撃力の高さに今さらながら恐怖を感じ、身を震わせる。

干からびた喉を潤うそうとゴクリと唾を飲んだ。

(あんなの喰らわされたら、一発で天国じゃない……ここまで来て狼に食い殺されるなんてお粗末な結末は嫌よ!)

どうすればこの事態を打開できるか、焦りで働かない頭を必死に稼働させ、次の作戦を立てようとした。

しかし懸命に働かしても遠くから迫りくる騎士団の足音が邪魔をし、おぼろげに浮かんだ形が一気に霧散する。

近づく足音、焦る気持ち。

狼は血に飢えた眼で離れた場所にいる二人を見比べている。

「ぐる……」

狼はその獲物を少年に定めたのか、ハニーではなく少年目がけ、助走なく走り出した。

黒い一陣の風が少年の身を切り裂かんと迫る。

「だめっ!」

## 血に濡れた女王9

ハニーは弾かれたように飛びだした。  
緊迫した顔に恐怖の色はなかった。

ただ体が動いた。

ぼんやり狼を見つめてる少年。

迫りくる狼。

少年に鋭い牙が迫るその寸前、彼女の体が間に入った。

ドン っと、想像を超える力で飛びかかれ、ハニーは激しく地面に転倒した。

強か体をぶつけ、痛みに唸る彼女の肩に飛びかかった狼が無情に鋭い牙を立てる。

「うつつ！」

押し倒され、押しつけられた牙。

熱を帯びた激痛が電光石火の勢いで肩から全身に広がる。

鼓動と共に痛みはその鋭さを増し、気が狂いそうなほどだ。

呻きながら、自分の下敷きになっている少年の方を向いた。

(逃げなさい…)

そう口を動かしたが、声にはならなかった。

肩から滴る鮮血が少年の顔にかかる。

少年はただ驚き、彼女を見つめるばかりだった。

「うつつ……」

押し寄せる痛みにも顔を歪め、眼を瞑る。  
閉じた瞳の向こうで痛みが炸裂したようにちかちか光っている。  
その形なき光の影の中に一瞬、懐かしき人の顔が浮かんだ。  
柔らかな微笑みを浮かべる一番大事な親友、エル。  
その姿は痛みの中に紛れるように一瞬で霧散した。

(行かないで！)

「エル！」

悪魔の使いにのど元を押さえられたまま、それでも必死に親友を取り戻そうと手を伸ばす。

ハニーは弾かれたように顔を上げた。  
その瞬間、視界が一瞬白く染まった。

「え？」

眩い閃光に目が眩む。

何が起こっているのか把握できない。  
噛まれている事実も、自分が置かれている状況もその白い光の中では全てが消えうせていた。

光の中で動くものに吸い寄せられるように叫ぶ。  
会いたかった人。  
どうか届いて。

「エル！」

伸ばした手が掴んだのは獰猛な狼だった。

一瞬のうちに霧散した光の残骸に目を細め、ハニーは押し戻った  
現実ですぐについていくことができない。

狼も光に驚いているのか、ハニーの喉元から口を離し、低くうなっている。

黒い毛に飛び散った彼女の鮮やかな鮮血が目に入り、自分の対峙した者への恐怖が湧き上がる。

(さっきのは何? いいえ、今はこいつのことよ。こ、こわい……どうしたらいいの?)

ハニーは恐怖をごまかすように喉を鳴らした。  
震える手に力を込める。

(……でも、このまま食われる訳にはいかないのよ。わたしにはやらなきゃならないことがあるんだから!)

絶望の淵にあってもその瞳はまだ希望を捨ててはいなかった。  
全てはこの国の為、そして大切なエルの為。

(こんな障害、へでもないのよ!)

痛みを耐えながら、素早く床に転がっている罅割れた床の破片を拾うと狼の頭目がけて殴りつける。

ゴツツと嫌な感触が破片を通じて彼女の手に広がった。  
しかし怯んでなどいられない。

「あんたが襲うからいけないのよ!! 痛いなら早くどっか行ってよ  
!」

叫ぶと同時に一番力を込めて狼の眼を殴りつけた。

キャン と弱弱しい犬のような悲鳴を上げると狼は距離を取るように離れる。

逃げるように狼から離れ、側で呆然としている少年を抱き締めた。緊張の為かうまく息が吸えない。何度も激しく肩で息をしながら、それでも八二一は狼を睨むことをやめなかった。

側では少年がぼんやりと八二一を見つめていた。自分を庇う八二一の裾を掴むと少年は小さくつぶやいた。まるで狼など眼中に入っていないかのよう。

「あなたは……」

「えっ？」

「あなたは僕の……」

「今はそれどころじゃない！話しかけるのは、こいつをなんとかしてから！無事に逃げてからでも遅くないわ！」

狼を睨みつけながら八二一は叫んだ。  
やるしかない。

自分は生きて帰らなければならぬのだ。  
決死の覚悟で祈りながら、手にした破片を狼目がけて投げつけた。  
もし、これが外れれば武器になるものは一つもない。  
だが手に持っている限りこの破片は破片でしかないのだ。

「お願い！当たって！！」

悲痛な叫びと共に勢いよく投げつける。  
鋭く風を切って破片が広間を横切った。  
しかし祈りに反して破片は明後日方向に飛んでいく。

狼から遠く離れた広間の端に破片はぶつかり、カランと音を立て石の床を跳ねた。

無情に転がっていく音が広間に反響し、余韻を引いて耳にこだまする。

「ああっ……」

いたいけな乙女の祈りも聞き入れない神の采配に落胆を顕わにした。

強がりな瞳が恐怖に染まった。

万策尽きて、少年を抱き締めたままぎゅっと目を瞑る。

(助けて……。もう何でもいい。神だろうと悪魔だろうと……)

神に祈っても通じないのだとハニーは身をもって知っていた。いくら祈ってもこの状況は一つも改善されなかったのだから。でも、それでも祈らずにはいられない。

このまま終わる訳にはいかないのだ。

奇跡が起きるなら、全てを投げ捨てても構わない。

(お願いよ！助けて!!！)

## 血に濡れた女王10

来るであろう衝撃に備え身を固くする。

瞼に映る無二の親友は生き生きした麗しい姿を失い、血に染まり虚ろな顔をしている。

悲しげな瞳が血の涙を流し、ハニーを見つめた。

あの、微かな声が籠ったように響く。

『タスケテ……』

その時、旋風が通り抜けた。

空気を切り裂き、鋭いうねり声を上げて突き刺さる音が広間に響いた。

「キャン！」

それと同時に甲高い狼の悲鳴が絞り出されたように聞こえた。その後はしんと水を返したような沈黙が広がる。

(えっ?何?)

突如聞こえた不審な物音に薄眼を開けた。

そして、息を飲む。

そっと開かれた瞳が捉えたのは深々と突き刺さった槍。

その槍で石の床に串刺しにされている狼。

力なく槍で打ちつけられ、その双眸には生気が見られない。

白い床に槍を伝って狼の血が流れる。

「なん…で?」

「そそるね。ずいぶん色っぽい恰好をしてるじゃないか」

急に降り注いだ聞き心地の良いテノールの声にハニーは弾かれたように振り返り、固唾を飲んだ。

広間の出入口に佇むのは左眼に黒い眼帯をした若い騎士。

彼は薄汚れ、傷だらけでボロボロの衣を纏ったハニーを上から下まで見下ろすと皮肉げに口の端を歪めた。

槍を投げ、狼を打ち砕いたのは彼であると容易に想像がつく。

(こいつ……)

少年を抱き締めたまま、その隻眼の騎士に厳しい眼を向けた。

狼を撃退した命の恩人だが、ハニーに向けられた視線は射るように冷たかった。

(なんて冷めた眼なの)

隻眼の騎士の瞳は深淵の闇より深い、曇りなき黒曜石の輝きを湛えていた。

その冷酷な瞳がハニーの身を凍りつかせ、身震いさせる。

(あれは人殺しの眼……。狼を殺すことに何の躊躇もないように、私を殺すことに何の迷いもない)

濡れたように美しい黒髪は無造作に後ろにかきあげられ、まとまりきれなかった幾筋もの髪がはらはらと形のよい額にかかっている。猛々しい騎士というより優美な貴族然とした容貌だった。

氷の華のような美貌、怖いほどに美しい姿。

隻眼の騎士は鎧など着けておらず、軽く遠出しに来たような軽装

だった。

黒い詰襟の服を着、その上に黒いマントを羽織っている。

マントの右肩には先が花のように開いた赤い十字架が大きく染め抜かれていた。

（あつ…あれは聖十字騎士団の紋章……そして黒に赤の花十字は…  
…聖域にいる司教だけが羽織れる特別なもの）

## 血に濡れた女王 11

目を見張った。

その国ごとに羽織る色が違うが、その肩に染められる紋章は同じだ。

聖十字騎士団とは、唯一の神に害をなす蛮族に共に立ち上がる為、聖域にいる教皇の呼び掛けにより各国から召集され結成される騎士団のこと。

初めて結成されたのはもう六百年前になる。

それ以来この騎士団は神の栄光を恐れぬ者や異教の民との戦いの為、幾度となく結成された。

大陸に居並ぶ列強の国々も聖域の決定には非を唱えることなどできない。

聖域がこの世界の秩序で、全てだ。

ハニーを追っているのは自国の騎士だけではない。

聖騎士団のシンボルである花十字。

それを掲げる騎士の存在はハニーが全ての国からも討つべき敵であると認識されている事実には他ならなかった。

「お察しの通り、聖十字騎士団だ。……しかし俺はただの集められたような、お手軽な騎士じゃない」

騎士がくつと乾いた笑いを洩らした。

禍々しい黒の瞳が血に濡れた女王を侮蔑するように細まる。

「教皇直属の異端審問官だ」

「教皇……直属。それって……」

息を飲むしかできない。

教皇は聖域の頂点に君臨するもの。

一番神に近い場所にいる者がハニーを世界の敵と認めただ。

「そう、ただの異端審問官ではない。審判を行う権利と共にその罪人を速やかに裁く権利を有する数少ない異端審問官。俗にいう死の天使だ」

その死の天使は言葉とは対照的なほど優美な笑みを浮かべて、ハニーに現実を突きつけた。

神の教えを惑わす危険思想者を速やかに調べ上げて処理をする。

教皇直属の異端審問官は死の天使と呼ばれ、教会によって保たれているこの均衡や法の世界に仇をなす者を神の名の下に裁く。

死をもって罪を購わせる冷酷な死の執行官なのだ。

噂でしか聞いたことのない死の天使の存在に目の前が歪んで見える。

(そんな……)

そう、ハニーは全てから見放されたのだ。

予想の上をいく存在の登場は彼女に衝撃を与えた。

愕然として言葉が出てこない。

ハニーを試すように隻眼の異端審問官はその驚愕の表情を見つめた。

その顔はどこまでも冷めていて、感情の欠片もない。

異端審問官は自らの形の良い唇をゆっくりとなぞると、その口を開いた。

「いい加減、鬼ごっこにも飽きた頃だろ？」

朗としたその声が広間に響いた。

その静かな眩きを飲み込むように、暗闇の通路を駆ける音が押し寄せた。

二つ、三つではない。

轟音となった幾重にも重なる足音、ガチャリガチャリと擦れる鎖帷子と甲冑の音が八二一の命の灯を揺らすカウントダウンを始める。

刻一刻とその時は近付く。

迫りくる死の足音に、彼女は固唾を飲んだ。

(この運命からはどう足掻いても逃れられない……)

辺境の地の若き女王。

悪魔と呼ばれ追われる身となった女王の決死の逃走劇はまだ始まったばかりである。

彼女の行く先に待ち受けるのは天使の頬笑みか、それとも悪魔の嘲りか。

## 地獄からの逃走劇

一際大きな怒号が響いた。

「ここにいるのは分かっているぞ！ブラッディー・レモリー！！俺はシーリエント聖十字騎士団団長のカイリだ！大人しく十字の前に膝まづけ！」

遂に追いつかれた。

広間の端で少年を抱き締め蹲っていたハニーは空気に響いた轟音に身を竦ませた。

ハニーを見つめる異端審問官は事態を面白がるように薄い口を歪める。

だが片方しかない瞳は一つも笑ってなどいない。  
凍てつく瞳は青白い炎を纏って、ハニーを獲物と捕らえて離さなかつた。

彼の立つ入口の向こうに無数の影が動くのが見える。

暗闇の中の影が段々その形を顕わにする。

息を飲む間もない。

闇の中からハニーを捕らえようと現れた荒々しい騎士達が暗い通路の先にその姿を現した。

無意識に少年を抱きしめ、立ち尽くす。

「あなたの…敵？」

不思議そうにハニーを見上げる少年は顔を半分血で汚していたが、それでもその美しさは損なわれてはいなかった。

天使のような紅顔が妖艶に見えた。

少年は何かを思案するように首を傾げる。

「……そう思いたくないけどね」

「彼らが消えることがあなたの望み？」

淡々とした少年の声にハニーはぎよつとした。

「違う！あなたとここから逃げ出すのが、今一番の望み。あなたは心配しなくていいわ。わたしが何が何でも助けるから。それが今の私の望みよ」

呟くように答える。

視界の端に隻眼の異端審問官を捉えたまま、どこかへ身を隠そうかと視線を巡らせた。

この少年をここに置いて、自分だけでも先に進まなければならぬ。

だが行動に移す前に騎士の大群がこの広間に雪崩れこんだ。

（万事休す…ね）

逃げるは遅すぎる。

覚悟を決め、恐怖心と共に息を飲んだ。

隣国シーリエントを象徴する青いマント、その右肩に切り抜かれたように浮かぶ純白の花十字。

聖十字騎士団のシンボルをはためかせた猛々しい騎士団が静謐とした広間を殺伐とした雰囲気に変えた。

その先頭に誰よりも強靱な体軀の大柄な男がいた。

明るい金髪の髪の下の厳つい顔は掘りが深く、隆々とした筋肉に包まれた岩のような体はまるで軍神のようである。

いかにもこの騎士団の団長然とした男は腰に差していた大剣を抜

き、その先をハニーに向けた。

淡い光を受けて切っ先が煌めく。

「観念して神の前に頭を垂れろ！お前に逃げ場などない！！」

## 地獄からの逃走劇2

彼の野太い声は暴風のように狭い広間に響いた。

その大音量にハニーも騎士団の者さえもビクリと肩を竦ませた。

「…カイリ殿、そんなにがならなくても。見た目はあれでも一応か弱い乙女。それに一国の王ですよ、たとえ地に落ちていたとしても…」

雪崩れこんだ騎士団を冷めた眼つきで見つめていた隻眼の異端審問官が熱くなつた騎士団長を諷めるように鷹揚と口を開いた。

カイリの言葉を諷めているようで、その実、彼の言葉ほどハニーを侮辱しているものはない。

冷酷な瞳が彼女をからかうように揺らめいた。

(ば、馬鹿にして〜!!)

異端審問官の言葉に腸が煮え繰り返る。  
負けじと射るように彼らを睨んだ。

カイリはその強い瞳に少したじろいだ様に眉を寄せた。

その横で異端審問官は好戦的な眼でハニーを見つめ返し、口元を綻ばせる。

大輪の花びらを広げ咲き誇る氷の華のように冷やかで、眼を奪われるほどに圧倒的な魅力の笑みだった。

だがどこまでも冷徹で凍てつくようにハニーの心に突き刺さる。

闇色の瞳に吸い込まれそうになる。

鼓動が大きく跳ねた。

「こんな神殿に逃げるなんて、悪魔の女王様も困った時は神頼みか。

まあ、神は神でも邪神だがな」

小馬鹿にしたように異端審問官が笑った。

澄んだ朗とした声だが、敵意を含んで突き刺さるように聞こえる。

「何にだって祈るわよ。この状況を打開できるならね」

「そうか。では、来世は人でなく蛆にでも生まれ変わるよう祈るんだな。そうすれば王から罪人に転落するなどという人生を歩まなくて済む」

「余計なお世話よ!」

淡々と返された悪意に激昂した。

この場で感情を荒げることがマイナスにしかならない。分かつてはいるが、人の一番腹が立つ部分を攻撃してくる目の前の男に一言叫ばずにはいられなかった。

「なんと凶悪な奴。この期に及んでまだ敵意を表すとは!」

カイリはハニーを野生動物を見るような眼で見つめ、おおっと息を飲んだ。

「いや、先を考えないで叫んだだけでしょ。ただの馬鹿です」

「おお、流石は司教殿! 黒衣を身に着けられているだけのことはある。このような状況にあつても冷静でいらっしやるなんて。私なぞは大きな敵を前に武者震いが止まらない」

緊迫した空気の中、がははっと快活な笑い声を上げた大柄な騎士

は瘦身の異端審問官の背を力任せにバンバン叩いた。

あまりの力強さに異端審問官が咽せ返る。

カイリは異端審問官の行動に不思議そうに首を傾げた。  
何故咽ているのか見当もつかないようだ。

「空気の読めない、力任せの馬鹿が……」

吐き捨てるように異端審問官が呟いたが、その声はあまりに小さく当のカイリには届かなかった。

「ところで、何ゆえ司教殿がお一人でブラッディー・レモリーを追っていらっしやるのだ？」

カイリの興味がハニーから離れ、美貌の異端審問官に移った。

異端審問官は面倒さをあらわにしてため息を吐く。

その人を小馬鹿にした態度に普通の人なら怒りを感じずにはいられないが、どうやらこの団長さんはかなりの鈍感らしい。

いかつい顔を異端審問官にずっと向けると、言葉を待った。

「司教殿、なぜお一人なのですか？連れの者とはくれたのであれば私どもが安全な場所までお送りいたしますぞ」

「余計な気遣いですよ。私は聖域の意志でここにいる」

これ以上は答えまいとばかりにカイリから視線をはずすと異端審問官はハニーに目を向けた。

冷たく、底の知れない瞳が好奇に輝く。

どこまでも澄んだ、冷酷な声が広場に広がった。

「まだ名乗っていないかったな。お前を討つ者の名だ。餞に教えてや

ろづ。俺はクワインのサリエ。お前を歴史の中から消してやるよ

### 地獄からの逃走劇 3

サリエと名乗った美貌の異端審問官。

その鋭い、全てを見透かす瞳にハニーは無意識に少年を抱きしめた。

人の視線をここまで怖いと感じたことはなかった。

何十人という騎士団より一人の異端審問官がこんなにも怖いなんて。

不安と恐怖に身をすくませるハニーもにカイリは厳しい眼を向けた。

「子どもを盾にするなど、どこまでも無情な女だ」

少年を包み込むように抱き締めたハニーは、少年を人質として盾にしているように見えないこともない。

正義感の強そうなカイリがそう感じたのは至極まっとうなことだ。仮にも自分たちが追っている女王の側に年端もいかぬ子どもいれば、心配するのが人の道。

まったく少年に触れないサリエの方がおかしいのだ。

(この子にとってはいい誤解ね。隙をつけてこの子をあっちに押しやればこの状況から助けてあげられるかも……)

緊張で渴いた喉を鳴らした。

飲もうにも全てが干からび、唾すら出てこない。

「観念しろ！お前は完全に包囲されている。大人しく子どもを離し、投降しろ！」

轟音でカイリが叫んだ。

ハニーは大きく息を吸うと少年から手を離し、傷ついた肩に手をやって立ち上がった。

そして一歩少年から距離を置く。

「そつだ。まずはその子を離せ！全てはそれからだ」

カイリが叫ぶ。

その側でサリエが無表情にこちらを見つめている。

その視線が気になったが、今はそれどころではない。

(この子を助けなきゃ)

よるけるように一歩づつ少年から離れる。

そんなハニーを少年は不安そうに見つめた。

(大丈夫よ、だから、今は全てを任せて)

金色の瞳を少し和らげ、騎士団達に気付かれないように眼で訴え掛けた。

どんな言葉で貶められても彼女は高潔そのものだった。

どんな劣勢であれ、誰かを巻き込むなどできない。

「ふんつ。どう足掻いても逃げられないようね。なら、足手まといのこの子どもは置いていくしかない」

出来るだけ物々しく、非情な血に濡れた女王を演じた。

その言葉に騎士達は手にした槍を構え、ハニーを討とうと身構える。

「少年をこっちに渡せ、そして大人しく投降しろ！」

「誰が大人しくするものですか！わたしを何だと思ってるの？わたしは血に濡れた女王なのよ？あんた達の言葉なんて聞き入れる訳ないじゃない。……けど、この子だけは返してあげるわ」

また一步下がり、少年に向こう側へ行くように眼で促した。

だが、滔々と流れる水のように透き通った瞳はハニーを見つめたままだ。

「何してんのよ！早く行きなさい！」

「さあ、子ども。こっちへ来るんだ。怖かっただろうが、正義の騎士が来たからにはもう大丈夫だ」

カイリは懸命にその形相を崩し、少年に微笑みかけた。だがいかつい顔がゆがんだだけで、怖さはさらに増す。少年はぼんやりとハニーとカイリを見比べる。

「あなたの敵？」

「そうよ、そしてあなたの味方になるはず」

懸命に血に濡れた女王を演じるがこわばった顔に浮かんだのは弱々しい笑みだった。

「僕の味方？」

「そう。だから……」

「待て」

二人のやり取りに静かに口を挟んだのは状況をじっと見つめていた隻眼の男だった。

## 地獄からの逃走劇 4

「その子ども、何故こんな深い森の神殿にいるんだ？その子どもこそ血に濡れた女王が契約した悪魔かもしれないぞ？」

「そんな訳ない！」

ハニーは叫んだ。

漆黒を纏う騎士は彼女の思惑を全て裏切る。

「何だと！この子が悪魔だって！こんなに愛らしい少年が……」

サリエの言葉を簡単に信じ込んで、カイリが息を飲んだ。

「悪魔とはその力が邪悪であればあるほど醜悪な姿を隠して、天使のような顔で現れる」

「違う！この子は悪魔なんかじゃない。ただここで出会っただけよ！」

「正体を見破られて狼狽しているのか？」

噛みつかんばかり叫ぶと、サリエが冷たい一瞥を向けた。

「……思ったことをすぐ顔に出す癖、改めた方がいいぞ。まあ、今さらかな？運命は決まっているんだ」

「ふざけないで！悪魔となんか契約する訳ないでしょ……！」

噴き上がる怒りをそのままに叫んだ。

冷静に凶星を差してくる目の前の男が怖い。

その恐怖に打ち勝つように眼を鋭くする。

ハニーの叫びに単純なカイリは少年を悪魔だと認識したらしい。

片手に握られた大剣を振りかざし、後ろに控える騎士団に号令をかけた。

「あれらは悪魔だ！姿形に囚われず、神の栄光を脅かす者をひっ捕らえよ！血に染まった悪魔をけして逃すな！！」

うねりを上げ、その声は衝撃となって広間の床を震わせた。

賽は投げられた。

鋭く空を切る音、振り下ろされた大剣。

それをかわ切りに騎士達の怒号がこだました。

勇猛果敢な騎士の雄叫びは吹き抜けの天井を突き抜け、天を目指し駆ける。

(なんでこんなことに……。あいつが余計なことを言うから、この子まで巻き込んでしまった)

うるたえ、少年を自らの方に引き寄せたハニーはくっつと喉を鳴らした。

(迎え撃つしかないのかしら……。でも、わたしには何も無い)

狼すら撃退できないハニーはただ前に迫りくる騎士団を睨むしかできず、振り上げられた剣に自分の運命を悟った。

(…ごめんなさい。わたしにはあなたの無念を晴らせない)

祈るように天を仰ぎ見た。  
降り注ぐ日の光は暗い神殿の中にあつて、外と変わらず清浄だ。  
怒号が押し寄せる中、尽きる運命の前に成すすべもなく立ち尽くす。

「エル……」

（一目あなたに会いたい）

強く煌めく金色の瞳に感情が溢れ、薄汚れた頬に一縷の雫が落ちた。

透き通ったその雫はそのまま頬を離れ、地に落ちていく。  
音もなく、小さな雫が凍てついた神殿の床を叩いて、弾けた。

その時。

「あなたは僕の全てだから。あなたが望むままに……」

広間を埋め尽くす怒号の中、その声ははっきりとハニーの耳に届いた。

凜としたその声は、まるで闇の中を照らす一条の光のようだ。

ハニーを討たんと押し寄せてくる騎士がその手に持つ剣を振り下ろそうとした時、ハニーの手が不意に掴まれ、思わぬ力で引っ張られた。

「ええっ？」

「こっち！」

驚き振り返ったハニーに構わず、その手を握った少年がすぐ側の通路に彼女を引っ張った。

## 地獄からの逃走劇 5

「この期に及んでまだ、逃げるのか」

静かな、それでいて事態を面白がっているような隻眼の男の声を背に感じた。

しかし振りかえる余裕などない。

思いのほか早い少年の足についていくだけで彼女は精一杯だった。通路はどこまでも暗かった。

後ろに遠ざかる光が恋しく、地獄に堕ちてゆく感覚がする。

二人は暗闇を懸命に駆けた。

その後ろを騎士の大群が押し寄せる。

息は苦しく、彼女の体はもう限界だった。

しかしその足を止めることは全ての終わりを意味している。

暗闇を少年に導かれるままに駆けた彼女がやっと自らの体を視界に捉えることが出来たのは暗闇において何度目かの角を曲がった時だった。

拓けた視界の先に広がるのは先ほどの広間よりも大きな場所だった。

高い天井とそれを支える堅牢な柱。

くすんだ灰色の石畳が続き、所々苔むしている。

建物を支える両端の壁はなく、その代わり鬱蒼とした緑の森が遠くに広がっていた。

その石畳の上には二列に頑丈そうな石棺が並べられていた。

一列十数個あるだろうそれはどれもびっしりとした苔で覆われ、角は長い間雨風に曝された為か全て欠けている。

目の前に広がるそこはこの神殿の霊安廟か何かだろうか。

役目を終えた殉教者達のように永遠の眠りに就いている。  
蔽かな雰囲気で並べられている石棺に目を見張ったハニーの手を  
少年が強く引いた。

「ここに隠れよう」

「えっ？」

指し示されたその場所と強い瞳で自分を見つめる少年に彼女は戸  
惑った。

その背に、今まさに襲いかからんとする騎士団の足音が響いた。  
暗闇にまかれ、彼女を見失った騎士団だが、優秀な騎士団はす  
ぐにハニーの逃げた方を見つけ、追いつかんとしている。

押し寄せる死の足音に焦燥に駆られた金の瞳が一瞬揺れた。  
だがすぐに強い意志に溢れた輝きが灯る。

(迷っている暇はない。わたしには果たさなければならぬ使命が  
ある)

意を決して頷く。

そして余裕のない強張った顔に無理やり笑顔を浮かべた。

「あなたって、不思議な子ね。でも、あなたと出会えてよかった！」

「僕もだよ」

少年は大きな瞳を細め、少し悲しげに微笑んだ。

「あなたが僕の全てだから」

## 地獄からの逃走劇 6

「何処へ行った！ブラッディー・クイーン！」

石棺の並ぶ広間に鋭い声が響いた。

押し寄せる騎士団の足音は地鳴りのようにこだまする。身を隠したハニーは暗闇の中で体をびくりと竦ませた。その体に安堵を与えるように少年が優しく寄り添う。

二人の頭上にある蓋が騎士達の叫びで振動し、小刻みに揺れた。

「どっちに行つたのだ？それにしてもなんて足の速い女だ」

「くっそ！外にも通じてるじゃないか！」

進むべき方向を失つた騎士団の戸惑いの声がかくもって聞こえる。ざわざわと騎士団の声や踏み鳴らされた石の床と甲冑の擦れる音が幾重にも重なって狭い空間に響いた。

その雑音の中、一際流麗に響いたのはあの異端審問官の声だった。

「石棺の中…ということも考えられるな。」

どちらへ進んでいいのか分からない騎士団とは違い、彼の声はどこまでも落ち着いている。

ハニーは聞こえてくる冷徹な声にビクリと体を震わせた。

（やめてよ！変に格好つけて頭巡らしてんじゃないわよ！！ブラッディー・クイーンはもうこの場にはいないのよ。早くどこかへ行つて！）

暗闇の中で必死に祈った。

サリエはカイリの数倍頭が切れる雰囲気を持っていた。

勇猛ながらも誠実で人の良さそうなカイリと違い、冷酷が服を着ているかのように厳しい彼は彼女の言葉や命乞いに耳を貸すこともなく、一片の躊躇なく刃を向けるだろう。

ただただ息を潜め、自分を追い込む恐怖に戦慄した。

闇の向こうから聞こえるもの音だけが彼女の全てだった。

(早く行つてたら！)

祈りに反して、じやりつと砂を踏む音が近くでした。

冷や汗が背を伝う。

震える体を押さえつけるように、狭い空間で体を抱きしめる。

(ひっ)

「隠れるなら、どの石棺を選ぶか」

まるでハニー達が隠れている場所を知っているような口ぶりだった。

じらしてじらして、一番恐怖に包まれた瞬間に見つけてやるつもりあくどい意図があるように思えてならない。

彼の足音は彼女の側を離れようとしなかった。

(いや〜どこまで陰険な男なの！足音すら嫌味に聞こえる)

生きた心地がせず、全身に冷や汗が流れるのを感じた。

張り裂けそうなほど心臓が高鳴る。

「ん？これは血の跡か？」

バサツと床にマントが落ちる音がした。

(血の跡ですって、まさか噛まれた傷から零れたのかしら？ 気をつけたつもりだったけど、焦って隠れたから………どうしよう)

暗闇の中で頭を抱えた。

いくら気丈なハニーでもこれ以上のプレッシャーには耐えられない。

「面白い。どこまで逃げ切れるか」

死の宣告のように冷めた抑揚のない声。

それと同時にズリズリと重たげなものが擦れるような耳障りな音が響いた。

(石棺を開けようとしてるの?)

暗闇でそれを聞くハニーは気が気ではなかった。

ずらされる音が響く度に心臓は早鐘を打ち、血が逆流するかのような恐怖が押し寄せた。

(やめて！ もうそれ以上は… ねえ！ お願いだから！！)

しかし石棺を開けようとする音は止まらない。

泣きそうになりながら、祈り続けた。

(神様！)

眼を瞑り、両手を合わせた瞬間だった。

不意にその音が止まった。

祈る手をそのままに暗闇の向こうを見上げた。

暗闇の向こうでは相変わらず騎士達の雑音が聞こえる。

しかし身を切り裂くような、あの石棺をずらす音は止まっている。

「かなり重いな。いくら悪魔に憑かれていても女の非力でこれを開けることはできない」

異端審問官の呟きに、ハニーは安堵し泣き声交じりの吐息がこぼれそうになった。

それを懸命に耐え、異端審問問たちの声に耳をそばだてる。

(た、助かった……)

「カイリ殿、あいつはここにはいないでしょう。この神殿にいると見せかけ、多分壁のない横から外に逃げたでしょう。ほら、あの女は自分の姿を隠す為に血を拭っていったが、ここから向こうへ幾つか血痕が点在している。拭き忘れたのでしょうかね」

「まことか！流石司教殿！」

すぐ側でカイリの感心する声がした。

「そうと決まれば…全員あちらだ！北へ向かえ！賊はそちらに逃げた。けして逃すな！悪の芽を摘み取るまでは安心できぬのだ!!」

カイリの猛々しい声が闇すらも震わした。

「…どこまでも芝居がかった男だな。そんなにテンションが高くて何時までもつやら……」

カイリに合わせるように駆ける騎士の大群の轟音の中、サリエの鼻で笑う声がした。

だが、騎士団の絶叫に飲まれ、その声は彼女には届かなかった。

「それはあの女も一緒か」

## 地獄からの逃走劇 7

どれほどの時間が経っただろう。

ハニーは暗闇の中でいつまでも祈っていた。

その闇は何処までも静寂で、彼女を脅かすものは何一つなかった。

「もう大丈夫だよ」

ハニーは柔らかい少年の声に弾かれたように顔を上げた。

少年が押し上げた床石の上から薄明るい光が落ちている。

弱い光、しかしこれほど神聖な光を彼女は感じたことがなかった。

二人が隠れていたのは一番入口近くにある石棺の側の床の下。

一部分だけ外すことが可能となっていた石畳の下は空洞となっており、二人が身を寄せ合うぐらいの空間になっていた。

そこから這い出し、初めて安堵のため息を吐いた。

サリエが側の石棺を開けようとした時、これほど心臓が止まりそうになったことはなかった。

結局彼は二人の居場所に気付くことなく、別の方を示唆した。

間違った推測は彼の驕った考えから生まれたのか。

しかし喜ばしい誤算。

絶対絶命の機器から脱したハニーは石棺に背を預け、新鮮な空気を肺いっぱい満たした。

やっと一心地つけた。

その安心感が全身を巡った瞬間、肩に激痛が走った。

今の今まで忘れていたが、狼に噛みつかれた部分が鼓動と共に疼きだす。

(これも…生きている証ね)

肩を押さえ、痛みを照るように身をかがめる。  
強がってみるが、痛みは増すばかりで体に入らない。

「大丈夫？」

少年が心配げに覗き込み、自らの身を包んでいた上衣の裾を何の躊躇もなく裂きだした。

「ちょ、ちよつと！」

「傷の手当てをしないと」

止めるハニーの言葉を聴かず、少年はそつと肩口に布を当てた。

「っ！」

「ごめん。痛かった？」

「ううん。だ、大丈夫よ。ありがとう」

一生懸命に衣を巻き付けた少年は縛り上げたその部分を温めるかのように手を当て、祈るように瞳を閉じた。

少年の優しさに痛みが引いていくように感じる。  
気休めにそう感じるのだろうか。

いや、確かに熱を持った患部が疼くのをやめた。  
先ほどまでの倦怠感も薄れゆく。

「もういいわ。だいぶ楽」

少年のおかげなのか。  
それとも自分が疲れすぎて感覚が狂っているのだろうか。

（この子のおかげだと思っうほうがいいわね。神がわたしに与えた最後で、最高の奇跡だわ）

ハニーは複雑な笑みを浮かべると彼の頭を撫でようと手を伸ばした。

しかしその手が血で汚れていることに気付き、躊躇するように手を止めた。

その手を少年が優しく両手で包み込む。

朽ちた神殿のその一部分だけ穏やかな空気が流れた。

少年の手の温もりが体に移り、心に沁み込んだ。

追われてばかりで荒んだ心を溶かすかのような温もりに、目頭が熱くなる。

城を離れ、このような最果ての森で傷だらけの女王。

豪華な衣装も誰もが跪く権力もない、今はちっばけなただの乙女でしかない。

（それでも側にいて、温もりをくれる人がいる）

「ありがとう。逃げずにいてくれて」

それがハニーにとって一番の奇跡だった。

目頭を拭い、少年に目を向ける。

泣いている姿を見られたことが恥ずかしく、気まずげに微笑みかけたが、少年はそんなこと気にしないとばかりに愛らしい笑みを浮

かべた。

ふと思いついたようにハニーは小首をかしげた。  
この少年はどこから来たのだろう。

何故、こんな森の奥深くに一人でいたのか。

(もしかして…迷子?)

ハニーは少年の身の上が不安になり、矢継ぎ早に質問を向けた。

「あなた、名前は？親はどこ？家は？」

少年は不思議そうに首を傾げた。

ハニーの必死さとは対照的にやたらに落ち着いている。

6つ以上も年上であるハニーより大人びている。

「名前？」

「あなたの名前よ？いつもなんて呼ばれてるの？」

「エル」

困ったように眉を寄せ、絞り出したように小さな声で少年が呟いた。

## 地獄からの逃走劇 8

その言葉に驚き、問い詰めるように少年の肩を掴んだ。

「エル！あなた、エルっていうのね！」

まさかこんな場所で『エル』の名に出会えるなんて。  
ハニーは襲い掛からんばかりの勢いでエルの肩を掴んだ。

「あなたに呼ばれるまで自分が何か分からなかった。頭に霧がかかったみたい。でもはつきりと分かるのはエル。これだけ」

困ったように俯く少年にハニーは衝撃を受け、しばし言葉なく少年の肩を掴んでいた。

彼の言葉はひどく抽象的で判断に困る。

(記憶喪失なのかしら？もしかしたら親に捨てられたのかも……)

捨てられたショックで名前以外を忘れたのだろうかとハニーは妄想をたくましくする。

他人を気にする余裕など一つもないはずなのに、ハニーの金に輝く瞳から涙がこぼれた。

手を伸ばし、少年を強く抱き締めた。

少年の肩が自分の傷口に触れ痛みが走ったが構わずに力を込める。

「えっ？」

「大丈夫。大丈夫よ！きっと思い出せる！」

戸惑う少年を言い含めるように強く言い放った。

その言葉は少年の為であり、また運命に翻弄される自分への檄でもあった。

城にいる幼い弟王子に言い聞かせるように少年に視線を合わせ、頷いた。

「きつと何か怖いことがあって一時的に忘れているのよ。でも大丈夫。あなたの名前はとっても素敵な名前よ。……わたしの知っている人と同じ。その人は誰よりも気高く、そして慈愛に満ちていた」

瞳に浮かぶ大切な人。

やわらかく微笑む美しい人の面影が目の前の少年とかぶった。

「一緒にお城に行きましょう。お城に行けば、あなたの親を捜せるかもしれない。……確かにすぐには無理だわ。なんたってわたしは城を追われた罪人。聖域に連れて行かれる途中で脱走してきたんだもの。でも、でも絶対に真実を取り戻す。この国を利用させたりなんかさせない！」

城で待ち受けているのは女王の帰還を歓迎する家臣ではなく、悪魔の女王の首を掻っ切るうとしていた騎士達だ。

しかし警え針の筵であつてもあの場に戻らなくてはならない。

エルに聞かせるというよりも自分への誓いだ。

大きく息を吐き、もう一度強く少年を見つめた。

「神なんていないと何度も絶望したわ。でも、天はわたしにあなたという神の子を遣わされた」

曖昧な、どこか困った顔で微笑むエルにハニ―は力強く頷いて見せた。

「よろしくね、エル！」

「はい、女王様」

差し出した手をたどどしく掴んだエルは気恥ずかしそうに上目使いにハニーを見上げた。

先ほどのサリエヤカイリらとのやり取りで、ハニーがどういう立場にいるのか把握しているのだろう。

あの時は始終ぼおつとしていたのに、見た目以上にしっかりした少年である。

「女王様はちよつといただけないわね。……まあ女王なんだけどね。なんて言うか面と向って言われると恥ずかしいというか……。色々複雑というか……。わたしのことはそうね、ハニーでいいわ」

「ハニー？」

「甘い甘い、蜂蜜のことよ。わたしのあだ名」

不思議そうに首を傾げるエルにハニーは片目を瞑ってみせた。

「いいこと、けして血に濡れた女王や間違ってもブラッディ・レモリーなんて呼んだら承知しないわよ！」

冗談半分、眉を寄せてエルを軽く睨んでみた。

だがエルはきよんとするばかりである。

これには威厳たつぷりに口を開いた自分が恥ずかしい。

ハニーは顔を赤らめた。

「ブラッディー・レモリー？何それ？」

「し、知らないの？そ、そうよね、記憶がないんですもの。はは…忘れてちょうだい」

「分かった。ハニー様」

「様も禁止！」

「はい！ハニー！」

二人は顔を見合わせた。

そしてどちらからという切掛けなく、顔を寄せ合って笑い合った。屈託のない笑い声がいつの間にか日が朽ち果てた冥府に続く神殿に響いた。

冷たい石の床に落ちた二つの影は寄り添うように二人はお互いを励ますよう笑い続けた。

孤立無援の悲劇の女王。

目指す城は遙か遠く、道のりは険しい。

その中であって得た仮初の休息。

この闇の先に待ち受けているのは天使の救いか、それとも悪魔の囁きか。

## 孤高の王子

深き森の側に佇むゼル離宮の一室。

薄暗いその部屋でエクロ「カナン」の第一王子、ウヴァルは愁いを帯びた瞳を窓の外に向けた。

空はどんよりと曇り、くすんだ灰色が城に重くのしかかる。

かすかに空から届く霞んだ光のみを頼りに、眼下に広がる鬱蒼と広がる忘却の森を見つめていた。

宝玉のような硬質な雰囲気を持つ、端正な顔立ちの少年であった。エクロ「カナン」の民の特徴を色濃く受け継ぐ白銀の髪と銀がかった青い瞳を持つ。

静謐とした湖沼に咲く水仙のように清浄で麗しい容貌と細身の体軀はまるで大人になりきれない少女のように繊細だ。

しかし危うげな魅力を持った十六の少年の顔には王族たるに相応しい気高さがあった。

その高潔な表情には大人に成りきれない不安定さ故、他に染まることを厭う潔癖さが窺える。

長いまつ毛に縁取られた瞳は切れ長で、静かに燃える信念の炎を宿していた。

その側には寡黙な青年侍従が控え、主の言葉をただ静かに待っていた。

「姉さんはどうなっているのかな…?」

苦痛な表情と共に吐き出された独り言。

視線はまだ灰色の空の下、不穏な風に吹かれる深淵の森に向けられている。

ウヴァルは何気なく口に出た言葉に一瞬驚いたように、その瞳を揺らした。

しかし一度口から出たものは取り消せないとばかりに自嘲気味に口の端を上げる。

今にも雨が降り出しそうな空のように、彼もまた不安定だ。

侍従はただ黙して、目を伏しているのみ。

ウヴァルもまた侍従の答えなど求めていないのか、自らの心情を吐露するかのように淡々と語り出した。

ウヴァルが抱えるには、この一連の騒ぎはあまりに大きく底の知れない闇に包まれていた。

「どうして、こんなことに……。こんなつもりじゃなかったんだ」

泣きそうなほど悲痛な声。

曇った空の所為か、いつもより顔色をなくした頬がこけて見える。伏せるまぶたに長いまつげの影が映った。

表情は変わらずとも、彼が抱えるものの大きさを感じる。

目に浮かぶのは、自分の名を呼ぶ姉の目映い笑顔。

脳裏に焼きついた光景が目の前に広がる度に胸の奥で何かが千切れるように暴れる。

心に蓋をしても、ふとした拍子にあふれ出てくるこの感情はなんと表現すればいいのか。

懐かしさか。

いや、それだけではないとウヴァル自身知っていた。

姉への憧憬と慕情。

敬虔な巡教者が、神の愛を疑わぬように。

そしてその絶対的な存在の前にその身の全てを預けるように……。ウヴァルにとっての神は、姉だった。

それ以上など考えられない、至高の人。

しかし幼い子どもならまだしも、大人になるにつれ理性がその感情に迷いを抱かせる。

誰に言えるだろうか。

姉に恋焦がれているなど。

どれだけ自分自身に否定してみても、この胸に焼きつく思いは消せない。

答えを探して、深い闇の中を堂々巡りし続けてきた。

しかし……その道が不意に途絶えた。

彼はその絶壁に立って、ただ呆然とするしかできなかった。

どれだけ後悔しても、彼の側にあの目映い人はいない。

「本当に僕は……こんなつもりじゃ……」

「しかし、ウヴァル様」

「分かっている。分かっているんだ、アスター」

俯き、肩を震わせると絞り出すような声で侍従の言葉を遮った。  
しばしの静寂。

全ての痛みに耐えるようにウヴァルはぎゅっと身を縮こまらせる。  
自分自身を抱きしめるように両手で覆う。

自分の中の負の感情を必死に押し留めているかのよう。

こうでもしないと気がふれてしまうのだろうか。

抱え込んだ感情を全て飲み込むように静かに息を吸うと、ウヴァルはゆっくりと顔をあげた。

その顔から苦悩や悔恨の情は窺えない。

深く、静かに揺れる情熱の炎を宿した瞳が全てを貫くかのごとく前を見据える。

硬く結ばれた口がゆっくりと開いた。

その堂々とした姿はまるで威厳に満ちた為政者のよう。

「全てはこの国の為、そして姉さんの為だ」

その声はどこまでも硬く、無情の響きを灯していた。

エクロⅡカナンに降り注いだ厄災の原因はなんだったのか。  
全てはエクロⅡカナンの大司教ハールト・マールトが聖域  
に対し、エクロⅡカナン女王レモリーの異端思想を密告したことに  
始まる。

聖域の決定は世界の絶対だ。

聖域は絶対不可侵において、世界唯一の干渉者だ。

聖域が世界の理性と法を司り、その権力は各国の王権など及ばぬ  
ほどに強力だ。

ただ聖域自身が一王国に対して直接的に動きかけることなど、聖  
域が築かれて千年、一度もなかった。

その唯一の例外となった彼女にかけられた嫌疑は、神への裏切り。  
世界を千年前の混沌に戻そうとしていると。

そして彼にその切掛けを与えたのは他ならぬウヴァル自身。

姉レモリーは明らかに常軌を逸した思想に囚われていた。

## 孤高の王子2

深き森に囲まれる小国エクロカナン。

この国で、レモリー・カナンが王位に就いたのは彼女がまだ十四の時だった。

まるで湖上に浮かぶ月のようだとその美しさを湛えら、各国の王侯貴族から『月の女王』と呼ばれた若き女王。

その神秘的な魅力に、見る者は皆感嘆なしではいられないとまで謳われたほど。

だが大国の王国貴族の多くはエクロカナンを取るに足りない存在だと考える傾向にあった。

特にあまりの年の若さに、軽んじられてさえあった。

社交界に彼女が現れても、その考えが彼らの態度に如実に表れていた。

だが彼女もそれを当たり前に受け止め、けして派手なことはいない。

そして侮られないように、卒なく立ち回る。

それは列強と呼ばれる大国に囲まれた小国が生き残る術であった。

しかし誠実な彼女のあり方に、国民は尊敬と親愛の情を日に日に強めていた。

彼女の統制の下、然したる争いもなくエクロカナンには変わらない日々が続いていた。

さりげないほど当たり前で、そして穏やかな日々が。

その麗らかな春の陽光のような日々が陰り始めたのはいつごろからだろう。

気づいたときにはその影がエクロカナンの地を覆っていた。

灰汁のように不意にわいて出た悪意。

初めはどこにでもある噂だった。

立場があり、注目される存在だからこそ、ありもしない醜聞が生まれたりもする。

しかし怖いのは、その思い付きのような噂が一人歩きをし始めることだ。

噂は風邪の病原菌のように散布し、穏やかな小国の陰に蔓延した。火のないところに煙は立たない。

女王を尊敬する国民たちは話半分に聞いていても、心のどこかでそう感じるほどに、そこかしこに煙は立ちあがった。

それは大きな火種となり他国に飛び火した。

人の口に戸は立てられないとはよく言ったものだ。

深い森に囲まれているために他国との通行手段が限られ、交易もさして行われていないはずのエクロカナンからその悪意が各国に広がるまでそう間はなかった。

特に人の醜聞を好む暇を持て余した貴族達に好まれ、噂は尾ひれをつけ形を変える。

エクロカナンの女王レモリーは悪魔崇拜の信者である。

そう囁かれていた悪意が彼女の親友の耳に届いた時にはもう初めの形を失いつつあった。

「レモリーは悪魔をこの世に解放し、世界を千年前の混沌の闇に帰そうとしている」

その言葉に親友は愕然とし、言葉を失ったとか。

そして各国の王侯貴族の中では、『月の女王』から一転。

女王レモリーは黒いマントに身を包み、自らの体を血で真っ赤に染めた魔女へと変換されてしまった。

たかが噂である。

王子ウヴァル自身も何度もそのような噂を耳にした。

だが所詮は一国の主君への妬みであろうと、あまり気にはしていなかった。

姉レモリーは彼にとって最高の人で、理想の国主であった。

その事実を彼が知っていたらそれだけでいいと考えていた。

あえて噂の持ち出し、レモリー自身を傷つけるのは彼の意図する所ではない。

王宮の者も多くがレモリーの人柄を知り、噂をただの噂だと捉え、  
けして敬愛する女王の前で口の端に上らせることはしなかった。

そうやって表面的には穏やかな日々が続いていた。

しかし……。

ウヴァルはその当たり前の日々には漠然とした違和感を感じていた。  
確かにレモリーは王位継承後王という責務の所為か、以前のように  
笑わなくなっていた。

時折その表情に影を帯びる。

疲れているのだらうと思っても、国王になった姉にどのように声をかけていいのか。

悩んでは声をかけるタイミングすらつかめずにいた。

何かに苦悩し、ウヴァル達を退け、何かに没頭するように一人王宮を出て、王宮からわずかに離れたゼル離宮に赴く。

それがいつしかレモリーの日常となっていた。

ウヴァルが問いかけても曖昧に微笑むだけ。

その微笑が彼の知っているものではないと気づいた時にはもう取り返しのつかないところまで来ていた。

人をやって調べてもレモリーがゼル離宮で何をしているのかは、  
杳として知れなかった。

そのころ、ゼル離宮近辺の村々では村一個が消えてしまう山火事が多発していた。

しかし村を燃やすほどに強力な炎は計算しつくされたように鎮火され、森を伝い、他の集落に向かうことはない。

だが村人は全てが全滅。

火災の原因もつかめない。

それでもレモリーは火事は自然に起こるものだと言い、その不審火に何の対策も取らなかった。

また、ゼル離宮の付近の町に住む者がドレスを血だらけにしたレモリーが森から出てくるのを目撃したり、唐突に行方不明者が出たりと、全てがレモリーにはよくない方へと流れる要因が根も葉もない悪意に追隨するかのごとく囁かれた。

そんな断片的な情報しか手に入らない状況で、ウヴァルは不安で仕方なかった。

ふと気まぐれに、その不安を大司教に漏らした。

エクロ<sup>II</sup>カナンの中心的教会ロアセル大聖堂を取り仕切る大司教ハールト・マールトは、まだ30歳半ばの穏やかな人であった。文化の中心と謂われる隣国ウォルセレンの出身で、聖域での人望も厚い。

普通国の中心である教会の管理を任されるのは、それなりに年のいった司教である。

それが30歳を前に大司教の地位に登りつめた彼は、未は聖域を動かす枢機卿か、はたまた教皇かと目されるほどの人物である。

彼は聖教史や哲学に造詣が深く、忙しい身でありながら、ウヴァル達の教師としてその知識を惜しみなく与えてくれていた。

彼なら閉鎖的なエクロ<sup>II</sup>カナンの人間には思いもつかない答えを導いてくれるような気がした。

「申し上げにくいのですが、それは悪魔の仕業です」

話を聞いた大司教は戸惑った表情で逡巡した後、居住まいを正してウヴァルにそう告げた。



### 孤高の王子3

「し、しかし……。悪魔などはこの世にはいないのだろう。すでに地獄に封印され、この世に出てくることはできない」

震える声を抑えられず、ウヴァルは強張った顔のまま、ただハールートの言葉を待った。

彼ならば、悪魔などという妄想を打ち消してくれると思っていたのに。

「確かにそう云われています。シモンの王により古の昔にひとつの壺に封じられた。しかし、それでは何故、それ以降も悪魔を崇拜する輩が現れるかご存知ですか？」

穏やかな碧眼を意味ありげに細め、ハールートは哀れむようにウヴァルを見つめた。

その問いに首を横に振って答える。

「これは聖域でもあまり知られていないことです。ウヴァル様が知らなくて当然。しかし悪魔崇拜者が存在するのなら、その者たちは確信しているのかもしれないことです」

そう前置きをするとハールートは朗々と語りだした。

悪魔がないこの世界は正常であり、それが世の理だと。

しかしその理を曲げ、異常を生み出すのが悪魔を召喚する魔方陣である。

悪魔にはこの世に現れるための肉体がない。

肉体を持たない者は、誰かしらの力を得なければ空気に霧散してしまふ。

そのために悪魔は人と契約し、その欲望を食い物にする。

悪魔は再びこの世で悪の限りを尽くそうと、あの手この手でこの世に干渉しようとしているのだ。

「そ、それは本当か？」

「そう聖域では伝えられています。ただ残念なことに、神に仕える私どもは悪魔を召喚する際のルールなどは知りようがありません。これは長年、多くの司教たちが経験から得たものなのです。ただ狂気に取り付かれた者が悪魔の法律をまとめて本にしたと聞いたこともあります」

そう言うとハールルトは小さく息を吐き、かけていた眼鏡をはずした。

「私も女王陛下の不審な行動をずっと気にしていました。もしかしたら、陛下はそのような書物を手に入れられたのかも知れない。悪魔を描いた書物は、人が書いたとは思えないほどの瘴気に包まれ、手にした者を地獄へと誘う」

悪魔を描いた書物。

それはどれほど禍々しいものだろうか。

もしそれをレモリーが手にしていたとなると……。

ウヴァルは見えないものの存在に身の毛のよだつ思いがした。

「ウヴァル様、私は一度無礼を承知でゼル離宮に向かわれた女王陛下の後をつけたことがあります」

「何？」

「陛下は地下の開かずの間となつてゐる最奥の間で数人の者と円を組み、何かを唱えていました。その場には悪魔を象徴する山羊の置物があり、円の中心には鋭い剣で胸を貫かれた若い女が横たわつていました」

「！」

「あまりの恐ろしさにすぐに引き返してしまいましたが、あれは悪魔を召喚する儀式か何かでしょう。私はどうすればこの事態を止められるかずっと考えていました。ですが、悪魔崇拝者であつても貴方のお姉様はこのエクロ＝カナンの女王です。一国の女王が悪魔崇拝者など表だつて告発することはできない」

ハールトは苦悩に眉を寄せる。

彼もまた悩み続けていたのだらうと、ウヴァルは感じた。

聖域が公式にエクロ＝カナンの国王が悪魔崇拝者であると認めれば、国中の人全てがその害をこうむる。

エクロ＝カナン全体が悪魔崇拝だと糾弾されているのと同じだ。

そのような弱つた国を周りの列強達がほつてはおかない。

自国の領土を広げるため、国同士の熾烈な争いが始まつてしまう。

「確かにそうだ。国民が不安がる。しかしこのままほおつておく訳にも……」

「ウヴァル殿下！事は一刻を争います。私は聖域にこの事実を秘密裏に報告します。大丈夫、私の出身であるウォルセレンを通じれば表に出ることはない。そしてこれ以上女王陛下が悪魔の虜となる前に何処かに幽閉してしましましょう」

「幽閉だと……」

王子はたじろいだ。

尊敬する姉を幽閉するなど彼には想像もつかないことだった。

「そうです。表向きは病に倒れたことにして、ゼル離宮にでも一時幽閉するのです。その後のことは聖域に任せて」

納得しかねるとばかりにウヴァルの表情が曇った。

女王を幽閉できるのは、今この場にいるウヴァルをおいて他にいない。

そのウヴァルを諭すように、ハールートはか細い肩に手をかけた。

「お辛い気持ちはわかります。ですがこれは国の為ですよ。気をしつかり持って。女王陛下に代わり、貴方が国を引きいらなくてはいけないのですよ?」

それは決断の時だった。

冷静で、真摯な瞳がウヴァルの答えを静かに待っている。

ウヴァルは強張った表情のままごくりと唾を飲んだ。

「分かった。そのように手配しよう」

## 孤高の王子 4

ハールルトは素早く、そして抜かりなく行動に移った。

エクロ＝カナンから聖域のあるエストロイムに向かうにはウォルセレンを真つ直ぐに突き抜けても3日はかかる。

いくら聖域への使者であつても不穏と見做され、ウォルセレンで足止めを食うわけにはいかない。

そして、事の重大さ故に聖域以外の協力者も必要だとハールルトが主張するので、ウヴァルは旧知の仲であるウォルセレン王に頼み、内密に聖域との橋渡しを頼んだ。

驚きつつもウヴァルの報告を受けたウォルセレン国王は内密に取り計らうことを約束してくれた。

計画は予想以上にスムーズに進んだ。

ウヴァルの想像とかけ離れたところで。

計画の綻びの一つは、ハールルトの秘密文書を読んだ聖域の全てを仕切る高位枢機卿たちがレモリーの悪魔崇拜という言葉に色めき、我こそがその重大な役割を負うと息巻いたのだ。

他の枢機卿や司教たちは何も知らされていなくても、その不穏な空気に敏感になり、思い思いに身勝手な噂を流す。

そして一番の想定外は、どこからか話を漏れ聞いたウォルセレン王家の一人娘であるマリス・ステラ王女であつた。

そう、彼女こそ、レモリー・カナンの唯一無二の親友であつた。

突如ゼル離宮に幽閉され、程なく現れた大勢の枢機卿にレモリーはただただ言葉を失っていた。

その場にレモリーの身のあり方についての審判が行われる予定であつた。

恙無く、秘密裏に行われた審判を乱したのはその場に突如現れたウォルセレン王女だった。

親友の旧知に、心優しい彼女はいても立ってもいられなくなったのだろう。

しかし、その王女が見たのは穏やかさの欠片もなく、美しい髪を振り乱し、変わり果てた親友の姿だった。

驚き立ち尽くす王女の顔に、ウヴァル自身も同じ境地だった。

審判の場に連れ出されたレモリーはその穏やかな面影を変え、その場にいる全ての者を射殺さんと睨んだ。

狂った女王としか言いようのない姿に枢機卿もウヴァルも息を飲んだ。

それは一瞬の出来事。

吼えるように彼女は激昂した。

レモリーは隠し持っていた刃で悪魔に捧げる生贄をその手で殺すかのように、その場にいた全員の喉を掻っ切らんと襲い掛かったのだ。

静粛な審判の場が突如阿鼻叫喚と化した。

逃げ惑う枢機卿。

次々とその場にいた者に襲いかかろうとしたレモリーを王女は必死に止めようと立ちはだかった。

そして悲劇は起きたのだ。

驚きを浮かべ、血の海に平伏した美しき人。

その側に立った真つ赤な女。

血に濡れ、真つ赤な血溜まりに立ち尽くす彼女はその場にいた者を見渡し、一際通る甲高い声で叫んだ。

「この王座を守るためならこの身が血で染まるうと腕が？げようと構わない。私は血に濡れた女王！この思いを果たす為なら悪魔とだって契約しよう！」

全てが変わった瞬間だった。  
そこにいるのはかつての月の女王と呼ばれた者ではなく、真っ赤な悪魔だった。

あの瞬間から、彼女の絶叫がウヴァルの耳を離れない。  
図らずしも惨劇が起きてしまった。

自分の非力ではもうどうすることもできない状態になっていた。  
血に濡れた女王は駆けつけた近衛兵達に捕らえられ、すぐさま聖域に移送されることが決定した。  
もう抵抗する気力さえわかない。  
ただ成り行きに身を任すだけ。

次の日の夜明けごろに、粗末な馬車に乗せられ聖域に向かった姉の背をただ呆然と呆然と見つめるしかできなかった。

先の見えない不安に怯え、それでも自分がしっかりしなければと奮い立たせる。

一番下の弟、第二王子キアスも幼いながらに何かを察したのか、ぎゅっとウヴァルの服の裾を掴み、大きな瞳でじっとウヴァルを見上げていた。

(俺が守らなければ……)

弟の柔らかな髪を撫で、ウヴァルは心に誓った。  
でも現実には更に彼に重くのしかかる。

狂ってしまった女王は一筋縄ではいかないらしい。  
移送の途中で立ち寄った牢獄、嘆きの塔から血に濡れた女王は逃げ出し、その行方は杳として知れない。

そう知らせを受け取ったのは、離宮で惨劇が起きた3日目の昼の

ことだった。

## 孤高の王子5

ただ今は遠くこの城から深いゴモリの森を彷徨う血に濡れた女王に成り果てた悪魔が騎士に取り押さえられるのを黙って見守るだけだった。

「…俺がもつとしっかりしていれば……」

泣きそうになるのを必死に我慢しているその声はまだ十代の少年で、姉を支えようと懸命に背伸びしていた王子のものではなかった。不意に彼の物想いを遮るよう、重たい音と共に木の扉が開いた。弾かれたように振り返ったウヴァルは来訪者の顔を見て、厳しい表情を緩めた。

「おにいちゃま」

無邪気な笑顔で入ってきたのはキアスだった。  
まだ十になつたばかり。

年の離れた幼い王子は姉と兄同様、エクロカナンの特徴を色濃く受け継いだ顔立ちであるが、末の王子である為かおっとりした甘えっ子気質がその顔に表れていた。

無垢であどけない雰囲気の子はその手に余る大きな猫をぎゅっと抱きしめていた。

「マルコがね、奥の広間に行きたがるんだ。だからおねえちゃまにお願いしようと思うんだけど、おねえちゃまが見当たらないの」

大きな瞳の上の薄い眉を困り顔で寄せる。

ウヴァルは小さな弟を側に呼び寄せるときゅっと抱き締めた。

「…おねえちゃまは、今お出かけ中だ」

「何時帰ってくるの？」

抱き締められたまま、弟は大きな瞳をくりくりさせ、不思議そうに兄の顔を覗き込んだ。

苦悩に満ちた兄の顔。

幼い弟王子にも何時もの澄ました雰囲気と違うのが分かった。

「…もうすぐ帰ってくるよ。大丈夫。それまでおにいちゃまがおねえちゃまの代わりだ」

「すぐって何時？」

「すぐはすぐだ。それまで俺たち二人で国を守らなければならない。お前にも出来るな」

「うん。皆に優しくすればいいんだね。いつもおねえちゃまがやってるように」

「…そうだな。優しくしてあげなさい」

無垢な弟は姉の真実の姿などまったく知らない。

何故常の住まいである王城を離れ、ここゼル離宮に留まっているのかも分からないのだろう。

(それでいい。全て真実は俺の胸の中に)

ウヴァルは柔らかい弟の髪を優しく撫で、抱き締める手に力を入

れた。

「失礼、両王子殿下」

二人のやり取りに水を差すように言葉を挟んだのはハールルトだった。

明るい栗毛の髪を撫でつけ、その上に司教の証である白のカロツトを被っている。

人当りのいい瞳を優しく和ませた。

レモリーなき今、彼以外に頼れる存在はいない。

気持ちに反して弟に向けていた柔らかい表情を一変させ、ウヴァルは表情を凍りつかせた。

姉なき今、彼がこの国の国主だ。

その重責が彼の心を頑なにさせた。

「何だ？マールルト大司教殿」

「扉が開いていたもので勝手に入りました。お許し下さい。早急にお伝えしたいことがありましたので」

丁寧な物腰、活舌よく滑らかに語られる彼の声は流石、人に説法を説く司教だと思わされる。

「話せ」

「…はい、女王陛下の行方について……」

ウヴァルの表情を窺うように、ハールルトはおずおずと言葉を続けた。

ウヴァルの表情に一瞬狼狽が見られたが、すぐにきつと口を結ん

だ。

冷静さを取り戻した眼差しで先を促す。

「残念ながらまだ確保には至っておりません。ただゴモリの森付近で女王のような風貌の女を見つけたとの目撃情報が寄せられています」

「そうか」

「それと……」

言いくそうにハールートは言いよどんだ。

「話せ。俺は今、お前以上に信用している者はいない。お前にはそれに報いてほしい」

「それは、もったいないお言葉です。それでは…聖域は各国に聖十字騎士団の派遣を要請したようです」

聖十字騎士団。

その言葉に、ウヴァルは聖域の本気を感じた。

レモリー・カナンをけして逃さないと聖域が決めたのだ。

確実に血に濡れた女王を聖域に連行する。

聖域の決定は世界の絶対。

もうウヴァルではどうしようもないところまで話がいつてしまっているのだ。

「そうか…」

ポツリと呟くと、ウヴァルは灰色の空の方に視線を向けた。

「彼女はどうなった？彼女にもしものことがあれば、ウォルセレン王家は黙ってはいないだろうな。それに昔からの友人…いや大切な人だ」

「深く胸を刺されております故、まだ予断は許されない状況のようです。あの状況で息があっただけ奇跡のようなもの」

「医者には全力を尽くすように伝える」

「私も神に祈りを捧げましょう。王女殿下を救ってくださるようにと」

そう言うのと恭しく頭を下げ、ハールートは部屋を立ち去った。

ウヴァルは何も言わずに背中を彼を見送る。

血に濡れた女王を追っている自国の騎士団からの情報は未だ届かない。

そして各国の騎士団が続々とこのエクローカナンに入り込んできている。

ウヴァルの心は不安と焦燥に駆られていた。

本当なら泣き叫び、自ら後を追いたい。

そして命の淵を彷徨う、麗しい思い人の手を握って励みたい。しかしどれも次代の指導者となるべく彼には叶わぬ望みだった。今はただ、二人の運命を祈るばかりであった。

## 嘆きの塔

「それでね、わたしは聖域に連れて行かれることになったの」

ハニーは掻い摘んで、今彼女が置かれている状況を少年エルに語って聞かせた。

エルは真剣な眼差しで話を聞きいていた。

一区切りつけ、ハニーは小さく息を吐く。

体の奥から吐き出された吐息には痛みの粒子でも含まれているのか。

痺れのような痛みが全身を駆け巡り、思わず眉を寄せた。

その様子にエルは心配げに首を傾げる。

そつとハニーの頬に手を当て、顔を覗き込む。

吸い込まれそうなほどに澄んだ青い瞳に傷ついたハニーが映りこむ。

ハニーが胸の奥に隠している恐怖を映しこんだかのように、瞳がざわりと揺れた。

飲まれそうな美しさにぞつとしてしまう。

そして、何より。

「近い！近い！」

「え？」

鼻と鼻が触れ合うほど近くにある、愛らしい顔に思わずどきまみぎしてしまう。

ハニーは自分の焦りがエルに気づかれないうちに、身を引くと神殿の向こう側に広がる鬱蒼とした森に目をやった。

「いや、本当、陰鬱としたい天気だこと。ちょっとくらい日が差さないかしらね」

「ん〜でも、今は夜だから、日は差さないと思う」

苦し紛れに言った言葉を幼い少年に冷静に返され、ハニーはさらに落ち込んだ。

（わたし、何やってんだか。なんでこんな小さな子に動揺してんのよ。ちょっと愛らしいからって、子どもじゃない。確かにうちの弟達とは比べ物にはならないくらい、艶やかな顔してるけどさ。時々びっくりするほど色っぽい表情するけどさ……っていうかわたし以上……）

「どうしたのですか？ハニー」

「いや、なんでもない！気にしないで。そして、不用意に近寄らないで。心臓がバクバクしちゃうから」

「心臓がバクバク！それって、とっても危ないんじゃない？……僕が診ましようか？」

「見る？ダメよ！小さいクセに変態の発想よ！」

「ええ？変態？ちょっと傷つくな」

大げさに身を引いたハニーにエルは困ったように微笑み、肩を竦ませた。

「診せなくていいですけど、痛くなったらちゃんと行って下さいね。ハニーの体が大事だから。無理しちゃダメ」

そう言うと、流れるようにハニーの額に口付けをした。

「痛いのがなくなるお呪い<sup>ましな</sup>」

円らかな瞳を愛らしく細めるとエルは小首を傾げた。

「これ、効くんだよ？」

極めつけのセリフに、ハニーはこの句が告げられなくなった。

じんわりと熱い額に手を当て、ぽかんとエルを見つめるしかできない。

どっちが子どもなのかと疑いたくなるほどだ。

「むっ将来が不安なほど天然のタラシね」

思わずときめいた自分に嫌気が差し、ハニーは拗ねるようにエルから視線を外した。

「なにか言った？」

「知らない！」

不思議そうに目を瞬くエルに、ハニーは少し怒ったように答えた。だが自分の態度があまりに子どもっぽく思えたのか、恥ずかしそうに口の端を上げた。

「えっと、エルが気にすることじゃないの。わたしは、この通りの

ワガママで自己中だから。だからエルも自分の思うように振舞ってくれたらいいから。わたしに気を使わなくていいの」

「僕の思うように……それって、命令？」

理解できないのかエルは目を見開く。

今度はハニーが理解できないと驚かされる番だ。

「命令って？そんな漠然とした命令なんてしないわよ。わたしとあなたは、仲間でしょ？もしわたしがあなたに命令することがあるなら、それはきつと、最後の時よ」

切なげに目を細めた。

痛々しい体をぎゅっと抱きしめる。

そうでもしないと、全てが崩れてしまいそうだった。

自分自身も、世界も全て。

エルとの空間があまりに心地よく忘れてしまいそうになるが、ハニーは今聖域から追われる身。

世界を敵に回し、聖十字騎士団がハニーを血なまこになって探している。

いつまで一緒に行動できるか分からないのが現状だ。

その時になれば、この優しい少年を置いていかなければならない。

「だから、これはわたしの希望っていうか……うん？お願い？」

「お願い……」

「そう、こうあってほしいなって。……なんでそんなに難しい顔で考え込むのよ」

言葉を切って考え出したエルを理解できないとばかりにため息をついた。

じつと見つめる少年は大人びた気難しげな顔になったかと思えば、子どもらしい戸惑いが溢れたりところどころ変わる。

側で彼の変化を見つめながら、ハニーは胸に込みあがる愛しさを感じた。

記憶がないこの少年は、孵化したばかりの小鳥のようだ。

懸命に自分の体についた殻を払い、世界に目を向けようとしていく。

「ふふ。淡い期待よ。ずっと一緒にいれたら幸せなのだと思うような。だから、お願い。貴方らしく生きて」

## 嘆きの塔2

「もう夜も更けてきたし、移動するのは明日の朝にしましょう」

そう言って話を切り上げ、二人は身を寄せ合って眠りについた。疲れきった体はすぐに眠りの波に沈み、もう指先一つ動かすのが億劫だと感じる。

よく考えれば、離宮を離れて今までまともな休息をとっていない。体は限界だった。

本当は今の間に考えておなかければいけないことが多々ある。だが一度八二一の元を離れた意識はもう手元には戻ってこない。その途切れ行く意識の中、誰かに話しかけられたような気がした。

「それは君次第だよ？」

あれは誰だったろう。

あの、穏やかさの中に紛れてこちらを揶揄する、あの独特の雰囲気。

そう、あれは……。

思い出した時にはもう、彼女は深い眠りの淵に落ちていた。

\*\*\*

車輪は一度大きく軋む音を上げ、馬車を止めた。

まだ明けやらぬ空に包まれたゼル離宮を離れ、どれだけの時間が経ったのだろうか。

八二一は側にいる男に気付かれないように小さく喉を鳴らした。

あの審判の場での惨劇の後、駆けつけた騎士に捕らえられたハニーは翌朝、まだ日も昇らない内に秘密裏に聖域へと護送されることとなった。

何をしでかすと分らない。早く聖域にこの悪魔を運ばなければ。ハールト・マールト司教がその場にいた枢機卿らにそう訴えているのを、ハニーは騎士たちに取り押さえられ、血に染まった床に押し付けられた状態に耳にした。

力の限りに押さえてけられ意識が朦朧とする中で、ハニーはぼんやりとその言葉の意味するところを考えた。

(そうか、聖域で私は処刑されるのね)

まるで他人事のようにだった。

生に対する執着も、あの一瞬の執念のような炎もなかった。

燃えかすのように無機質な瞳で、先ほどまで一番の友人が眠っていた真つ赤に染まった床を見つめる。

彼女はすでに別の場所へと運ばれたようだ。

(エル……)

もう涙さえでない。

干上がった心を抱えたハニーは抜け殻のよう。

ただ諾々と騎士たちに従い、地下牢に押しやられた。

あれはもう廃人だ。

ハニーを見た者達は口々にそう言った。

だが、あの金色に輝く瞳を見れば誰がそのように言えただろうか。彼女の瞳の奥ではまだけぶるように燃える情熱があるのだと知れば、誰もが自分の浅はかさを実感しただろう。

ハニーの心が死ぬなどありえない。  
たとえ手足が？げようと彼女は消してその歩みを止めない。

（たとえこの身が朽ち果てようと、エル、貴女との約束は絶対に守る）

固く誓った信念のみがただハニーを突き動かす。

真つ暗な牢獄の中、ハニーはただそれのみを考えていた。

どうすれば、この状況を打開できるのか。

チャンスがあるとすれば、それは離宮から聖域に着くまでの僅かな間。

深淵の闇の中、燃えるような金色が鋭く輝いた。

そして明朝、運命の時刻がやってきた。

牢獄の中で顔を麻袋で覆われ、体を幾重にも拘束され、嚴重に捕縛された状態でハニーは簡素な馬車に乗せられた。

窓のない、罪人を運ぶための馬車にはハニーともう一人、ハニーを監視するための騎士が乗り込んだようだ。

何も分らない状況のまま、それでもハニーは体の全神経を集中させ、気を張り巡らせた。

ハニーたち一向は昼に一度僅かな休憩を取った他は、ずっと馬車を走らせている。

馬車の他に数名の騎馬がついているのか、複数の蹄の音が絶えず馬車の横から聞こえてくる。

馬車の車輪が大きく跳ねた瞬間、その単調な蹄の音が不意に止んだ。

「本日はここでお休みいただきます」

ハニーの心臓が大きく跳ね上がった。



### 嘆きの塔3

騎士たちはハニーを古びた塔に押し込めると、顔や手の拘束を解くことなく塔の外に出て行った。

悪魔の僕へと堕ちてしまった女王には、どんな情けもかけないと心に決めているのだろうか。

なんせ相手は、世界を混沌に帰そうと企てた魔女。同じ空間にいることすら嫌悪するのだろうか。

これはハニーの為の休息ではなく、自分達の為の休息なのだ。暗い夜の森を走り続けるのは危険だ。

何より彼らは血に濡れた女王を聖域まで護送するという大任を受けている。

与えられた任務へのプレッシャーが彼らを常以上に追い込んでいるのは確かだ。

彼らを疲弊される要因であるハニーが側にいてはおちおち休んではなごられない。

ハニーを自分達の視線に入らない、それでいて決して逃げ出さない場所に追いやって彼らは初めて心からの安堵を得るのだ。

そういう点で、この塔は彼らの要望に叶っていた。

ここはゴモリの森の果て、ウォルセレンとの国境付近にある、古の昔から聖域の牢獄として使われている『嘆きの塔』。

1階部分のみしかなく吹き抜けの塔は堅牢な石造りで、天上付近に小さな明り取りの窓が開いている他はまったく閉ざされた状態だ。たとえ拘束されていなくてもか弱い乙女が一人、どう足掻いても逃げ出すことなどできはしない。

冷たい石の床に座り、ハニーは拘束された手で自分自身を暖める

ように抱きしめた。

外からは騎士たちの話し声が微かな風の音と共に聞こえてくる。彼らは塔よりも離れた場所に幕を張り、今宵の寝床としているようだ。

塔の前には門番一人置いていない。

たとえ石の壁一つ隔てていても血に濡れた女王の側にいたくはないのだろう。

実態は何の力もない、ただ乙女なのに。

僅かに聞き取れる声はどれもハニーに向けた嘲笑で、蔑みだった。自分は悪魔など怖くないと強がった罵声がそれに混じる。

そのどれもがハニーの耳には白々しく聞こえた。

本当は捉えどころのない恐怖に襲われ、ハニーのことを恐れおののくほどに畏怖しているのだとありありと感じ取れた。

だからこそ、この状況はハニーにとって好都合だった。

今、ハニーの持てる武器は唯一、ブラッディー・レモリーに着せられた汚名のみ。

彼らがハニーを侮り、畏怖し、遠ざける。

彼らとの距離が遠くなればなるほど、ハニーに与えられた運命の時が確かなものになる。

(逃げるなら、今しかないわね)

ハニーは圧迫された暗闇の中で小さく微笑んだ。

『嘆きの塔』について、ハニーもある程度なら知っている。

この塔がいつからこの森に佇んでいるのかは知らないが、長い歴史の中でこの塔は聖域のための牢獄として使用されてきた。

表向き、聖域は牢獄とは表現しない。

懺悔と改悛の場。

異端の思想に取り付かれた司教や神の教えに背いた者を是正する

ために、塔は存在するという考え下、自らの過ちに気付いた者は塔から出ることが許され、新たな人生を歩む。

ただ、この『嘆きの塔』は世界に散らばる聖域の塔の中でも異質だ。

鬱蒼とした森に囲まれ、ただぽつんと立つこの塔は聖域から一番遠くにあるためか、過去、他の塔には収容できない罪人を多く受け入れられていた。

そしてその全てが塔に入ったが最後、二度と日の目を見ることはない。

一度入れられたら最後。

看守一人もいないこの塔でただ飢えて干からびるのを待つのみ。

世間がその者を忘れるのをただ静かに見つめる塔。

死に行く者の嘆きが聞こえるから嘆きの塔と呼ぶのだそうだ。

自分もこのままこの塔につながれ、誰にも知られずに死んでいくのだから。

何も見えない闇の中でハニーの心には滲むような恐怖がわいてくる。

過去、ここに囚われて悲痛な叫びをあげながら死んでいった者の亡霊に囲まれているような薄ら寒さに身の毛がよだつ。

(大丈夫、彼らは私に手は出せない)

騎士らの目的はハニーを聖域まで移送すること。

ハニーはまだこの塔では死ねない。

かつての塔の住人と同じ道を道を歩む訳にはいかない。

だが、今のハニーはあまりにも危うい場所に立たされ、綱渡りしているのと違いない。

いつ、その存在をなかったことにされるかは分からないのだ。

(何か、いい方法はないかしら?)

ハニーは外に気づかれぬように、そっと塔の内部を歩いてみた。拘束された手で、そっと壁を撫でて進む。

硬質な石のひんやりとした感覚にまるで石にさえ拒絶されたかのように感じてしまう。

(どこかに秘密の出口があれば……)

焦燥感ばかりが胸を駆け巡る。

閉ざされた視界に今もくつきりと焼きついているのは、血の海浮かぶ誰よりも愛しい人。

(戻らなきゃ。聖域になんて行っている暇はない)

そう、誓いを新たにした瞬間だった。

触れていた石の壁の一部が動いた。

「えっ」

吐息のような声が自然と漏れ、ハニーが自分が地下へと落下しているのだと気づいたときには、もう全てが手遅れだった。

暗闇から更なる深遠の闇に突き落とされ、見えない恐怖に体が強張る。

泣き叫びたいのに、急激な環境の変化に自分の体がついてこない。

(このままでは死んでしまう!)

やっと理解できた状況は絶望的な展開だった。

神に祈るには遅すぎる。

今はもう、この奈落の底がハニーを優しく抱きとめてくれることを願うばかり。

## 嘆きの塔 4

予想に反して、着地の衝撃は柔らかかった。

ただこれはあくまで八二一の予想に反してだ。

冷たい石の床を想像していた八二一を受けとめたのは、カサカサとした無機質な物体だった。

幾重にも重なった白い棒状のそれらは、地下の全てを覆うように堆く積まれている。

それが人の骨であると気付くまでにそう時間はかからなかった。

積み重ねた人骨の山に抱きとめられ、その中に飲まれるように落ちていく。

痛みと共に全身を突き抜ける衝撃。

見えない恐怖と相まって、まるで奈落の底に突き落とされたよう。いくら乾燥して脆くなった骨とはいえ、落下の衝撃はすさまじい。着ていた服が折れて尖った骨でズタズタに裂け、その切っ先は服に留まらず八二一の柔らかな肌にも真っ赤な線を描いた。

やっと八二一の体が止まった時には、八二一はただ襟褸切れを被っただけの状態になっていた。

ただ怪我の功名と言うのか、ゆるく縛られていた布袋の紐は先ほどの衝撃には耐えられなかったようで、いつの間にか八二一の元を離れていた。

目隠しがなくても八二一の前に広がるのは深遠の闇。

八二一が落ちてきたはずの天井すら見えない。

床はもう、元の状態に戻っているのだろうか。

まさか塔にこのような仕掛けがあるとは。

こうやって罪人を地下に落としてきたのだろうか。

澱んだ空気の中、八二一はぞっと身震いをした。

目隠しで見えないことよりも自分を包む闇の濃さに阻まれる恐怖の方がずっと上だった。

地下の湿った空気がハニーの肌を舐めていく。  
この場では視覚などあつてないようなものだった。

(震えるな！顔の周りを圧迫されてないよりマシじゃない)

震える体を叱咤するようにハニーは骨の山から身を起こした。  
手を拘束する鎖が何かに引っかかり、か細い手首にずしりとした痛みが走る。

深い闇の底に何か潜んでいるのではないかと、妄想に取り付かれそうになる。

だが、漆黒の中で金色は輝く。

ハニーの見つめるものは遠く離れたゼル離宮のみ。

(風が流れるということは、何処かに抜け道がある証拠じゃない。  
惑われちゃダメよ。目に見えるものが全てじゃない)

ハニーは足場の悪い中を懸命にもがいた。  
不自由な手で行く手を遮る骨を除ける。

「待つて。エル！絶対に貴女との約束は守るから！」

先の見えない闇に噛み付くように、ハニーは叫んだ。  
声すらも反響せずに飲み込んでしまふ、音のない黒。  
そこは世界の果てであり、絶望そのものだった。

その中にたった一人。  
ハニーだけがその絶望の淵に立たされていた。  
はずだった……。

「クスッ」

何もなければずの地の果てに、嘲笑ともとれる吐息が響いた。微かに、でも確実にハニーの耳朵に届く。

「誰！」

弾かれように顔を上げ、視線の先の闇を睨みつける。何もなければずの闇がざわりと蠢いた。

「ああ、口を開くのは何年ぶりだろう。ずっと自分の内でしか会話をしていなかったから。その久々の相手がこんなに可愛らしいお嬢さんなんて、今日はいいい日だ」

のん気で、それでいてどこか小馬鹿にしたような声がハニーの体を真っ直ぐに突き抜ける。

闇を快活に走るその声は、若い男のもののように思えた。

一寸先さえ見通せないこの世界で、相手はハニーのことをどれだけ把握しているのだろうか。

さもハニーが光の中に浮いて見えるように相手はハニーをじっと値踏みして話しかけてくる。

「ああ、ぼろぼろになってしまつて。折角の美しい顔が台無しだね」

「貴方は、誰？」

低く、地に響く声のする方に鋭い眼差しを向け、ハニーは身を固くした。

相手はハニーを聖域まで護送する騎士ではないのは明白だ。

だが、この鬱蒼としたゴモリの森の果てに居るのは聖域を目指す  
ハニー達以外に存在しない。

忘却の森と呼ばれる森は一度足を踏み込めば、森を知る樵でさえ  
自分の居場所を忘れるほどに深い。

それに薄暗い森の中では野生の狩人達が常に目を光らせている。  
そのため、ウォルセレンへの行き来は遠回りしても森を迂回する  
道が選ばれる。

このような緊急の場合でもなければ森に入り込む者などいない。

「答えなさい！」

ハニーの厳しい誰何の声にも、相手はせせら笑いで答えるのみ。  
そのつかみどころのない声が、見えない姿と相まってハニーを恐  
怖に包む。

そんなハニーの心の内などお構いなしに、相手は口笛を吹くかの  
ように軽やかに話し続ける。

「そうカリカリしないで。余裕のない女は安っぽく見えるよ？」

「よ、余計なお世話よ！貴方に何が分るのよ！適当なことばかり言  
つてー！！」

「あはは。恐怖に震えているのに、怒鳴り声は一端だね。気に入っ  
たよ。血に濡れた女王様」

ざわりと闇が揺れた。

もしかしたらハニー自身が傾いだのかもしれない。

何も見えないはずなのに。

相手はハニーの全てを見つめている。

正体を言い当てられ、咄嗟に声が出ない。  
血に濡れた女王の名を知っているならば、相手はハニーの敵だ。  
相手の出方次第で、ハニーはまたあの護送車に戻されてしまう。  
干からびた体から、どつと冷や汗が流れる。  
地上にいる騎士たちにも感じたことのない恐れがハニーを包む。

「ははっ。そんなに固くならないで。囚われの身同士、仲良くしようじゃないか」

「囚われの身？」

相手の言葉にハニーは怪訝に眉を潜めた。

捕らえられた者は死ぬまで出ることを許されない嘆きの塔。

彼はここの繋がれた囚人だと言っただろうか。

しかし嘆きの塔はここ数年使用されていないはず。

もし他の収容者がいれば、ハニーをこの塔にはいれたりなどしないだろう。

「そうだね。ここ数年、他の収容者はいないよ。聖域は嘆きの塔の封鎖すると宣言したからね。だから私が最後の収容者だ。聖域はどれほど私が怖いのかな？」

自身の身の上を面白がるように声を紡ぐ。

まるで他人事のような憎悪が闇に広がる。

でもぞっとするような憎悪が闇に広がる。

相手の意図がハニーにはまったく分らない。

ふざけているのか、それとも本気なのかも。

「でも、君を入れたということは、聖域はもう私が死んだものだと思うっているんだね。困るなく確かめしないで、安易に判断されち

や。私はまだ死ぬ気はないのに」

困ったように笑う声に自嘲が混じる。

「あ、貴方は……」

「私？私はただの歴史学者ですよ」

「何で…？」

声が震えるが、問わずにはいられない。

聖職者でもない学者が、聖域の最果ての砦に囚われているなんて聞いたことがない。

過去、この塔には危険な異端思想を広めようとした宗教家達が収容されていた。

ただの学者が、聖域の逆鱗に触れるような行いをしたのだろうか。そんなこと考えつかない。

やっと闇に慣れたハニーの眼差しがおぼろげな男の輪郭を捉える。

「さあ、何ででしょうね。ただ言えるのは私の研究しているものが気に入らなかつたらしい」

「研究しているもの？」

「ええ、悪魔のフォークロア。聖域によって消された敗者の歴史です」



## 嘆きの塔5

「悪魔のフォークロア？」

初めて聞く言葉なのに、言葉に呼応するように心臓が跳ねる。声を上擦らせ、ハニーは恐る恐る問いかけた。

「君の知っている歴史というものは、常に勝者のものなのだ。では、敗者たちの歩んだ真実はどこにあるのだろう。それは格式高い歴史書ではなく、人々の生活の中に、村々の口伝に、そして呪いや言い伝えの中に。ひっそりと入り込み、根を張っている。それを一つ一つ掬い取るのが私の役目なのです」

王家の立国の歴史とは違う、民の生活に根付いた歴史を追っているということだろうか。

フォークロア（民俗学）という言葉の意味は分かるが、何故悪魔という接頭語がつくのだろう。

「君は知らないのだろうか。いや、知らなくていいのだ。知れば聖域が放つてはおかない。ああ、でももう遅いのか。君は聖域に危険思想者として認められてしまったから」

「わ、私は悪魔なんて崇拜していないわ！そんなの勝手な言い方がいいだわ！」

「聖域なんてそんなものです。言いがかりをつけて、都合の悪いものを消そうとする。君は実に運が悪かった。ただそれだけ」

同情しているようで、あまりにも軽薄な色が滲んだ声にハニーは

むっとした。

運のよしあしで、必死に築き上げてきたものが崩されるなどあってはならない。

「聖域はね、血に濡れた女王に生きていられると困るんだよ。君の口から彼らも知らない真実が飛び出すんじゃないかと戦々恐々としている。だから、噂なんて頼りないものを巧みに利用し、君の声が届かない場所へ封じようとしている」

「なんで……そんな？」

淡々とした男の声にハニーは身震いがした。

今回のことは全て聖域が仕組んだことなのか。

それともそれが聖域の常套手段なのだろうか。

血に濡れた女王の審判に訪れた枢機卿達も全て知った上で、このふざけた道化に参加していたのだろうか。

それにしてもあまりに回りくどい気がする。

「ふふ…君自身に分らないから、これ以上お話しても無駄ですね」

「待って！じゃあ、聖域はどういうつもりなの？私一人の口を封じればいいと考えているの？」

波のようにあっさりと引く、男に食い下がるようにハニーは自分の腰を固める人骨の山を掻き分け、男の方に駆け寄る。

数万という数の骨が行く手を阻み、思うように動けない。

それでもハニーを突き動かす情熱は止まらない。

「私一人いなくなれば、エクローカナンは…エルたちは無事なの？」

今八二一を突き動かすのはただそれのみ。  
どれだけ体が限界を迎えようと、信念の炎はいつそう激しく燃え  
上がる。

しかし、対する男の声はその炎を消すかのように冷ややかだった。

「さあ？私は全てを知っている訳ではないのでね。なんせ、もう5  
年もこの闇の中にいるのですから。世間にも疎くなりますよ」

「5年ですって！？ふざけないで！この騒動が始まったのはせいぜ  
い三ヶ月前ぐらいよ。5年も閉じ込められた人が知るわけがない。  
……それに、何もないとところで5年も人間が生きていける訳ないわ  
！」

「ははっ。正論をありがとう。でもね君の知っている常識が全てで  
あるとは限らない。君の知っている世界の外側で、確かに存在する  
非現実もあるのですよ？」

「な、なによ、それ？」

突き放され、冷水を頭から掛けられたように全身が痺れる。

自分では制御できない衝撃が胸のうちで荒れ狂う。

彼は何を言いたいのか。

それを耳にすれば、もう知らぬ前には戻れない。

高鳴る心臓が警鐘を鳴らす。

「ふふ、可愛いお姫様。君は悪魔をこの世に呼び出すための本があ  
ることを知っていますか？」

「何、いきなり。そんなことどうでもいいのよ！悪魔はこの世には  
いない。全て地獄に封じられている！そんなのよちよち歩きの子ど

もだつて知ってるわ！」

突飛な話題に、ハニーは苛立たしげに声を荒げた。

しかし男に取つてどこ吹く風。

ハニーが興奮すればするほど、楽しくてしかたないばかりに声が弾む。

「ふふ。そんなに過剰に反応してくれると話がいがありますね。ああ、怒鳴らないで。少し私の話を聞いてください。これは君にとって悪い話ではない」

男はそう前置きすると、小さく息を吐いた。

「久々に肺に大量の空気を入れたので疲れました。地下は空気が澱んでいてね、長時間君と同じような調子で話しては酸欠になりそうだ」

「馬鹿にしてんの？」

不安で揺れる心を沈め、ハニーは努めて冷静を心がけた。

しかし、勝気な発言もいつも尻つぼみになって闇に消えてゆく。

「してませんよ。久々に私の会話の相手をしてくれた君にせめてもお礼をしようと思っっているんです」

クスクスと笑う声は、ハニーの発言よりもハニーの心を読んで笑っているように聞こえた。

どんな状況でも感情が先走るのがハニーの悪い癖だ。

駆け引きなど考えも及ばず、本音が口をついて出る。

「お礼なら、ここから無事に抜け出せる道を教えてよ」

「ええ。出してあげますよ？ただし、この先はもつと危険です。生半可な気持ちでいるなら、ここでもうおやめなさい。ここにいればいつか君は助かる。これは君が考えているようなたった一国の女王を陥れる陰謀じゃない。世界の旋律、聖域の根幹を覆すことなんです」

「……」

常に軽く響いていた男の声が急に鋭くなった。

まるで喉元に剣先を突きつけられているかのように、男の気に押しつぶされるような錯覚を覚える。

輝く金の双眸が不安に揺れた。

「それでも先に進みますか？希望など存在しない悪夢の荒野を」

## 嘆きの塔 6

「もちろんよ。この身が朽ちようと、この信念は消えない」

暗闇に向かって、堂々と言い放つ。

金色に輝く瞳が先の見えない闇を貫いた。

「ははっ。愚問でしたね」

相手は乾いた声で笑う。

「君が信じるように行きなさい。この先は、もう引き戻ることなど  
できません。……君の信念が砕け散るその時まで」

「わたしは絶対に目を逸らさないわ。どんな結末が待っていてしようと」

「いい眼をしている。この情熱をいつまでも引き止める訳にはいき  
ませんね。さあ、運命の子よ。私の言葉をよく聴きなさい。君から  
見て、右側の壁に斧が突き刺さっている。ここに落ちたものが失望  
して首を切るように置いてあるものです。もう何年もそのままです  
び付いていますが、君の手かせを壊すことなど訳はないでしょう」

言われるようにハニーは壁際へと移動した。

見えないものへの恐怖に竦む足を叱咤し、恐る恐る手を伸ばす。

「そう、そのあたりだ。君の手を傷つけないように気をつけて」

本当に斧など存在するのだろうか。

今はただ男の言葉を信じる以外、何もできない。

八二一の手が触れた冷たく湿った壁の感触が不意に変わった。それは異様な突起のようだった。

「あつた」

興奮したように八二一は叫んだ。

これで、開放される。

そう思うといてもたつてもいられず、八二一は乱雑に自分の腕に食いつく手かせを斧に引つ掛けた。

もし、このまま何かの弾みで手首ごと落ちてしまっても、後悔はしない。

やっとなつかんだチャンスを前に八二一は必死だった。

ただ手が自由になるだけ。

この先に待ち受けている幾重もの苦難がなくなった訳ではない。そればかりか、今はこの暗闇から抜け出すことさえ叶わずにいるのに。

それでもやっとなつかんだ希望の光を見失わないように、八二一は自分を奮い立たせた。

「できたかい？これで君は自由だ。どこにでも旅立てる。さあ、小鳥さん、全ては君の望むまま。暗闇に失望して、命を絶った先人達とは違う」

「え？」

「暗闇や噂に騙されないように。ここは決して密室ではない。ここにあるのは、人の心の弱い部分に入り込む悪魔だけ。そう、人を失望に追い込む暗闇という名の悪魔さ。ただの暗闇に、人は悪魔とい

う幻影を描く。そして勝手に狂っていくんだ」

「暗闇が悪魔を見せる……」

「そう。人は完璧な生き物ではない。もろくて、弱くて、そして強欲なんだ。よく覚えておいで。複雑に絡まった人の心が悪魔を大きく育てる。君に襲い掛かった悪魔たちは、いったい誰の心から生まれたんだろうね」

「た、たとえば？」

この男は本当にずっとこの塔にいたのだろうか。  
何故、こんなにも全てを見透かすように話しかけてくるのだろう。

「さあ？あまりに恐れ多いことに口にすることも憚られて……。それよりもいいのですか？私は君といつまでも話していたいけど、でも、君は時間がないのでしょうか？」

「そ、そうよ。ねえ、出口はどこにあるの？」

男の言葉にはたと気づき、ハニーは身を乗り出すように叫んだ。

この男の存在が気にはなる。

しかし今は、それよりももっと大切なことがある。

「どこって？それはね」

含むような声が途切れた瞬間。

どんつと壁をたたたく音。

そして……。

「え？」

八二一の体が宙に踊った。

「いやあああゝ！」

不意になくなった足元に、さらに突き落とされる暗闇に、八二一は身を固くした。

まさかまた、落とされることになるなんて……。

「ああ、言い忘れていた。悪魔は実在するんだよ。それを確信した者の前にのみね。それは一種の異空間だ。世界の旋律の影の話。旋律どおりに生きる君には関係ない話かな？でもその影は君を放つてはおかない」

八二一の絶叫が遠ざかっていく、狭い地下牢に男の空々しい声が響いた。

「って、もう聞こえていないか。さようなら、可愛いお姫様。もう二度と会うことなどないだろうけど。君の進む道に幸あらんことを」

## 夜は明ける

ハニーが落ちたのは、狭い地下通路だった。腐臭がたちこめるそこは、さつきまでハニーがいた地下牢よりも劣悪な場所だった。

しかし、ハニーはただ懸命にかけた。

その先に本当に出口があるのか。

本当に地上に出て、新鮮な空気が吸えるのか。

考えれば考えるほど、自分を包む暗闇が重くのしかかる。

心に滲むように現れた悪魔がハニーにささやく。

「もう立ち止まろう。この先にあるのは変わらない闇だけよ」

その声を振り切るようにハニーは大きく被りを振った。

「エル……」

やっとの思いで絞り出た呟きが、孤独な彼女を支えた。

(そうだ。私には果たすべき約束があるのよ)

きつと金色の瞳を闇の向こう、その先にあるであろう出口に向けた。

ここにはもう悪魔はいない。

暗闇に悪魔を思い描く者がいなければ、悪魔は存在しない。

「あと少し……」

ハニーは痛みに悲鳴を上げそうになる口をぎゅっとかみ締めた。

もう体はとうに限界を迎えている。  
でももう立ち止まっている時間はない。

「待っててね。エル」

友の名が響いた永遠に続く深淵の闇の、ずっと先に小さく輝く光を見た。

\* \*

瞼越しにまばゆい光を感じ、ハニーは薄目をあけた。  
いつの間に眠りについたので、まったく記憶がない。

何か夢を見た気がするが、それすらも眩い朝日を前に霧散してしまった。

心底疲れ、泥のように眠っていたらしい。

気が付いた時にはすでに日が高く上っており、灰色の広間に少しばかりの朝の光が届いていた。

「こんなに寝てしまうなんて」

追われる立場にありながら、なんと胆の据わったことだろう。

自分でも驚くほどの豪胆さだ。

（敵の存在をも忘れて爆睡……。国を追われた女王ってのは、もっとこう、儂げなもんでしょ）

自分の鈍感さと神経の図太さに打ちひしがれる。  
色々と噂されているがこれが彼女の素の姿である。

「起きた？ハニー」

落ち込むハニーと違い、朝の光を受けその美しい金髪を輝かせる少年エルは極上の天使の笑みを浮かべている。

その神々しさに自らが薄汚れて見え、思わず身を引しまう。

「エル…朝から元気ね」

「ハニーが側にいるからね」

屈託なく微笑むエルは見惚れそうなほど愛らしい。  
起きぬけに見ると眩しすぎて心臓に悪い。

(そんな可愛いこと、そんな素敵な笑顔で言わないでよ！)

心なしか赤く染まった頬に手を当て、心の中で叫んだ。

しかし当の本人はその絶叫に気付くはずもなく、にこにこ笑顔を浮かべハニーを見つめている。

心の叫びを少年には悟られぬように、ハニーはお得意の澄ました女王の顔を浮かべた。

「そ、そう？」

「そうだよ。ハニーが側にいるから、朝がこんなに素敵に感じる」

(この子、小悪魔だわ)

くらつとくる一言に苦笑いしか浮かばない。

人の心を惑わす、可愛い小悪魔。

悪魔は人の心が描いた幻影だという、あの男の言葉が不意に思い

出された。

( なら、この子が小悪魔に見えるのは、私の心のせい？いいえ、きっとこの子が生まれ持った素質なんだわ )

乾いた笑みを浮かべたが、心臓は飛び跳ねんばかりだった。

心を落ち着かせようと大きく息を吐く。

十歳ほどの子どもの言葉にこれほど振り回されている自分が恥ずかしい。

でもその飾らない言葉や愛らしい微笑みについて心が流される。

今でこんなに女性をドキドキさせるのだから、年頃になればどうなることだろう。

( 行く末が恐ろしすぎる。これは……この子の両親に会って十分言い含めておかなきゃだわ。このまま何も知らずに成長したら、いつか血を見るわね )

訳の分からない使命感に駆られ思わず変な決意をし、ハニーはエルそっちのけでうんうんと頷いた。

「これからどうする？」

その心の内などまったく気にせず、エルは麗しい笑顔をハニーに向けて。

「そ、そうね。取りあえずここを離れましょう。出来たらゼル離宮に戻りたいの」

「そう。じゃあ行くっか」

何の迷いもなく、一つ返事で立ち上がったエルはにっこり微笑んだ。

そして小さな手をハニーに差し出す。

明るい光を背に受けるエルを眩しそうに見上げ、ハニーは目を細めた。

背から零れる光が翼のようだ。

見惚れるように光の中のエルを見つめる。

(彼は本当に天使かもしれない)

先の見えない闇で迷うに彼女に天がつかわした道標。

彼の正体は本当に天使のアナフィエルで、人間エノクを天界まで連れていったように自分も天界のように眩い世界へ連れて行ってくれるかもしれない。

自分に都合のいい、夢のような想像をして小さく微笑んだ。それでも思いつきで付けた名に何かを感じずにはいられない。

「ふふっ」

「どうかした？」

「何でもない。あなたがまるで天使に見えたから」

ハニーは不思議そうにするエルの頭を優しく撫でてやった。眼を細め、されるがままのエルは困ったように眉を寄せた。

「そんな。ぼくは天使なんかじゃない」

「ちよつとした夢の話よ」

「ぼくが天使じゃなくて、がっかりした？」

ハニーの顔を窺うようにエルが上目使いに見つめてくる。

「馬鹿ね〜。そんな訳ないじゃない。天使みたいに愛らしいってこと！あなたはわたしにとつて、天使なんかより大切な存在よ」

そう言ってエルをぎゅっと抱き締めた。

ハニーの腕の中でエルはこそばゆいような、気恥しそうな笑みを浮かべた。

「あなたに出会えてよかった」

先は長く、受難の道は険しい。

しかし思いもかけず得た仲間が存在が彼女の心を強くした。

(そうだ、わたしは一人じゃない)

## 悪魔の瞳

神殿を離れた二人は道なき道を上へ上へと登るように進んだ。  
着ているものはただのぼろきれ。

しかしハニーは昨日とは違って、身も心も落ち着いた温かみに包まれていた。

鬱蒼と茂る森に昨日は不安を掻き立てられたが、今は心なしか明るく見える。

「わたしって単純」

呆れるように肩を竦ませながら、盛り上がった木の根を越えようと手を掛けた。

身軽なエルは軽やかに上り、ハニーに手を指し出しながら不思議そうに首を傾げた。

「なんで？」

「昨日は怖くて死んじゃうかもって思ったのに、あなたと出会って心に余裕が出来たのだから。こんなにも深い森が素敵に感じちゃうなんて」

「それは恐怖に囚われてちゃんと見れてなかったんだよ。本当はそんなに暗い森じゃないもの」

「そうかもねと呟きを返す。

エルもあの男と同じようなことを考えるんだとふと感じた。  
よっこらせと木の根を乗り越え、ハニーはふうと息を吐いた。

「あなたってという味方が出来て本当に良かった。あつ、でも騎士団に出会ったらわたしを置いて逃げるのよ。エルまで巻き込むのはごめんだからね！」

これだけは言っておかねばとエルに顔を向ける。

「それは出来ないよ。ぼくはハニーともう二度と離れられないもの。あなたが助けてくれたように、ぼくもあなたの力になりたい」

エルは眉を寄せ、嫌がるように首を振ると真摯な瞳をハニーに向けた。

その澱みのない澄みきった瞳は吸い込まれそうなほどに深い。鼓動が大きくが跳ねた。顔が一気に赤くなる。

「ありがと！言葉だけ嬉しく受け取っとく。……でも、いいこと！あなたの笑顔は魔性の笑みよ！だから無暗にやたらに笑いかけて女性を困らせてはダメ！間違える人、続出よ？」

慌てて、何かを誤魔化すように口をもごもごさせたハニーにエルは不思議そうに首を傾げた。

「魔性？どういう意味？」

頬を赤く染めた彼女の前に愛らしい顔がずっと寄ってくる。

「わあ！近い近い！」

「ハニー、顔赤いよ？」

「そりゃ人間だもの。赤くなりたい時は赤くなるのよ。それだけの

「ことよ！あはははっ！」

訳の分からない理由を並べ、空気を変えるように大声で笑った。

「あははっ。赤くなった方が温かいでしょ？」

乾いた笑いを続けるハニーの手をエルはつと取った。

「ハニー……疲れてるの？」

「うっ……うん」

憐れむような幼い眼差しにハニーは一人取り乱しているのが悲しくなり肩を落とした。

二人は懸命に進み、遂にその先が切り立った崖になっているところまで来た。

向こう側にも深い森は続いているが、崖は深く、その下から押し寄せるような轟音をたてる水音が聞こえる。

多分川になっているのだろう。

この川沿いに歩けば、下流からゼル離宮に行くことも可能であろうが、今は下に降りる術も、また川を下る術もない。

昨日から歩き通しだったハニーはその切り立った崖を見て、絶望するように立ち竦んだ。

体力が限界で、足が動かない。

身を切る冷たい風に狼に噛まれた傷が疼く。

裸足の彼女に容赦なく刺さる石や木々の枝で肌はボロボロだ。

飢えて渴ききった喉は焼けるように痛い。

先の見えない道に疲れが一気に噴き出し、へたれるようにその場に座り込んだ。

「ははっ……先がないなんて」

「大丈夫だよ。ハニー！きつとどこかに道は続いているはず」

「だといいんだけど。はあ、この崖を飛び越えられたらどれだけいか。流石にブラッディー・レモリーの噂に空を飛ぶつてのはなかつたわね。付け加えておこう。ふふっ……なんだか飛べる気がしてきた」

据わった眼で怪しげな笑みを浮かべたハニーにエルは泣きそうに飛びついた。

「帰ってきて！ハニー！大丈夫、ぼくが道を探してくるから。後、食べ物だつて見つけてくるから。だからその間ハニーは休んでて」

疲れ切ったハニーを心配し、一人元気なエルは深い森の中に入っていた。

一人残されたハニーは地面に転がる倒れた木に腰掛け、切り取られたように木々の隙間から見える透き通る青空を見上げた。

この国で晴れ間が見られるのは珍しい。

常に厚い灰色の雲が空を覆い、国全体がくすんで見える。

この空を国民はどんな気持ちで見ているのだろうか。

輝く太陽に女王の無事を祈るだろうか、それとも女王が死して空に晴れ間が戻つたと歓喜するだろうか。

女王に対する根も葉もない噂は国民の耳にどのように届いているのだろうか。

一度失ってしまった信頼を取り戻すのは国を取り戻すよりも難し

い。

それでも…。

「それでもいかなきゃならない。わたしを持っている人がいるから……」

「ほう、殊勝な心がけだな」

ガサリという草を鳴らす音と共に、朗とした男性の声が届いた。

その声に身を固くし、身構える。

聞き覚えのある声だった。そう、聞き心地よくどこまでもはつきり通るテノールの声。

それは昨日ハニーに冷たい一瞥を向けた隻眼の異端審問官の声。

## 悪魔の瞳 2

(まさかこんなところまで追いついてくるなんて…)

弾かれたように顔を上げ、腰かけた木から離れる。

逃げ場を捜すように辺りを見渡したが、後は崖だ。

頬に冷や汗が流れた。

昨日の恐怖が蘇る。

木々の合間から現れた異端審問官は昨日と同じで全身を黒に包んでいた。

うす暗い森に肩の赤い花十字だけがぼっかり浮かんで見える。

「やあ、会いたかったよ。愛しい人」

馬鹿にしたような笑みを口元に浮かべ、絶対零度の凍てついた瞳をハニーに向けた。

端正な顔立ちは見惚れるほどに美しいが、その性格の為か影を帯び冷徹で意地が悪く見える。

氷の美貌は口を開くと途端に、嫌味でいけすかない顔に変わった。

ゆっくり近付き、サリエは状況を楽しんでいるかのように自らの唇をなぞる。

闇のように深い黒曜石の瞳は好奇に満ち、ハニーの心を見透かすように向けられた。

「ここまで俺が追いついたことが信じられないといったところか。何でも顔に出るのは一国の女王としていただけだな」

「ほっておいて!」

「そう叫ぶな。短気な女だ。これでよく楚々とした聡明な美女と言われたもんだ。こっちは噂の実体がいかほどのものか楽しみでいたのに。本物を目の前に心底がっかりだ。噂とは本当に当てにならない」

長いため息と共に首を振る彼に、八二一は恐怖の前に怒りを感じた。

「勝手に噂を信じるからいけないでしょ！見る人が見ればそうなのよ！あんたね、ねちねち嫌なことばかり言っていないで、早くわたしを捕まえたらどうなの？それとも口ばかり？ほんっと、男ってやんなっちゃう」

サリエに対抗するようにこれでもかと肩を竦め、はっと馬鹿にするように息を吐く。

隻眼の異端審問官は冷たく、どこか哀れむような視線を向けてくる。

「天然の馬鹿か？それとも追われる上で頭までおかしくなったか。自分から捕まえるよう敵を炊きつけるなんて」

「うっ…」

確かにその通りである。

しかしは二一の頭にその概念はなかった。

腹立たしさを抱えたまま、上辺だけの駆け引きなどできない。

思ったことはすぐ口にし、態度で示すのが彼女流である。

「思慮浅く、女王の気質ではない」

サリエは薄汚れたハニーを観察するように見つめながら、淡々と距離を縮めて近付いてくる。

(むかつく!)

言わせてばかりいられない。何かを叫ぼうと口を開きかけた。

「なっ!」

その一瞬の間にサリエは目の前まで来ていた。

俊敏すぎて彼の動きが分からなかった。

驚愕の表情のまま何もできずに立ち尽くしていると、その頬をサリエは遠慮なく掴んだ。

そして力任せに自分の方へと向ける。

掴まれた頬に緊張が走った。

抵抗しようと試みるが、凍てついた闇色の瞳がそれを許さない。

日の光を受けてなお暗く揺らめく瞳は蠱惑的で、見つめられたハニーの心を妖しくかき乱した。

心臓が胸の中で暴れ出す。

「しかし、興味深い性質だ」

「何を…」

驚きと恐怖に言葉に詰まる。

(ま、負けないわよ!)

恐怖の滲む眼で必死に目の前の敵を睨む。

「ほう、まだ俺を睨むか。どれだけ追い込まれてもけして諦めよう  
としない。先が見えない馬鹿なのか、それとも強靱な心の持ち主か  
」

「離して！」

身を捻じり、精一杯の力を込めて自分の頬を掴むサリエの手を払  
った。

そして距離を取るように彼から離れ、はあはあと息を切らしなが  
ら体を緊張させた。

「何よ！やるならやりなさいよ！でもちゃんと覚悟なさい！わたし  
を殺せば後で絶対後悔するんだから！」

「覚悟…ね。女王殺しの後悔なぞ恐れていて異端審問官が務まると  
思うか？」

「違う！あなたの知っていることは全て仕組まれたこと。わたしを  
殺せば、あなたは真実を知った時打ちひしがれることになるのよ！」

怯える心を奮い立たせ、サリエを指さし叫んだ。

そう、全ては巧妙に仕組まれた罠。

若き女王を王の座から引きずり落とす為に描かれた陳腐な悲劇。

その真実を知る者は少なく、だからこそ深い森を彷徨ってでも全  
てを明かす為に城に行かねばならないのだ。

その噂の真実を彼に伝えれば、彼は八二一に同情するだろうか。

慎重にサリエと距離を取りながら、思考を巡らした。

だが結果は否だ。

確かに剣を携えた味方ほど欲しいものはない。  
だが彼が八二一の話聞きいれるようには見えなかった。

悔しげに唸り、無意識に傷を負った肩に手をやっていた。  
まだじんわり熱を持っている。

この傷は戒めだ。

自分の使命を忘れぬように、この痛みを忘れてはいけない。

(だって、もつと痛かったはずだから……)

エルの胸に刺さった妖しく光る刃。

溢れる血は止まることなく、美しい容貌を真っ赤に変えた。

血の海に伏して、自分に訴えかける悲痛な瞳。

思い出したくない光景に八二一は表情を強張らせた。

その強気の眼にうつすら涙が浮かぶ。

その瞳で厳しく目の前の無知な男を睨んだ。

けてこの男に負ける訳にいかない。

大切な友人の為にも自分は城に戻り、真実を取り戻さなくてはならない。

それがこの国、ひいてはエルの為になる。

(この国に平和の灯を取り戻さなくては)

「わたしはあなたなんかには負けない。真実は明かされなければならないのよ!」

高々と言い放った八二一は高潔な女王そのものだった。

言葉の端々に強い覇気が籠り、追われる者の影一つない。

厳しく指さされても冷酷なサリエの表情は変わることなく、動揺すらしなかった。

むしろ山場を迎えた劇を興味深げに見つめる傍観者のような眼差しを浮かべる。

「真実ね。おもしろい、どんなことがこの一連の事件に隠されていると言っただ？」

「全てが仕組まれたことなのよ！ブラッディー・レモリーの噂も、血に塗られた惨劇も！」

興奮し言葉を熱くする彼女と違い、サリエの表情はどこまでも冷やかだった。

黒曜石の瞳を意地悪く細め、形の良い唇をなぞった。

「実に興味深いね。……しかしお前の言う真実が真実として名を残すかはまた別の話だ。歴史とは為政者のもの。真実と歴史で語られる事実は違っていても訂正されることはない。何故なら敗者に待っているのは常に無情の死だからだ。死人に口なし。けして真実が表に現れることはない」

「なっ」

「陰にどんな陰謀があろうと歴史は常に人の手で勝手気ままに描かれていくものだ。噂が根も葉もないのと同様、歴史もまた詭弁だ」

まるで始めから全てを知って、からかっているかのような口ぶりだった。

「あなたは何を知っているの？」

そう言うのが精一杯だった。

強張った顔でただ冷酷な男を見つめる。

麗しい笑みを浮かべるサリエがハニーには邪悪な悪魔にしか見えなかった。

「何も。いや、あるいは全てを」

「……陰謀があつたと知っているくせに、わたしを殺そうとするの？」

「重要なのは真実か否かではない。歴史に残るか否か、つまり勝者になるか否かだ。お前はこの仕組まれた劇の勝者になれるのか？」

「なるわ。だつて約束したんだもの！」

そうだ、この国を守ると約束した。

その誓いに殉じる覚悟だ。

煌めく瞳から大粒の雫が流れた。

ずっと心に溜めていたものが溢れ出したかのように、堰を切って止まらない。

目の前の異端審問官が段々霞んで見える。

「ふんつ。女だからって泣けばいいなんて甘いものではない。そういう武器はここぞとい時まで取っておいた方がいいんじゃないか？」

「あ、あなたの同情買いたくて泣いてんじゃないわよ！ちょっと目にゴミが入っただけ！」

馬鹿にしたサリエの言葉に「ごし」と眼を拭くと、きつと睨んだ。こんな男に泣き顔を見られるなど一生の不覚だ。

「それはそれは。よほどでかいゴミが入ったんだな。取ってやろうか？なんなら眼球ごと」

「煩い！ほつといて！！」

面白がるように隻眼の男がハニーの頬に手を伸ばした。

ハニーはそれを拒絶するように拳を握り殴りかかる。

しかし相手は百戦錬磨の死の天使。

ハニーの渾身の力を込めた怒りの鉄槌はいとも簡単に避けられた。力任せに繰り出した拳がその目標を失い、ハニーは腕に引きずられてよろめいた。

限界を迎えているハニーの体では、踏ん張ることもできない。地面に倒れそうになる。

「あつ！」

来るであろう衝撃に眼を瞑る以外できない。

体をこわばらせたハニーの赤い髪をサリエは躊躇なく掴み、ぐいと自分の方へ引き寄せた。

バランスを崩したハニーのか細いからだ、流されるがままにサリエの胸にぶつかる。

その耳元でサリエが楽しげに囁いた。

「その涙に免じて、一ついいことを教えてやろう。お前が殺した、とされているウォルセレンの王女は一命を取りとめたらしい」

「本当？」

弾かれたように顔を上げる。

見開かれた金色の瞳が燃え上がった。

その瞳を嫌味で冷酷な隻眼が見返した。

八二一の言葉に是とも非とも答えず、ただ囁くように一言。

「ただその命は風前の灯、いつ消えてもおかしくない。さあ、お前は間に合うかな？彼女の死に目に」

### 悪魔の瞳3

サリエは意地悪な笑みを浮かべ答えた。

ハニーをからかってばかりで彼の本心が見えない。

この男の思惑が見えずにハニーは当惑した。

「本当に？」

もう一度、念を押すように聞く。

「真実は生き残って確かめるんだな」

「……あなた、わたしを殺す気がないの？」

女王を殺す為にここに存在する男に恐る恐る戸惑いの眼を向けた。彼はハニーを馬鹿にして、脅して、翻弄させる。

でもまだ一度もその刃をハニーに向けていないのは、偶然だろうか。

「まさか。ただ簡単に殺せるものを直ぐにやらないだけだ。どうせ殺すんだ。何処までも怖がらせ、じわじわいたぶる方が楽しいだろ？」

「最低！」

「どつとでも」

「あんた、それでも教会に属す異端審問官なの？神に祈る前に自分の性格改善しなさいよ！そんな性格で天国行ったら詐欺よ。詐欺！地獄に堕ちればいいんだわ！」

ハニーはサリエの胸をどんと叩いた。  
だがサリエはその表情を変えることなく、つかんだままのハニーの髪をぐいっと引っ張り上げた。

「つつ」

引っ張られた髪が痛い。

無力なハニーは最後の抵抗とばかりにキツとサリエを睨みつけた。  
しかし、そんな眼差しなど、サリエには何一つ聞かない。

「麗しい氷の美貌を動かすことなく、無情の瞳がハニーを見返す。」

「俺は神など信じない」

「なんつですって？」

静かに告げられた言葉の意味が理解できず、ハニーは眉を寄せた。

「故に天国も地獄も信じない」

「何を言って……」

「ははっ、神を冒したら地獄に堕ちるんだっただな。どうだ？満足か？」

サリエの眼はけして笑わない。

戸惑ったようにその顔を見つめ返した。

彼が口にした言葉は神に仕える者として、絶対に口にはいけ  
ない言葉だ。

それをあまりもさらっと言ってのけた彼の意図がハニーにはまっ

たく見えない。」

「何それ？異端審問官流のブラック・ジョーク？笑えないんだけど？」

「本気だ」

「訳分かんない！」

サリエの手が緩んだ隙に、その胸を押しやり必死に逃げだす。

髪の毛の束縛は簡単に解け、ハニーは緊迫した面持ちでサリエと距離を取った。

「残念だな。もう少し、この手で抱き締めていたかったのに」

薄い唇を上げ、サリエは魅惑的な笑みを浮かべた。

凍てつくほどに冷たく、しかし胸の内に熱い炎を灯す笑みに頬は一気に上気した。

「ふざけんじやないわよ！髪を掴んでただけじゃない！」

「ん？抱き締めてほしかったか？」

「ちっがうう！！そんな訳ないでしょ！」

「女王様は初なのか？真っ赤だぞ」

揶揄する口元は意地悪く、小馬鹿にするようにサリエはせせら笑った。

その笑いに益々赤くなる。

サリエにからかわれているのが癪で、剥きになって叫んだ。

「違う！あなたの馬鹿さ加減に呆れただけよ！」

「おいおい、それ以上大声で叫ぶなよ？俺の他にもこの森にはたくさん騎士がうろついている。死を急ぎたくなかったら、俺の言葉に従え。運が良ければ、何かが変わるかもしれないぞ？」

「あなたになんか従わない。全ては自分で変えてみせる！」

「そうか。では自らの浅はかさを恨んで死ぬんだな」

腰に携えた剣に手を当て、サリエは冷笑を浮かべる。

「ほら、お前が大声を出すから、俺の仲間が近付いてきた。馬鹿な女だ。命乞いでもしていれば何か変わったかもしれないのに」

心底呆れたかのように首を振ったサリエの背で騎士団のものとと思われる声が響いた。

それは地に堕ちた女王を更に貶める言葉だった。

その数は一つではない。

十数、いや数十にも上る。

これが真実なのだろうか。

ハニーの知る真実と正反対の造られた真実。

誰一人真実を知らず、造られた歴史の中にハニーは闇として葬られてしまうのだろうか。

(そんな訳にいかない)

大きく息を吐くと顔を上げ、毅然とした態度で目の前の男を見つ

めた。

その瞳には困惑も恐れもない。

「悪いわね。わたし、諦めが悪いの」

自分でも不思議なほど緊張感から解き放たれた。

「愛らしい口元を上げ、それは優美に微笑む。

流石のサリエも虚を突かれたのか、手を剣に当てたまま目を見開いた。

「この手がどれだけ血で汚れても、どれだけ蔑まれても、この足を止める訳にいかない。あの瞬間から全ては決まっているから」

決意に満ちた眼が悲しげに揺れる。

サリエはただ黙って、毅然とした女王の独白を聞いていた。

「おかしいでしょ？ここまで貶められてもそれでも捨てられないものがあるなんて。……でも、約束したから。だから、わたしは行かないやならないの」

その時、木々が悲鳴を上げるように鳴った。

がちやりと甲冑が地面を踏みしめる音が森にこだまする。

「おいでのようだ」

サリエの声が無情に響いた。

その声に導かれるように十数人の騎士が二人のいる場所に目だけが駆けてきた。

彼らの羽織る赤いマントが大きくはためいた。

騎士達の肩には黄色の花十字が染め抜かれている。

(あれはアンダルシアの騎士。この国から遠く離れた地にある国なのに、もう到着してるの！)

目を見張る間に彼らはサリエとハニーを囲むように楕円に広がった。

そして各々が手にした槍を彼女に向ける。

「ブラッディー・レモリー！貴様はこのアンダルシアの雄マントルが討つ！」

騎士達の中で一際立派な甲冑を身につけた長身の男が一步前に出た。

前に立ちはだかるのは赤いマントの騎士。

後ろは崖。

逃げ場などなかった。

(絶対絶命ってこのことね。この場にエルがないことを感謝するばかりだわ)

ハニーは固唾を飲んで目の前の赤い壁を見つめた。

ざわめき、焦燥に駆られる心で自分の為に道を探しに行った少年を思う。

(あなたの名前、捜してあげるつもりだったんだけど、お別れね。何もしてあげられなくてごめん……エル)

少し視線を落として、愛らしいエルの笑顔を思い出し悲しげに微笑む。

しかしそれも僅かの間。

次に顔を上げたのは、燃えるような金色の瞳で勇ましく赤い騎士たちを見返す血に濡れた女王だった。

## 悪魔の瞳 4

きつと口を結ぶとハニーは何者にも動じない瞳で赤い騎士たちを見返した。

その堂々とした態度に一步前に出たマントルが虚をつかれたように、眼を見張った。

だが、そのか細い体にすぐに敵にあらざと判断したのか、さらに一步前が出る。

「抵抗するつもりか！」

まるで獅子の雄叫びのようだった。

射るような鋭い声が森の木々をざわめかせる。

「どこの騎士団も必死だな。まあ、当り前か。この女王を手にした騎士には最高の褒美と地位が用意されているからな」

鬼気迫る面持ちで追うべき女王に槍を向ける騎士達を小馬鹿にするようにサリエが肩を竦めた。

揶揄された言葉に眉を寄せ、マントルは初めてサリエの方を向いた。

「何だ、お前は？どこの騎士団だ？」

「異端審問官ですよ、ただの」

「はっ、異端審問官だと？」

マントルはサリエの言葉に嘲笑を浮かべた。

「ただの司教じゃないか。そんな軟弱な者はお呼びじゃないんだ。引っ込んでろ！」

太い腕でマントを払い、サリエを後ろに押しつけた。

彼は何も言わずにマントルを見つめる。

その眼が一瞬禍々しく光った。

「マントル団長！あれは邪眼のサリエです！黒髪黒眼の、眼帯をした死の天使。あの左眼に悪魔が憑いていると聞いたことがあります。あの悪魔の瞳に睨まれると一瞬で射殺されるのだとか！」

噂好きのアンダルシア人らしい言葉だった。

嬉々とした表情で騎士の一人がマントルに報告する。

マントルは細面の顔を珍奇に歪めた。

明らかに目の前の隻眼の男を侮蔑している。

討つべき対象である女王そっちのけで騎士達は陰険な空気を醸し始めた。

(悪魔の瞳ですって。ブラッディー・レモリーの邪眼みたいな噂ね)

興味をそえられるが、この瞬間を逃す訳にいかない。

どこかに逃げなければとハニーは辺りを見渡した。

「悪魔の瞳だつて？なんだつて、そんな奴が異端審問官などとしているんだ？」

「噂ですよ？根も葉もないね」

見下したような視線で騎士達が噂の異端審問官を見やる。  
好奇の目で見つめられたサリエは面倒くさそうに肩を竦めた。

「はん！所詮は何の特技も持たない異端審問官の箔付けだろ？」

「いやいや、団長。あなたが間違えではないかもしれませんが！あの眼帯の下には醜悪な悪魔の瞳があるはずですよ」

「お、俺も聞いたことあるぞ。邪眼に睨まれても立っていられる者は真の勇者となる素質があるのだとか……」

アンダルシアの騎士達は口々に心ない言葉を吐き、せせら笑った。

「真の勇者……それはいい。ちょっと、お前、その眼帯を取れ！」

勝ち誇ったようにマントルがサリエの左眼を指差した。

「ふっ……真実は噂通りにはいきませんか？それでも見たいですか？」

自分を蔑む視線をサリエは陶器のように硬質な顔に流麗な笑みを浮かべて受け流した。

その圧倒的な美しさにアンダルシアの騎士達は一様に息を飲む。

まるで大輪の雪花が花開いているかのようだ。

艶やかで、透き通るほどに麗しい。

だが柳眉の下の永久凍土のような眼はどこまでも冷酷な色を浮かべている。

アンデルシアの騎士団と一緒に思わずその笑みに目を奪われたハニ―は冷酷な異端審問官から眼が離せなかった。

(男の人をこんなにも美しいと思ったのは初めて……。でも、何でこんなに寒気がするんだろ?)

サリエの造られた笑みに背筋が凍るように感じた。

(もしかして…怒ってる?)

怒りが頂点に來れば來るほど、サリエは美しく微笑むのかもしれない。

心に沸々と沸く激情を感じさせないほど凍てついた笑みでそれを隠す。

脳裏に昨日、あの神殿での彼の言葉が浮かんだ。

『悪魔とはその力が邪悪であればあるほど醜悪な姿を隠して、天使のような顔で現れる』

(自分のことじゃない)

騎士達のやり取りを見つめながら、ハニーは身震いが止まらなかつた。

震えを止めようとぎゅっと両肩を抱く。

それほどまでに彼の笑みは恐ろしかった。

その場の空気が凍えるほどに張りつめた時、ざわつと木々が震えた。

「熱を上げているところ悪いが……それは俺の獲物だ」

それは体の心から全てを凍りつかせるほどに禍々しい声だった。

## 悪魔の瞳 5

それは美しい笑顔が劇的に変わる合図だった。

彼の凍える瞳が険しく、禍々しい気を放つ。

一つの衝撃となってアンダルシアの騎士達に押し寄せる。

「なっ！」

騎士達は皆その眼力に射竦められ、凍りついたように動けない。

「馬鹿にする時は人を選ぶんだな。そうすれば長生きできる」

(同じ人間に対してこれほどまでに恐怖することがあるなんて……)

自分に向けられている訳ではないが、ハニーはその鋭い視線に動くことができなかった。

「さあ、お望みどおりに悪魔の瞳を見せてやる。人生、最初で最後の瞬間だ。先はないんだ。とくと味わえ！」

静かに下される死の宣告。

サリエは徐に自らの左眼に手を当てた。

眼帯がゆっくりとずれる。

(本当に……悪魔の瞳の持主なの？悪魔なんて存在しないのでしょう？)

ただただ事態を見つめるしかできない。

恐ろしさの為か、ハニーの皓歯が無意識にかちかちと震えた。

「ひっ、やめてくれ！許してくれ！」

先ほどまでと一変、騎士達は怯えた表情を浮かべた。邪眼などなくても十分なほど彼の瞳は恐ろしい。

身をもってそれを感じたのだろう。

しかしサリエの手は止まらない。

頭に後ろで括られていた眼帯の紐がぱらりと解けた。

「悪かった！お願いだ、助けて……」

騎士達は顔を歪めて懇願した。

先ほどまで強気一辺倒だったマントルはその顔を蒼白させ、言葉の出ない口を無意味に動かしていた。

絶対零度の気を放つ右の瞳だけでも人を恐怖に陥れるのだ。

隠された左眼の恐ろしさは計り知れない。

（なんて、無情な男なの？謝ってるのに……。同じ聖十字を抱く騎士団なのに、射殺そうとするなんて）

彼らのやり取りを見つめながら、恐怖の中に違う感情を感じた。

怯える騎士達への同情だろうか、それとも同じ騎士団の仲間を殺そうとしている黒い男への怒りか。

ハニー自身よく分からない。

ただ叫ばずにはいられなかった。

「やめなさいよ！謝ってるじゃない」

声が上がらず、締まらない口調になってしまった。

しかしそんなことに構うものかと、意を決したようにサリエを睨

む。

思いもしない横やりには彼は不機嫌そうに眉を寄せた。

「見たいと言ったから見せてやるんだ。お前は黙ってる」

「いいえ、黙らないわ！人が殺されそうになってるのにただじっと見ているだけなんてわたしには無理なもの！」

険しいサリエの視線に負けるものとふんと胸を張った。

「……お前は怖くないのか？」

隻眼の異端審問官は眼帯に当てた手をそのままにハニーの方を見やった。

曇りなき黒曜石の瞳がハニーを興味深げに捉えている。

「怖い？ふざけないでくれる？それでも邪眼持ちのブラッディー・レモリーって呼ばれてるのよ！」

恐怖がない訳ではない。

強がらなければ、体が震えてしまう。

それでも感情のままに叫ばずにはいられないのだ。

(浅はかかもしれない。この隙に逃げるが普通かもしれない。でも……)

悪魔と呼ばれようと、血に濡れた女王と蔑まれようと、自分の信念を信じ思ったままに行動するという本質は変わらない。

迷わない。

諦めない。

後悔しない。

これが彼女の三カ条だ。

肩を怒らせるとびしりとサリエを指さした。

「そんなことして何になるのよ。悪魔の瞳って言われて怒るのは当然だわ。でもその瞳で人を殺したら、もっとその瞳が嫌になるわよ？」

## 悪魔の瞳 6

心ない蔑みに痛む気持ちはよく分かる。

だからこそ、その言葉に負けてはならないのだ。

(負けたら終わり……きっと自分が嫌いになる)

その気持ちをサリエにも知ってほしかった。

怖かっただけの隻眼の男が孤独で傷ついたただの青年のように八二一の瞳に映った。

その黒曜石の瞳が一瞬戸惑うように揺れた。

「馬鹿が……」

そう呟くとサリエは一気に眼帯を取り、俊敏な動きで体を強張らせている騎士団を見やった。

「だめ！」

あっと呟く間もない間の出来事だった。

「ひっ……」

引きつったように息を飲み、ばたばたとアンデルシアの騎士達が倒れた。

十数人の騎士達が重なるように倒れ、地面が赤く染まる。それぞれが痙攣したようにピクピクと体を震わせている。

「なんてことを！」

息を飲んだ。

陸に上げられた魚のように体をばたつかせ、苦しげに喉を押さえる騎士達。

その前に立つ漆黒の男が本当に悪魔に見えた。

倒れている騎士団に近寄ろうと弾かれたように駆け出したが、その行く手をサリエが塞ぐ。

左眼を手で塞いだまま、じっとハニーを見つめてくる。

「ちょっと、どいてよ！早く手当てをしないと死んじゃう！」

「別に命に別状はない。ちょっと黙ってもらっただけだ」

そう言いながら、サリエは左眼が見えないように眼帯を着け直した。

戸惑うようにサリエを見つめる。

しかし彼の片眸にはもう何の色も浮かんではいなかった。

ただただ無感情で無機質な闇が広がっているばかりだ。

ざあつと二人の間を風が駆け抜けた。

舞い上がった落ち葉がはらはらと二人の間に落ちる。

その風に乗って、また遠くから恐怖の旋律を奏でる騎士達の怒号が聞こえた。

「また追手が来る。だが、折角俺が見つけた獲物だ。他に奪われるのは癪だからな」

サリエは静かにそう告げると自分の腰に下げた剣を音もなく抜いた。

光を受けて輝く剣を構え、すつと身を落とすとハニーを見据える。

(本気だ……)

その剣に胸を貫かれればどうなるか、想像に難くない。少しでも剣の間合いから逃げ出そうと一歩後ろに身を引いた。しかしすぐ後ろ、数歩先は崖である。

背に崖から吹き上げる冷たい風を感じる。

風はハニーの体の芯を凍てつかせようとハニーの体を包むぼろきを捲り上げた。

その下に剥きだしになっている白い肌は傷つき、見るも痛々しい。じゃりつと土を踏みしめ、サリエがその距離を縮めようと近づく。

「わたしを殺すのね」

その問いに答えはなかった。

サリエは悪魔を断罪するかのように無情な顔で鋭い剣を天高く振り上げた。

(今度こそ、本当に死んでしまう)

身を竦め、ついに追いついた死の影に絶望を感じた。

溢れだしそうな涙を我慢するようにぎゅっとその眼を瞑る。

(ごめんなさい……やっぱり無理かもしれない)

瞼の奥の血だらけのエル。

生気の欠片もない瞳が暗雲たる暗闇からじつと彼女を見ている。

(死に方も一緒じゃ笑えないわ。どうか、あなただけは生き延びて……。神様、もしわたしにまだ命の欠片が残っているなら、その全てを彼女に注いでください)

死を覚悟した瞳から全てを悟った清い雫が零れた。

風を凧ぐ音が聞こえた。  
「ぐっつと風を切り無情に振り下ろされる断罪の刃。」

（全て終わりだ）

その時突風が駆け抜けた。

「ダメ！」

全てを運命に任せたハニーの耳に必死なエルの声が響いた。

（ああ、エルの声が聞こえる。柔らかで優しい声……。この声に包まれたら、天国に行けるかもしれない）

悲しげな笑みを浮かべるハニーの体を柔らかで温かな感触が包んだ。

（あつ……。これが天国？）

うつすらと開いた眼が捉えたのはどこまでも澄んだ青い空だった。日の光が輝いて降り注ぎ、風が天高く舞う。

華奢な体が傾き、下から突き上げる旋風に真っ赤な髪が逆立った。青い空に赤が揺らめく。

「えっ？」

気持ちの悪い浮遊感を感じ、一気に夢見心地が覚める。

現実に戻され、彼女は自分が地面のない空中に知っていることを知った。

風に煽られる体に小さな塊がひっついていて。

「エル！」

自分の体にきつく抱きついている金髪の少年。  
光の糸のような髪が鮮やかな空に踊っている。

「なんで……」

「ハニーはぼくが守る」

ハニーを見つめるその瞳は強い使命感に満ちていた。  
覚悟を決めたその眼はけして諦めたりなどしていない。

(……まだ生を諦めるには早かったのかも)

自分にしがみつく小さな体をぎゅっと抱き締めた。

崖の下から轟々と流れる水の音がする。

音のみで全貌が知れないが、下が水ならば助かる可能性はある。

強い信念を灯した瞳が日の光を受け、金色に煌めいた。

その眼が視界の端に黒い塊を捉える。

目を見開き、じっとハニーを見つめる隻眼の異端審問官。

その手に握られた剣は振り落とす途中、虚空の中で動きを止めていた。

冷酷な顔が驚きの色を湛えて彼女を見つめている。

何か言いたげに動いた口。

だが、突風に巻き上げられた赤い髪が邪魔をして、遙か遠くのサ  
リエの姿を隠した。

後は身を切り裂く旋風に逆らって落ちていくだけ。

眼前に広がるのは剥き出しの崖と青い空。

その視界にあの男はいない。

抗いがたい衝撃に二人はお互いを守るように抱き締めあった。  
未知の領域に落ちていく彼女にとって、この小さな温もりだけが  
頼りだった。

（必ず約束を果たすわ…… 真実を取り戻す）

落ちゆき、薄れゆく意識の中、最後に見たのは眩しい太陽のよう  
に可憐な笑顔だった。

自らの運命に賽を投げた悲劇の女王。

闇に葬られた真実を取り戻す力なき女王と小さな従者。二人が落  
ちるのは天使の両手か、それとも悪魔の口か。

## 優しい詩

「自ら更に険しい道に落ちたか……。まあ、それもいい。一筋縄で  
いかない方がより楽しめる」

サリエは眼下に広がる切り立った崖を見下ろし、小さく呟いた。  
その後ろにいる赤いマントに身を包んだ騎士達は気を失ってぴく  
りとも動いていなかった。

彼は切り立った崖の上で指を銜えるとピーと指笛を鳴らした。  
瞬く間に一羽の鳥が飛んでくる。

その鳥の足に何かを書きつけた羊皮紙を巻きつけるともう一度空  
に放した。

青い空を鳥が優雅に風を切って飛んでいく。  
その方向は遥か遠くのゼル離宮。

「たった一人で歴史を変えるのか？なんの力もない、ただの女が」  
くくつと喉の奥で笑い声を上げるとサリエは漆黒のマントを翻し  
た。

「この先が見ものだな」

地面を赤く染める騎士達に構わず、漆黒の男はその場を後にした。  
空は急激に曇り出し、透き通る青空を雲が灰色に包んでいく。  
まるで悲劇の女王の運命を暗示させるような暗雲が森に迫ってい  
た。

ゆらゆら揺れる空間の中、ハニーは夢を見ていた。それは幼い頃の、他愛もない思い出……。緑の芝生の上に腰かける小さな少女が二人。エクロⅡカナンの王女とウォルセレンの王女だ。幼いころのハニーとエルだった。

「ねえ、わたしたちってよく似ていると思わない？」

そう言っただけハニーは笑った。

「手も合わせてみましょう。ほら、手の大きさも一緒ね」

嬉しそうに笑うハニー。

しかし対するエルは顔を困らせたように笑うばかり。

「まるで鏡合わせのようね」

「ええ、そうね」

「知ってる？鏡が映し出すのはもう一人の自分なのよ？」

「もう一人の自分？わたしたちは鏡合わせの同じ人間ってこと？」

「ええ。隣合わせの光と影。その姿がより眩しければ眩しいほど、鏡の向こうの自分は禍々しいの。神がその手を鏡に添えたら、その向こう側にいるのは悪魔なの。神の右手は悪魔の左手なのよ」

静かに告げられたその言葉にハニーは言葉を失った。

無邪気な顔がこわばる。

まるで自分と目の前のエルは違うと言われた気がしたのだ。

天使と悪魔。

いくら似ていても否なる存在だ。

初めて異国の姫であるエルと出会った時の思い出だった。

文化の違う自分を警戒してそのように言ったのかもしれない。

深い森の奥にあり、陰鬱とした雰囲気のエクロカナンは他国からあまりいいイメージをもたれていなかった。

そのイメージでエルは口を開いたのだろう。

その後交流を深めていき、親友となった後は二度とそんな言葉を口にしなかった。

今でもそんなエルとの初対面の会話はハニーにとってそれは衝撃だった。

「あのね、それって嫌味じゃない！確かにその時はなんて物知りなんだって感心したわよ。でも、もっと他に言いようがあるでしょうが！」

夢の中の友人に一言言ってやろうと叫んだ。

その瞬間に思い出は夢の中に霧散し、ハニーの目の前には薄暗い森が広がっていた。

「あ………れ？」

驚いたように目を見張ったハニーはガバリと身を起こすと辺りを見渡した。

目の前にあるのは深い森。

そして今の今まで寝ていたのは静かに流れる川岸の何もなし砂地  
だった。

## 優しい詩2

(わたし、崖から落ちたはず……。ずっと気を失っていたのかしら?)

どうやら意識を失ったまま川に落ち、そのまま激流に飲まれこの下流まで流されたようだ。

川の上流を見上げるも鬱蒼と茂った木々が邪魔をして先が見えない。

あの崖からここがどれほど離れているのか想像もつかなかった。

(ははっ……わたしって、すごい強運。あの崖から落ちて生きてるなんて)

その濡れた身に冷たい初冬の風が容赦なく吹きつけた。

「へっ……くしゅー！」

川の水で洗われた透き通るような赤い髪がその白い頬にへばりついている。

体の芯から寒気が走り、体の震えが止まらない。

王家に生まれ、今まで何不自由なく生きてきた身には耐えがたいほどの寒さだった。

冷えた体にべっとりとしつ付くぼろきれがハニーの体から急激に体温を奪っていく。

(エルは……あの子はどこに行ったんだろう?もしかしてもっと下流に流されたのかしら?)

裸同然のハニーは震える手で自分の肩を抱いた。  
寒さで固まった手に水が滲みてじんじんと痛い。

寒さと飢えで体力が急激に衰えていくのが自分でも分かった。  
死んだら楽になれるのかもしれない、そう暗い思いが心の端に浮  
かんでくる。

もう一步も動きたくない倦怠感が華奢な体に押し掛かった。

(しんどい。寒い。痛い。全部もうやだ！)

全て投げ出して、駄々っ子のように泣き叫びたかった。

でも立ち止まっている訳にはいかないと自分を一生懸命に弱った  
心を叱咤激励した。

(生きてるだけでもよしとしなきゃね。あのままあの男に切り殺さ  
れてたら、わたしの体には血が通ってなかったんだから)

弱弱しげに微笑み、そしてたった一人の仲間を捜そうと満身創痍  
の体を重たげに起こして立ち上がった。

(早く、捜さなきゃ。小さいあの子はきっと寒さに震えてる)

「エル……」

寒さに震える口でそう呟いた時だった。

「わお！ヴィーナスの誕生だ！」

力ない一步を踏み出したハニーに歓喜の声がかかった。  
ぎよつとしたように声のした方に顔をやる。

そこにいたのはハニーの方に跪き、天に祈るように手を組んだ若

い男だった。

年の頃は二十一、二だろうか。

サリエよりいくつか上に見える。

亜麻色の少し癖のある髪を横に靡かせ、男らしく締まった顔の男は旅人のような出で立ちだった。

そして何故だか薄緑のヘーゼルの瞳に感激の涙を浮かべ、喜びに打ち震えていた。

「川辺に立つ一糸纏わぬ乙女。男のロマンがそこに！」

「なっ！一糸も二糸も纏ってるわよ！この変態！」

男の言葉に力つとなつて叫び、そしてうら若き乙女の服装らしからぬ襪褌切れからおしげもなく出た腕や足を必死に隠して座り込んだ。

確かに寒さから身を守る為に自らの体を手で包んで立つ彼女は、貝から成熟した女性として生まれ、恥じらいのポーズを取る異教の神話の女神に見えなくもない。

しかし現実には森の小さな川の前で寒さに打ちひしがれるちっぽけな乙女だ。

（この男、どこに目をつけてんのよ！）

冷えた体に一気に血が逆流する程の恥ずかしさでハニーはこれでもかというほど真っ赤になりながら、目の前の男を睨む。

「ふざけないで！どっか行ってよ！」

「こんな所にいたのか、おれのヴィーナス！」

ハニーの睨みなどまったく気にせず、男は彼女目がけて走り出した。

焦るハニーの気持ちなどその男はまったく顧みない。

目の前のハニーを抱き締めようと男が手を伸ばした時、その頭に石礫が飛んできた。

「いて！」

「ハニーから離れる！」

小さな勇者の声が蹲る彼女に降り注いだ。

勢いよく飛んだ石礫が男の頭に命中する。

目の前で頭を押さええて蹲る男に安堵の息を漏らす。

ハニーは安心したように表情を崩して、エルの声がした方を見た。

「エル！」

「ハニー！」

深い森の中から駆けてきたエルの顔には濡れた金髪がぺたっとひっついていてる。

青白くなつた愛らしい顔を険しくしたエルはハニーを守るため、男の前に立ちはだかる。

そして礫の当たった頭を擦る男を睨んだ。

「ぼくのハニーに手を出すな！」

「何だ？このガキ」

男は腹立たしげに顔を歪めた。

「あんたの方が何なのよ！いきなり抱きつこうとするなんて最低よ！」

自分を守ろうとする小さな体を抱き締め、きつと男を睨んだ。  
触れあった部分だけじんわり温かく心地よい。  
それだけで心が休まる気持ちだった。

鋭い視線を双方から受けた男は言葉に詰まり、気まり悪げに眉を寄せた。

「や……その、あまりに理想なシチュエーションだったから……っ  
い」

口の中でもごもご何か言い訳めいたことを呟く。

「ついじゃないわよ、ついじゃ！」

「おれだってショックだよ！近くで見たらなんて貧相な体……」

「誰が貧相ですって！」

ため息を吐く男にハニーは激昂したように声を荒げたが、叫び続ける体力もなく、すぐにげえげえと息を吐いた。

「大丈夫？ハニー」

真っ青な顔のハニーを気遣うようにエルがその顔を覗き込んだ。

「なんだ？病気か？」

エルの言葉に男は不思議そうに首を傾げたが、すぐに何かに思いついたようにその目を見開く。

「金色の瞳に、血のような髪……もしかして……ブラッディー・レモリー？」

### 優しい詩3

「それで、まだ女王は見つからないのですか？」

余裕のない、焦燥に駆られた顔で大司教は目の前に控えるエクロ  
「カナンの騎士を見つめた。」

ゼル離宮の一室、大司教用に用意されたそこには豪華な調度が数  
多く置かれ、大司教のこの国での信頼がうかがえた。

部屋の真ん中にある大ぶりの椅子に腰掛けたマールトに、その  
前に膝を折った騎士が恭しく言葉を続ける。

「森で女王を見つけた異端審問官の話では、アンダルシアの騎士団  
を打ち破り、何処かへ逃走したとのことですよ」

「アンダルシアの騎士団を打ち破った？」

「はっ、何でも女王の眼力に騎士達は体を竦ませ、見る間にばたば  
たと倒れていったそうです。やはり女王は悪魔憑きなのですね。邪  
眼で人を射殺することができるなんて」

蒼白な顔で口を震わす騎士にマールトは何も言わず、顔を背け  
て唇を噛んだ。

（邪眼持ちなどただの噂だ。金色の王冠がなければ、あれはただの  
ちっぽけな女。あれに騎士達を撃退する力などあるはずはない……）

いつもの人当りのいい顔は消え失せ、本来の意地の悪い素顔が表  
に表れている。

しかし、女王の悪評に目を曇らせている騎士にはそんなマールト

トがとても尊い存在に見えていた。

(なんとしてでもあの女を見つけ、そして殺さなければ……生きてこの地から出す訳にいかない)

マールートはその歪んだ素顔を何とか心の内に納めると、いつも通りの聖人の顔を浮かべた。

「早く捕まえてこの城に連れてきなさい。他国の騎士に捕まったとなれば、この国の威厳に関わる。国民の為、この国の為にも早急に、そして秘密裏に女王を始末せねばなりません。これは王子の仰せです。あなたにも分かりますね？」

「仰せのままに」

騎士は大きく頷くと素早くその場を立ち去った。

ゆっくりと閉まった扉に背を向け、残されたマールートは忌々しげに指を噛む。

こんな予定ではなかった。

大司教に靡かない頭の固い女王を廃し、扱いやすい弟王子をその王座に据えるのが彼の目的であった。

きっかけはまことしやかに流れたあの噂。

「エクロ＝カナンの女王は、聖域が極秘に探しているアレを手に入れた」

その噂は聖域にいる高位の司教たちの間で広まり、そして皆虎視眈々とこの国を狙っていたのだ。

そう、この機会を逃してはならない。

聖域の欲しがるアレというのが、マールートには皆目検討もつか

なかったが、どうせ聖遺物や福音書などのたくいである。ならば、皆の関心が高まっている今を逃す手はない。その為にもしれない噂を流し、また弟王子を唆した。全て彼の思惑通りにいっていただけははずだった。なのに……どこで歯車が狂ったのだろう。あの審判の場で女王は死ぬはずだった。しかし彼女は生き延び、そして彼を苦しめる。

「俺の計画に狂いはない。あの女には何も語らせない」

ぎりりつと歯を噛みしめた大司教は強張った顔に無理やり笑みを浮かべ笑った。

「大丈夫だ。俺にはとっておきの秘術があるじゃないか」

椅子の側にある小さなテーブルの上の古ぼけた本を手を取った。マールトはその本をばらばらと捲る。

そこには滲んだインクで邪悪な気を醸しだす丸い紋様がいくつも描かれていた。

「これがあればいつでも俺の思いのまま」

ふふつと顔を歪めた笑みを浮かべるマールトはすでに聖人の仮面を脱ぎ棄てていた。

薄暗い部屋で揺れる蝋燭の明かりがその影を壁に映し出した。怪しく蠢く黒い影はまるで悪魔のようだった。

「おれはラファイ。アンダルシア出身の吟遊詩人。旅をしながら歌を歌って生活してる」

その男はそう言って、手にしたリユートを見せるとにかりと笑った。

自称詩人の男はハニーが血に濡れた女王だと知っても怯えたりはしなかった。

そればかりか寒さに震える二人の為に火を焚き、ハニーの肩の傷に薬を付け、あまつさえ自分の着ていたマントまで差し出してくれた。

深いことには拘らない質らしい。

少し軽薄そうに見えるが、根の優しい気のいい男だった。

川岸に火を焚いた彼は自分の荷物と連れていた馬を側に置き、聞きもしない内からべらべらと自分のことを語り出した。

自分はアンダルシアの西部の出身で、音楽家の家に生まれたものの、アンダルシアとウォルセレンの南の国境付近にある国フィゼランで有名な詩人に学んだなど、ラファイの話は留まるところを知らなかった。

二人は永遠に続くラファイの語りをポカンとしながら、相槌も打たずに聞いていた。

その話も一区切りついたのか、パチパチと音をたて爆ぜる焚き火に小枝を足しながらラファイは好奇心を隠さずに水に濡れた女王に目を向けた。

真っ赤に燃え上がる炎が囲む三人の顔を赤く染める。

「それで？何で女王様がこんなところにいるんだ？女王はゼル離宮に幽閉されてるんだろ？」

ラファイの貸してくれた毛のマントにエルと一緒に包まったハニーは火に手を当てながら、その表情をぶすりとさせた。

「いろいろあんのよ、こっちにも」

彼の好意のお陰で暖を取ることができる。

感謝してもしきれないのだが、自分のことを貧相な体と言ったら  
フィを簡単に許すことができなかった。

(よりによって、わたしが一番気にしてることを……)

殺気立った据わった眼で睨まれ、調子のラフィはその睨みを別の  
意味で捉えたのか怯えるように身を引いた。

「そんな睨むなよ、おれは君のことを騎士に売ったりしないから」

「どうだか」

ふんと鼻を鳴らし、そっぽを向いたハニーにラフィはやれやれと  
頭を掻いて肩を竦ませた。

#### 優しい詩4

自分でも可愛げのない顔をしていると思う。

しかし、天の邪鬼な彼女は心で思っけていてもそう簡単に態度を改め、感謝の言葉を口にはできなかった。

「ありがとうございます。ラフィのお陰でハニーに温かい思いをさせてあげれてよかった。ぼくだけじゃどうしようもなかったから」

ハニーと違いエルは素直な感謝の意をラフィに述べた。

その純真で真っ直ぐな瞳にラフィも心なしか頬を染めている。

「いい子だな。我がままな女王のお伴で大変だったろ？」

「そんなことない。ハニーはぼくの全てだから」

そう言つてエルは天上の笑みを浮かべた。

あまりの神々しさに自分の態度との差を見せつけられ、自分の方が幼い子どものように気がしてくる。

ラフィはエルの金髪をわしゃわしゃかき混ぜるように撫でると呆れた眼差しをハニーに向けた。

「主人とは大違いだな」

「放っておいて！」

顔を真っ赤にさせた彼女を見てラフィは大きな笑い声を上げた。

「ははっ、これが噂の女王か。ただの可愛い女の子じゃないか！こ

れが悪魔崇拝者だって？じゃあ、この少年がその悪魔？」

「エルはただの子どもよ！森の神殿でたまたま出会ったの。記憶喪失だから何も覚えてないの。だから、彼の本当の名前を捜してあげる約束なの！悪魔だなんて呼ばないで！」

「冗談めかしてからかうラフィに噛みつくようにハニーは叫ぶとエルを抱き締めた。

ついでに、ラフィに向かっていくと歯を剥いて見せる。

「そう怒るなよ。君たち二人を見てると、ここまで道なりに聞いてきた噂が全部嘘にしか思えなくなってきたな。おれには君が夜な夜なサバトを開く魔女には見えない。悪魔を呼ぶなんてまだろっこしいことは苦手そうだし、自分でやらなきゃ気がすまないって顔してる」

「う……」

意外にラフィは人を見る目があるのかもしれない。

『思ったことをすぐ顔に出す癖、改めた方がいいぞ』

頭に嫌味たらしいサリエの声が聞こえた。

（うるさい！黙りなさいよ！）

『ま、今更だがな』

（あんたは、その歪んだ性格をなんとかしなさい！）

姿の見えない敵と心の中で嫌味の応酬を続けるハニーに構わず、ラフィは自分の荷物の中から小瓶と小さな袋を取り出した。

「積もる話になりそうだ。どうだ？酒でも飲んで話そう。食べ物もつまみ程度ならある」

ずっと飲まず食わずだったハニーにとってこれほどありがたい申し出はなかった。

それに答えるように彼女の腹が大きな音でぐうと快諾の声を上げた。

ラフィがにやにやと笑う。

「まあ、くれるならありがたく貰うけどね」

恥ずかしさに真っ赤になったハニーは精一杯の礼を述べた。

「そもそもね、うわさ自体が全部……うそなの。じよおうを王座から引き下ろしたいやからが勝手に言いふらしている根も葉もないものなの。うわさって形でじよおうにおめいを着せ、国を追おうとしているのよ！これは立派なむほんよ！むほん！分かる？」

酒に酔って顔を真っ赤にしたハニーは大きな声で叫んだ。

疲れの為か少しの量でも一気にその体を駆け巡り、酒は彼女を飲み込んだ。

曇った空の下、薄暗い森はさらにその闇を深くする。

あの神殿を離れてどれだけの間が経っただろうか。

酒に酔ったハニーの側でエルが気持ちよさそうに寝息を立てていた。

ハニーを必死に守ろうとしている小さな騎士も大分疲れが溜まっ

ていたのだろう。

焚き火の番をしながら、ラフィはわめき散らすハニーを宥めるようにはいはいと相槌を打った。

「だいたいね、悪魔崇拜とか、ありきたりなの！そう思わない？」

「はいはい、思う思う。……はは、この女王様は大トラだな」

「なんか言った？」

ひつくとしゃっくりをし、酒で据わった眼で睨みつけてくるハニーにラフィは困ったように肩を竦めた。

「はは……大トラとは言えないな。もっと暴れ出しそう。……えっと、偉いなって言ったんだよ」

「えらい？」

ラフィの言葉を聞き咎め、ハニー眉を寄せた。

ラフィはさらに取り付くろうように、眼を泳がせ続ける。

「そう。一人でも頑張って国を守ろうとして偉いな〜って言ったんだ。何か、お気に触りましたか？女王様」

ふざけたような調子で言うラフィの言葉にハニーは食い入るようにラフィを見つめた。

「もっかい言って」

「え？」

「えらいつて、もっかい言つてよ！」

戸惑うように聞き返したラフィの服の袖を掴むと酒で潤んだ眼をラフィの向けた。

その顔は崇高な女王でも、国民を思う国主のものでもなかった。ただの小さな乙女だ。

ラフィはヘーゼルの瞳を優しく和ませるとその大きな手で八二一の頭を撫でた。

「偉いよ。女王様は本当に偉い。どんな噂にも負けずに、どんなにボロボロになつても諦めないんだ。それはとても偉いことだ。噂を信じて、君を廃そうと考へてる家臣が信じられない。こんなに真っ直ぐな女王を信じられないなんてこの国の国民は馬鹿だな」

頭に乗せられた手はどこまでも温かかった。

触れあつた場所から優しさが心に沁み込んでくる。

「本当に、本当にそう思う？」

沁み込んだ優しさが眼から溢れだしてくるのが分かった。

## 優しい詩5

何故だろう。

ハニーは溢れる感情をとめることができなかった。

涙で段々とラファイが霞んできた。

でもそれでも構わずにラファイに金に輝く瞳を向ける。

ラファイは酔ったハニーに呆れる訳でもなく、嫌な顔一つせずに丁寧に優しい声で答えた。

「本当に、そう思うよ」

それはハニーがずっと聞きたかった言葉だった。

不意に与えられたその言葉に思わず堰を切ったように泣き出した。年がいもなく、まるで赤ん坊のような泣き方だった。

大きな声を上げ、金の双眸からは涙が止めどなく溢れた。

ひつくとしゃくりあげながら泣き続ける。

ラファイはそれを慰めるでもなく、優しく頭を撫でながら見守っていた。

その声に驚いたように目を覚ましたエルはその心を分かち合うようにハニーの体を抱き締めた。

「大丈夫だよ、ハニー」

柔らかいエルの声に益々涙が止まらない。

(あつたかい)

無実の罪を着せられ、城を追われた悲劇の女王はこの時初めて心

からの休息を得た。

血に濡れた魔女と蔑まれる中、どれだけ懸命に足掻いてもその言葉に身が染まっていくように感じた。

（ずっと言っただけじゃなかった。間違いじゃないよって）

ラフィの言葉はストーンとハニーの心に落ち、全てを打ち払ってくれた。

薄暗い森にいつまでちっぽけな乙女の泣き声が響いた。

焚き火の温かな炎に涙が煌めく。

涙は女王の心を解し、女王が自らの心にかけて魔法すら解こうとした。

「わたし……生きててよかった」

それは女王ではない、ただの乙女の心からの言葉だった。

\*

暗い室内で蠢く影をウヴァルは部屋の外からそっと見ていた。

目の前の男はもはや人当りのいい笑みを浮かべるかつての面影を有していなかった。

本性を曝け出したマールトにウヴァルは言葉なく佇んだ。

（彼は俺を裏切った……）

ウヴァルは強張った顔をそのままにふらりとその場を立ち去った。暗い影から逃げるように狭い廊下を足早に進む。

マールトは全てを消そうとしているのだ。

自分に優しくかった彼の心内を知ったウヴァルは今さらながらその事実には衝撃を受け、壁に寄り掛かった。

(だが、そんな訳にはいかない。彼の思い通りになどさせない)

「ウヴァル様」

その背に遠慮がちに声が掛った。

気だるげにそちらに顔を向けるとそこには長身の侍従がいつも通り、卒のない態度で控えていた。

「アスター……どうやら大司教は俺を裏切るつもりだようだ」

「はい……」

「大司教の心が分かるか？」

不安と猜疑心に染まった瞳で救いを求めるように自らの侍従を見つめる。

「ええ、手に取るように分かります。富や地位……それは誰もが欲しがるものです。彼は自らのその欲に忠実な人間なのです」

「お前も欲しいか？」

「いいえ」

美しい金髪を揺らし、物静かな侍従は真摯な眼で主人を見つめた。

「私の望みはあなたの望み。それ以外ありません」

「では今一度、俺に力を貸してくれ。姉さんを助けたいんだ」

必死に姉のことを思うウヴァルは国や国民を考える国主の顔を忘れ、子どものように侍従に縋った。

それを手で宥めると侍従は自らの主人の前に膝を折り、崇高な儀式をするかのように恭しくウヴァルの手を取った。

「仰せのままに。私の主人はあなた様だけです」

表情の消えた顔でウヴァルは鷹揚と頷いた。

その顔には並々ならぬ決意が表れている。

「それでいい。お前は俺を裏切るな。何があっても」

「地獄までお供します」

## 優しい詩6

先の見えないほどの闇が深い森に落ちた。

月の国と呼ばれるこの国の夜空には、月はおるか星さえも輝いていない。

暗雲が闇と共に広がり、人々の心を不安にさせる。

この闇に紛れるようにハニーは城に戻ろうと決めた。

ラフィの話では目指すゼル離宮はここから目と鼻の先であるという。

「なんでゼル離宮なんだ？もつと遠くに身を隠した方がいいんじゃないか？」

「そういう訳にいかないの」

不思議そうにもつともな意見を述べたラフィに対し、ハニーは決意に溢れた眼で答えた。

ゼル離宮には彼女を守って死の淵を彷徨っている友人がいる。

その顔を一目見なければ、そしてその場でこのいかれた悲劇に幕を引かねばならないのだ。

「まっ、何か思うところがあるならそれ以上は聞かないけどね」

そう言ってラフィはハニーとエルに馬に乗るよう促した。

その彼をハニーは信じられないとばかりに見つめた。

「なんで？わたしについてきたらあなたまで疑われるわよ？」

「でも、全部嘘なんだろう？」

「ええ、その通りよ。でも……わたしの言葉を信じてくれる人がいるかは……」

あの隻眼の異端審問官も言っていた。

真実が歴史に残るのではない。勝った者の言葉が真実になるのだと。

「君についていけば歴史的な大事件のその瞬間に立ち会える」

「そんな簡単に言うけどね、これは危険と隣合わせなのよ！」

ハニーの心配を余所にラフィは呑気に火の始末をし出した。

「歴史に名を刻むチャンスじゃないか！」

「もう、何があっても知らないからね！」

ラフィの気取らない優しさが嬉しく泣き尽くした眼がまた潤んでくる。

あれほど泣き叫んでも涙は枯れないらしい。

ハニーは涙の滲んだ瞳を悟られまいとぷいっとそっぽを向いた。

その背をラフィはにやにやしながら見つめる。

「ありがとう。ラフィ」

顔を真っ赤にして必死に対面を保とうとするハニーの横で、エルは感激の瞳でラフィを見つめる。

「エルは素直でいいね。どうやったら女王様も素直になるのか」

からかう口調でハニーを見つめ、ラフィはエルの頭を撫でた。  
凶星すぎて返す言葉もない。

ハニーは自分の天の邪鬼加減に落ち込んだ。

「ところでラフィ」

「なんだ？困ったことなら何でもお兄さんに言いなさい。お兄さんは女王様よりうんっと優しいぞ！」

(くっ……。言わせておけば……)

あははっ と調子に乗るラフィにハニーは背を向けて唇を噛むしかできなかった。

そんな彼女の気持ちなどお構いなし、ラフィはエルの頭をポンポンと叩く。

エルは大きな瞳をくりくりさせ、愛らしい笑みをラフィに向けた。

「本当？じゃあ今すぐに着てるものを脱いでくれる？このままじゃハニーが寒そうでしょう！」

「はい？」

「ね？ラフィ、お願い」

愛らしい青の瞳をうるうるさせ、エルは上目使いにラフィを見つめた。

天使の頬笑みをまともに向けられ、同じ男であるはずのラフィの頬が真っ赤になる。

「も、もちろんだ」

その突飛ようしもない申し出にラフィは上ずった声で答えた。真摯な瞳が彼にイエスとしか言わせてくれなかったのだらう。

「やった！よかったね、ハニー！」

エルは小さく飛び上がると屈託のない笑みをハニーに向けた。

「う、うん、そうね」

ラフィ同様にエルの魔性の笑みに顔を真っ赤にさせ、もごもごと呟いた。

(こんな子だったかしら?)

「ははっ……ちゃっかりしたナイト様だな、おい」

ラフィは呆れたように自分の上着を脱ぎながら、ポカンとしているハニーの方に眼をやった。

「この主人にこの従者あり……か。中々いいコンビじゃないか」

「うん……。本当にありがとう」

差し出された上着を受け取り、ハニーは素直に礼を述べた。

## 優しい詩7

馬に乗った二人とその馬を引くラフィは森の彼方遠くに姿を現した荘厳なゼル離宮を目指し、川岸を進んだ。

あそこから逃げ出したのはつい昨日のこと。

しかし幾日も逃げ通しだったように感じる。

森の木々の隙間から重たげな城の屋根が見えた。

夜で明かりも少ない為か、とても禍々しいものに見え、そこに戻るのを躊躇してしまう。

(ダメよ！心を強く持たなきゃ！大丈夫、血に濡れた女王なんて本当はいないと信じてくれる人がいるんだから！)

馬上で大きく頷き、忍び寄る後ろ暗い心を打ち払うように前に座っているエルを抱き締めた。

「大丈夫だよ、ハニー」

幼い瞳がハニーを元気づけようと強く輝いた。

「ありがとう」

二人のやり取りをラフィは黙って聞いている。

「いやね〜二人して暗い顔しないでよ！こんな時ほど明るくいきな  
きゃ！」

自分の暗さに二人まで巻き込んでしまったと感じ、ハニーは無理やり笑顔を浮かべた。

そして思いついたようにラフィに話しかける。

「ねえ、アンダルシア人は噂好きなんでしょ？ 隻眼の異端審問官の噂って聞いたことある？」

「隻眼の異端審問官？ ああ、邪眼のサリエのことが」

さも当たり前のようにラフィは答えた。

「やっぱり有名なの？」

「有名っていえば有名かな？ 悪魔の瞳を持つ異端審問官がいてその瞳で睨まれたら不幸になるとか、即死するとか。他にも色々言われてたような……」

呑気に答えるラフィにハニーは上ずった声で矢継ぎ早に聞く。

「ねえ、それって本当なの？」

「邪眼のサリエに睨まれ、誰かが死んだなんてことは今まで一回しかないって聞いたよ」

「一回だけ？ その一回って？ どうやって？」

「何？ やたら聞いてくるね。女王様はサリエがお気に入りなのか？」

にやりとからかうような笑みを向けられ、女王はかっとなって詩人を睨んだ。

「そんな訳ないでしょ！ あの男はわたしを殺そうとしたのよ！」

無然とした表情で顔を背ける。

「へえ？悪魔の瞳でかい？」

「違うわ。……剣で殺そうとしたの……」

（そういえばなんで彼はわたしに悪魔の瞳を見せなかったんだろう？強靱な騎士達を一発で気絶させる力があるのに……）

冷たい瞳で自分を見つめたあの漆黒の異端審問官の姿を思い出した。

凍てつくほどに冷酷で、恐ろしいほど美しい姿の男。

神を信じないと言った異端の異端審問官は出会った時から何度も思わせぶりなことを言い、ハニーの心を試そうとした。

（彼は本当に何者なのかしら？どっちにしても彼ほどの強力な敵はいないでしょうね）

剣を振り上げたあの禍々しい姿を思い出し、背筋に寒気を走る。

「おっ、ゼル離宮が見える」

一人で陰鬱と考え込む彼女に構わず、ラファイが明るい声を上げた。弾かれるように顔を上げる。

森の隙間からゼル離宮がその全貌を現していた。

夜闇に翼を広げた鷲のような堅牢な石造りの城は来る者を全て拒むかのようにその地にずんっと沈み込むように立っている。

ゼル離宮は正面部分のみ城壁に囲まれている。

後ろはゴモリの森が鬱蒼と茂っており、守る必要を感じなかった

のだろう。

森と城との境のように細い川が城のすぐ側を流れていた。

各国の聖十字騎士団が陣を張っているのだろうか。

城壁の前には幾重にも張られた白い布が広がっており、所々に松明の火が見える。

(たった一日離れただけなのに……まったく知らない場所みたい)

ごくりと唾を飲み、覚悟を決めたハニーは気持ちを鎮めようと静かに息を吐いた。

(この先が本当の受難の道だわ。でももう引き返せない……)

震えるハニーの手をエルの手がぎゅっと握る。

馬の手綱を持つラフィが眼下で力強い笑みを浮かべている。

「ハニー、大丈夫？」

「そんな気負うなって、おれらがついてるじゃないか」

短い旅の中で得た仲間が彼女の心に温かな息吹を吹きかけた。

そつと眼を閉じてみる。

自分一人の決意は小さな蠟燭の火のようだった。

でも今は違う。

その胸に輝くのは松明のような炎にまで成長した勇気だった。

(この火はけして消えない)

ハニーは静かに眼を開くと顔を上げ、目指すゼル離宮を仰ぎ見た。そしてポツリと呟く。

「ねえ、もう少し、わたしの我がままに付き合ってくれない？」

悲劇の女王の逃走劇は終焉を迎えようとしていた。

一人で逃げていたはずの女王の両脇にはいつの間にか二人の仲間がいた。

けして交わることのなかった三人の道を結びつけたのはただの偶然だったのだろうか。

女王が押し開けたその扉の先に続くのは天国への階段か、それとも地獄への落とし穴か。

## 見えない敵

「で……忍び込んだ訳だが、これから先どうするんだ？」

薄暗いゼル離宮の半地下になつて居る廊下を忍び足で歩くハニーにラファイが声を潜めた。

声かくぐもつたように狭い廊下に反響し、石の床を弾く足音がやけに高く響いた。

三人は川岸から城に近付き、半地下になつた部分の壊れた窓から侵入したのだ。

女王らしからぬ帰還方法であるが騎士団が陣を張る正面から堂々と入るなどできない。

そして、内側はさしたる警備もされていないのではとハニーは踏んでいた。

あくまでも騎士団の目的は森に逃げたハニーの確保だ。

勝手知つたる我が城とばかりにずんずんと暗い先を進む。

その後ろを見慣れない光景に目をパチパチさせながらエルが続き、一番体大きいラファイが一番おどおどしながら最後尾についた。

「城に帰るのは分かったが、これはちよつと無謀じゃないか？お兄さん、これはいただけじゃないな」

「しっ！静かに。いいから黙ってついてきなさいよ。奴らだつて追つている女王がこんな所から侵入してくるなんて思つてないはず。だから大丈夫よ」

「その自信はどっから来るんだ？そして、どこに向かつてるんだ、

君は」

手探りで闇を進むハニーが信じられないとばかりに呆れかえってラファイがぼやいた。

ハニーが上ではなく、下へ向かって進んでいることが気になったらしい。

地下に降りるにつれ、石は湿り、黴臭い臭いが鼻腔にひつつく。

「この離宮の地下牢にね、侍女のキャメルが捕らわれている筈なの。わたしが捕らえられても彼女はずっとわたしをかばっていた。その彼女が無事にいるはずはない」

薄暗く狭い石の廊下を進みながら、先頭に立った女王は顔を顰めた。

「……殺されたりはしていないと思う。きっとわたしが見つかった暁には彼女も魔女として糾弾されるのだろうし……彼女を捕らえておくのなら、ここ以外考えられない」

「おいおい。じゃあ今は君の想像だけで進んでるのか。……なるほどね。で、助けだすのに何かいい作戦があるんだろうな？」

「作戦？そんなのないわ。ただ進んで捜すのみよ！」

ふんと鼻息荒くするハニーにラファイはげつと顔を歪めた。

「おれ、やっぱり帰ろうかな？どれだけ行き当たりばったりなんだよ」

「ラファイは文句が多いわ！エルを見なさい。こんなちっちゃいのに、

ずっと何も言わずにわたしについてきてくれたのよ！」

「それは君がエルに何も聞かなかったからじゃ……。エル、嫌な時は嫌と言った方がいいぞ。あと、女のわがままは聞きすぎてもダメだ。男が上手に手綱を引かないと尻にひかれる」

「尻にひかれる？」

聞こえよがしに声を潜め、ラフィはエルに人生の先輩として男の歩み方を指南した。

しかしエルは不思議そうに首を傾げて、純粋な瞳をラフィに向けるばかりである。

「エルに変なことを教えないで！」

物々しい城の警備とは裏腹に、侵入者たちにはその自覚が足りなかった。

明かりはなく、どこからか僅かに漏れる光だけが頼りだった。手探りで地下牢への階段を下りる。

「……女王様とは思えない行動力だな。そう言えば君は城の地下でサバトを開いてたんだっけ？だから暗闇に慣れてんの？」

「開いてないわよ！あれは嘘だつて言ったでしょ。本当はね、王城の地下で伝染病の研究をしていたの。一人感染すると一気に広まる謎の病よ。村を焼いたつて噂は……。本当よ。知らせを受けた時にはすでに手遅れ。村人達はその伝染病で死に絶えていたの。伝染病は何が原因か分からないからね、火で焼き払うのが一番だつて……」

不意に言葉を切つてハニーは悔しげに唇を噛んだ。

突如現れる湿疹と高熱。

王都やその他の中心都市では見られないが、地方の寒村では音もなく忍び寄るその病に耐えられず、呪いだ、悪魔だと騒ぎだし、その原因を血に濡れた女王だと思いこんだ。

外からの情報あまり入ってこない小さな村では仕方ないことだ。そうやって女王を恨むことで少しでも不安を解消しようとしたのだろう。

「そうやって姿が見えない恐怖に名前をつけて、彼らは不安を打ち消そうとしたんでしょうね。何か原因があるからこの病が流行るんだって」

「なるほどね、……秘密裏に原因を特定し、治療法を探していたって訳か」

「伝染病の原因が分からない状態で表だって発表すれば、国民はパニックを起こしかねない。だから……」

だから血に濡れた女王という噂を放っておいた。

姿なき恐怖に国民がダメにならないように、恨むなら自分を恨んだらいいと考えたのだ。

「悪魔って名前をつけて、人々は安心したんだね」

悲しげな声でエルが言った。

その言葉に成程とラフィが顎をしゃくり、前を歩くハニーを眼を細めて見やった。

彼にとってただの我がままな女の子でしかなかった彼女が国民の為にあえて血の道を歩む心優しき女王に見えた。

## 見えない敵2

ハニーは悔しげに唇を噛んだ。

この国の優しい女王が国民の為を思っていた行動が全て裏目に出てしまったのだ。

善意の協力者である侍女や家臣たちは女王と同じく悪魔崇拝者として捕えられてしまった。

「だからわたしはその真実を全て国民に話す。この国に降りかかっている火の粉に気付かず、形のない悪魔に怯えているなんておかしい！」

「そうだね。悪魔なんてこの世にはいないもの」

怒りに燃える瞳で暗闇を睨み、熱い決意に拳を握るハニーにエルが独り言のように呟いた。

「え？エル、なんて言ったの？」

「……姫様？」

彼女の問いに答えるように暗闇の向こうで小さな声がした。

闇から弱い光が漏れてきたかのような驚きだった。

自分を問う高い声にハニーは弾かれ、駆けた。

狭い廊下は上から浸み出してくる地下水でぬるりとしており、気を抜くと足を取られる。

しかしそんなこと構ってられないとハニーは赤い髪を闇に靡かせ、その声の主を捜した。

「キヤメル！」

「姫様！」

闇の中でその存在を誇示するように、その声は狭い石の廊下にごだまし、広がった。

暗い廊下を曲がった先にうつすらとした明かりが灯っている。

その灯の側に鉄格子があり、冷たく陰湿な石の牢を塞いでいた。その中にいるのは大きな青い瞳を潤ませた女王の侍女だった。

少しふつくらした愛嬌のある顔は真っ青になっている。

着ている侍女の灰色の服は薄汚れ、ここに捕えられてからろくな食事も与えられていないことが見て取れた。

冷たい石の床に座り込んだキヤメルは信じられないばかりに目を開き、突如現れた三人を驚きの表情で迎えた。

「キヤメル！」

「よくぞ御無事で……」

キヤメルは神に祈るように手を組み、突然現れた八二一に感激の涙を流した。

鉄格子越しに二人は手を取り合う。

「ごめんね、わたしのせいで……」

「いいえ、姫様が御無事で本当によかった……。あの朝共に馬車に乗れなかった我が身をどれほど悔いたことでしょう。なんとという奇跡……またお会いできるなんて……」

しばし二人は言葉なく、再会の喜びを分かち合った。

しかしこのままではいけないとハニーは涙でくしゃくしゃになった顔を拭き、懸命に女王らしい顔を浮かべる。

「キヤメル、あなたはここから逃げて。そして、真実を外の世界に伝えるのよ」

「しかし、私は捕らわれております」

ハニの提案にキヤメルは戸惑ったように顔を寄せた。逃げようにも彼女の前には重い鉄格子がされている。

「大丈夫、わたしには仲間が出来たのよ！ラフィ！さあ、鉄格子を破って！」

「え？おれ？」

感激の再会にもらい泣きをしていたラフィが驚いたように自分を指さした。

ただの吟遊詩人の自分にハニーはそんなことを期待していたのかと眼を剥く。

「出来るか！」

「役立たず！」

「ねえ、ハニー。鍵が落ちてたよ？」

そんな二人の間に入り、愛らしく微笑んだエルがこの場で一番冷静だった。

「でかしたわ！さすがエル！」

エルから鍵を受け取ったハニーはその鉄格子の鍵穴にそれを差し込む。

錆ついた鍵が鍵穴と擦れ合って、嫌な悲鳴を上げた。

「……こんな暗闇でどうやって鍵を？」

ラファイが不思議そうに顎に手をやり、側でにこにここと笑っているエルを見下ろした。

何の変哲もないただの子どもだ。

しかしこの場においてこの少年の存在が一番不自然であるような気がした。

「よかった。ハニーの役にたてて嬉しい」

屈託なくエルは微笑んだ。

### 見えない敵3

「あのね、キヤメル。あなたはこれからわたしの書簡を持ってウォルセレンに向かいなさい。そして全てを伝えてほしいの！」

石の牢から解放されたキヤメルは少しやつれた、力ない顔をハニーに向けて困惑した。

「しかし……」

「大丈夫、あなた一人では行かせない。ここにいるラフィとエルがお供よ。彼らと一緒にいればいい隠れ蓑になるわ。ウォルセレンの王都マリーレザーまで馬に乗れば一日半ほどで着く。それまでわたしは何とか持ちこたえるから。だからお願い」

「しかし、ウォルセレンに向かうなら、姫様の方が……。それにこれ以上姫様を危険な目に合わせる訳にいきません！」

「いいえ！わたしが森を抜けるのでは目立ちすぎる。こんな赤い髪、他にはそうないでしょう。今、この髪こそがブラッディ・レモリーの代名詞だわ。それに……。これはわたしにしかできない。約束したの。エルと……。必ずこの国を、そしてエルを救うと！」

真剣な顔でハニーはキヤメルの手を取った。

キヤメルの瞳は逡巡したように揺らめき、返答に詰まっている。

二人のやり取りに口を挟んだのはエルだった。

「ぼくはハニーと一緒にいる！」

縋るようにハニーを見つめ、聞き分けのない子どものようにいやと首を振った。

初めて見せたエルの子どものらしい顔にハニーは戸惑ったようにエルを見つめた。

しかしすぐに口をへの字に結ぶと毅然とした態度でエルをきつく睨む。

「ダメ！エルはキャメルと一緒にここを出るの！我がまま言っちゃダメよ！あなたがここにいっても危ないばかり。わたしはあなたを危険に晒したくない」

そう言い切るとハニーは言葉を切った。

切なげに眉を寄せ、エルを抱き締める。

大きな瞳を潤ませ、真剣に自分を見つめるエルに今までどれほど救われてきたか。

だからこそ、この少年をこの危険な場に置く訳にいかない。

「エル、あなたはわたしの希望なの。あなたがキャメルについて行ってくれるなら、これほど心強いことはないわ。これはあなたにしかできない使命なの。わたしのお願い、聞いてくれるでしょ？」

じつと自分を見つめるエルに視線を合わせて、困ったようにハニーは微笑んだ。

「お願い？」

「そう。わたしの願いよ。……そんな泣きそうな顔しないで。約束しましょう。わたしはここで真実を取り戻す。そしてこの国に平和が戻ったら、一緒にあなたの両親を捜しにいきましょう。ね、これなら文句なしでしょ？」

「両親なんて……」

エルは悲しげな顔を歪め、ハニーから顔を背けるように俯いた。

エルの髪を優しく撫で、ハニーは何かを思いついたとばかりに薄い衣の下に隠れていたネックレスを取り出した。

丸と十字を合わせたような不思議なデザインのネックレスである。金で出来たそれには細かな紅玉が幾つも嵌め込まれていた。それをそつとエルの首に掛ける。

「約束の印。絶対にわたしはあなたの前に帰るから。だから、それまで預かってってくれる？なくしたら承知しないわよ！」

冗談半分に語気を強くして、そして強がるように笑ってみせた。

（泣いたらエルが心配する。彼はいつだってわたしの心の傷に敏感だから）

「じゃあ、ぼくも」

まだ納得のいかないという顔を浮かべながらもエルは自分の服の下から同じようにネックレスを取り出した。

細い紐の先にあるペンダントトップは円を描く細い三日月だった。その中に小さな星が浮ぶようにあしらわれている。多分銀細工であろうそれは古ぼけ、くすんで見えた。

「ハニー、あなたが危険な時は何時だって駆けつけるから。いつでもぼくの名前を呼んで。あなたはぼくの全てだ」

そのネックレスを祈るようにぎゅっと握りしめ、エルは恭しくハニーの首に結びつけた。

「ありがとう、エル。あなたに出会って本当によかった」

それが最後の会話であるかのようにハニーは眼を潤ませる。つと流れたその瞳にエルがそっと口を添えた。

「ぼくもあなたに会えてよかった。……ハニー、君が今のぼくの全て」

ハニーの顔をそっと顔を離れた澄んだ瞳は何か言いたげな表情のまま、悲しげな笑みを浮かべていた。

「じゃあ、ラフィ。二人をお願いね！」

黙って事態を見つめていたラフィにハニーは強い眼差しを向けた。

「女王様はどうするんだ？」

「わたしは……とりあえずエルのところを目指すわ！そして、彼女を取り巻く全てを打ち払ってくる！だから、わたしが城の中で大暴れしている間に、ね！お願いよ！外から世界を変えてちょうだい！」

期待してるわよっとラフィの広い背を力任せにばしばしと叩くとハニーは三人に外に出るように促した。

「さあ、わたしたちでこの陳腐な劇を終わらせましょう。この国にはもっと愉快で明るい物語が待っているんだもの」



## 見えない敵4

先ほど自分が侵入した半地下の窓から三人を送り出すとハニーは上を目指して駆けだした。

目指すはまず、弟王子ウヴァルの下である。

死の淵にいるエルも気になるが、先に彼とはどうしても直接会って話したいことがある。

ハニーはキャメルの着ていた服に袖を通していた。

少しでも城の中で目立たないようにとのキャメルの配慮で服装を交換したのだが、赤い髪も金の瞳も灰色の侍女服では隠しきれない。

（早く終わらせなきゃ。全て終われば、全部元に戻る。歪んだ真実も、わたしたちの運命も）

ねえ、そうでしょ、とハニーはエルに語りかけた。

被っていた女王の仮面が剥がれそうになる。

それを懸命に自らの顔に張りつけると、凜とした強気の瞳を輝かせた。

地下から地上へと一気に駆け上り、先に見えた蝋燭の火が灯る長い廊下にほつと息を吐いた。

しかし彼女はその廊下に広がる陰鬱とした雰囲気に息を飲んだ。

もともと明るい城ではない。

石造りの冷やかなところだった。

それでも廊下に敷かれた温かな絨毯や壁に掛けられたタペストリーに人の息吹を感じる城であった。

その場所が陰鬱として空気が澱んでいるように感じる。

あの深き森の奥にある神殿よりもここは禍々しい。

ハニーは変わり果てた城の雰囲気にも身の毛がよだつ思いだった。

(たった二日で……何が変わったの?)

不安に揺れる華奢な体を両手で包み、俯いた。

長い髪がはらりと落ちる。

その視線の先に細い三日月のネックレスが見えた。

『いつでもぼくの名前を呼んで』

真剣な眼差しでそう言ってくれたエルの顔が浮かんだ。

(そうね、エル。わたしは一人じゃないもんね)

小さな微笑みが側にいなくても彼女を導いてくれているように感じた。

大きく息をつき、きつと口を結ぶ。

これ以上弱気な心を外には出さないとハニーは決めた。

城の中は外ほど警備が厳重ではなかった。

時折聞こえる警備の兵の声にビクリと身を竦ませ、その度に物陰に隠れてやり過ごした。

落ち着いた赤い絨毯が敷かれたそこをハニーは懸命に駆けた。

所々に置かれている燭台の灯りが彼女を導くように長い廊下をぼんやりと浮かび上がらせている。

(まだ外の三人に気付いていないみたいね)

ほっと息を吐いた。

もしキヤメルたち一行が見つかるようなことがあれば自ら騒ぎを起こすつもりだった。

ハニーが大々的に捕らわれたら、しがない一行よりこちらに眼が向くというものだ。

（暴れさえしなければ仮にも一国の主を殺そうなんてしないはず。前だって嚴重な警備で聖域に連れて行くこととしていた。今回もわたしをまた聖域まで送ろうとするかしら？その時はきつとあの嘆きの塔には入れてくれないだろうな）

ゴクリと唾を飲み込み、つつつと額を流れる冷や汗を拭った。

（それよりも、今はウヴァルに会わなければ）

ぐつと顎を引き、決意に満ちた眼で前を見据える。

そのまま角を曲がろうとした時だった。

その先に数人の騎士が屯しているのが見え、ハニーは身を隠すように体を引っ込めた。

（はあ、心臓に悪いわ……くそ〜！そこを通らないとウヴァルの部屋に行けないのに……）

壁へへばりついて、息を整えるように胸を撫で下ろしたハニーは逡巡したように眉を寄せた。

（それとも、彼らを脅してウヴァルの部屋まで案内させようかな？血に濡れた女王の呪いと言って……。きつと正攻法じゃ無理だわ）

このまま隠れながら進むのにも限界がある。

逃げるところを取り押さえられるよりもこちらの方が手段はどう

であれ、先に続ける可能性がある気がする。

（いちか、ばちか……）

思いついたら即行動とばかりに頷き、ハニーは意を決して角を曲がろうとした。

そのハニーの背後にはずっと怪しい影がついて来ていた。

気配も音もないそれはハニーが騎士達の前に飛び出す瞬間にハニーにその手を広げた。

## 見えない敵5

ハニーが自分の背後にそれを感じた時、その影は彼女の体を羽交い絞めにし、息一つ漏らす暇を与えずに闇の中に引きづり込んだ。

(なっ……)

塞がれた口から言葉にならない驚きが零れる。

視界が勢いよく廻り、自分がどういう状態にあるのかも分からない。

影はハニーを近くにある部屋の中に力ずくで引きこむと静かにその扉を閉めた。

その力強さに従うしかなく、然したる抵抗も出来ずに自分の体を包む束縛に身を固くする。

どっどつと激しい音を立てて心臓の音が胸の内でも暴れている。

体中にその音が響き、熱い胸の内に反して体は凍りついたように冷たく固まった。

「なっ……」

背には黒い影が密着している。

彼女の口を塞ぐ影の髪が強張ったハニーの顔にかかった。

慣れた手つきで拘束されており、抵抗しようにもびくともしない。掴まれた手に鈍い痛みが走る。

「暴れるな。そして騒ぐな」

混乱するハニーの耳元で聞き心地のよいテノールの声が出た。

その声に弾かれるようにハニー身を振る。

「むう〜！」

何故ここにこの男がいるのか。

そんな疑問の前に条件反射のように文句を言ってやるつと渾身の力を込めて手足をばたつかせた。

思いも寄らない力の抵抗だったのだろう。

影はじろいだようにその手を一瞬緩め、しかしぎゅっとハニーの体を自分の方へ抱き寄せ、柔らかい声で彼女の耳元で凄んだ。

「ははっ。勘のいい女は嫌いじゃない。だがこれ以上に騒ぐのは止めた方がいい。俺の手は二つしかない。暴れるお前を押さえつけたら、必然的に俺の口でお前の口を塞ぐことになるが、それでもいいんだな？」

「！」

その脅しにハニーは驚いたように身を固まらせた。

そして必死に顔を横に振る。

(なっ、口で口を塞ぐって……それはキスって言うのよ！冗談じゃない！いくら顔がよくても性格の悪い男はごめんだわ！)

抵抗をやめたハニーに後ろの影はやつと話を聞いたかと呆れたように呟き、拘束を外した。

「何で！あんたがここにいるのよ！」

体が解放された瞬間、ハニーは振り返り、自分の後ろに立つ男をねめつけた。

自分の眼と鼻の先にあるのは氷の美貌。

無造作に掻きあげられた髪が隠された左の眼帯の上に幾筋もの線となつて落ちてゐる。

闇と溶け込むような黒いマントに、うつすらと浮かび上がる赤い花十字。

そう、忘れもしないこの男　　隻眼の異端審問官サリエ。

サリエは揺らぎない闇色の瞳でハニーを見下ろしていた。

「それはこつちの科白だ。何故お前が城にいる？」

「そんなのわたしの勝手でしょ？」

「声を荒げるな！お前を追っているのは俺だけじゃない。自国の兵だからと不用意に近付けばお前など瞬殺だぞ」

つつけんどんに顔を背けたハニーにサリエは呆れかえつたように顔を歪めた。

彼の整つた顔をここまで歪ますことができるのは自分だけではないだろうか。

このような状況であるにも関わらず、ハニーはふとそんな気がした。

他国の騎士と一緒にいた時も彼らには然したる表情の変化を見せなかった。

ただ麗しくその口角を上げるだけだ。

(こいつ、本当に何者だろう……)

じつと目の前の男を睨みながら、表情の読めない男の意図を探る。

(敵じゃ……ないの?)

「勘違いするなよ？俺はあくまで異端審問官。死の天使だ」

ハニーの表情からその意図を読むとふっと意地の悪い笑みを零した。

ハニーを絶望に追い込むような声で鷹揚と告げる。

「じゃあ離して！あんたよりエクロ＝カナンに捕まる方がよっぽどマシよ！」

かっとなったように叫んだハニーは側にいる漆黒の男を押しつけるように手で払った。

その手をサリエが掴み、自分の方に引き寄せる。

抱き締めるように自分の胸でハニーを受け止めるとサリエは闇に消えそうなほど小さな声で囁いた。

こんなにも冷たい男なのに、触れた部分は温かく、ハニーは驚きと羞恥に頬を染めた。

「な！なにを……」

「馬鹿な女王様だな。もう少し自分の立場を弁えて話せ。ここで騒げばお前の立場が悪くなるだけだ」

「ほっておいてって言うてるでしょ！お節介なのよ、いちいち！」

「ほう。ではお節介ついでにもう一つ。エクロ＝カナンの兵は皆、王族ではなく大司教の命を受けて動いているそうだぞ？」

大司教！

サリエの言葉に、ハニーの目は大きく見開かれた。そして嫌悪するかのように険しくなる。

その表情を楽しむように眺めながら、サリエは強張ったハニーの耳元でせせら笑う。

「お前が女王面してあいつらに話しかけても痛い目にあうだけ。そうでなくとも何の武器もなしに敵の前に出て行くなんて愚の骨頂。馬鹿も休み休みにしてくれるか？」

何もかもを知っているような口ぶりである。

そのサリエの態度が、馬鹿にされからかわれているこの状況が、ハニーは腹立たしくてならなかった。

「うるさ〜い！」

ハニーは顔を真っ赤にしながら、動揺を隠すように声を荒げた。どうすればこの嫌味な男に一矢報いることができるのだろ。

彼女に出来たのは感情のままに形振り構わずに手を振り回すことだけだった。

「ちよ、待って！馬鹿！」

窮鼠猫を噛む抵抗にサリエは怯んだように一歩その身を引いた。

ため息交じりにハニーの攻撃をうまく捌き、その手を封じようと手を伸ばした。

それでも捕まるものかと、ハニーの手は彼の拘束に最後の抵抗を試みようとして振り上げられた。

その時。。

## 見えない敵 6

「あっ」

その一瞬の出来事にハニーはぴたりと動きを止めた。息を飲み、ただ見つめるしかできない。

ハニーを拘束する為に両手を使っていたサリエには止める間のない出来事だった。

振り上げた手が当たり、サリエの眼帯がバランスを崩すかのように解けた。

黒い蓋が二人の間にゆっくりと落ちる。

音もなく落ちた眼帯。

そしてその下に隠された悪魔の眼が顕わになる。

「真っ赤……」

ハニーは驚いたように息を飲んだ。

ただ目の前にあるそれを言葉なく見つめた。

黒い右の瞳に反して左は燃えさかる炎のように煌々とした赤をしている。

闇の中にあつてくすむことなく、むしろそれ自体が輝いているのではと思えるほどだ。

(これが悪魔の瞳……)

呆然とその瞳に見惚れるハニーを押しつけ、サリエは彼女に背を向けた。

「よかったな。……悪魔の瞳を見て立っていられるのは真の勇者だ

「つたか？」

そう固い声で呟いたサリエは何故だか悲しい背をしていた。  
冷たい孤独に震えているような背だった。

(彼はこの眼に苦しんでいるんだ)

彼女が血に濡れた女王と蔑まれてきたように、彼もまたその色の  
違う双眸を見下されてきたのだろう。

ハニーは胸の内をついて湧き上がる悲しみにも似た困惑にただた  
だ呆然とその背を見詰めるしかできなかった。

悪魔の瞳の正体は、哀れな運命を背負った男の素顔。

一人で背負うにはあまりにも重い業。

彼は生まれた時からその瞳に翻弄されてきたのだ。

何故自分が彼の瞳を見ても、無事に立っていられるのか、ハニー  
には皆目検討もつかなかった。

前に彼がその瞳を晒した時、大の大人達が震え上がって失神して  
しまったのに。

前回と今回、何かが違うのだろうか。

それでもハニーの心に恐怖はなかった。

次の瞬間には泡を吹いて倒れてしまいかもしれない。

ドクンドクンと心臓が跳ねる。

けれどこの鼓動の高鳴りは危険に対する警鐘ではなく、同じ痛み  
を受けた者同士にしか分からない心の共鳴なのだとハニーは確信し  
ていた。

そつとその孤独な背に手を伸ばしてみる。

長い間に受けた傷が彼の心を凍てつかせたのだろうか。

「何だ？」

手で瞳を隠したまま、サリエは凍てつく声で問う。

「どうやら、その瞳には悪魔はいないようね？」

この国に元から悪魔がいないように、彼の瞳にも悪魔など始めからいないのかもしれない。

彼がああの上で神など信じないと言った訳が分かった気がする。いくら祈っても状況を変えてくれない神など神ではない。むしろ始めから神などいないと思っていたほうが楽である。

神の右手が悪魔の左手であるように、対なる存在のどちらかを否定すれば、もう片方も消えるのだ。

少し悲しげな笑みを浮かべて、ハニーは冷めた顔の男を見つめる。

「いいえ、始めから悪魔なんてどこにも存在しないのよ」

そう、悪魔はもう千年以上も昔に地獄へと封印されている。

聖域の公式な見解もそうだ。

悪魔などこの世にはいない。

悪魔という名で自分達の見えない恐怖に名前を付けたら、自分の欲の捌け口にその名を使っているにすぎないのだ。

（見たこともない悪魔に怖がったり、あまつさえ縋ろうなんて間違ってる）

強い意志に溢れた金の瞳が力強く輝いた。

少しでも目の前の男の心に届けばいい、そう願わずにはいられなかった。

「悪魔はいる」

押し殺したようにサリエが答えた。

「え？」

「悪魔はいる。いろんな姿で、いろんな場所にいる。形なく広がり、闇に染まった心に浸透する」

悪魔の瞳を隠さず、サリエはハニーの方にまっすぐ向き直った。闇のような右眼と炎のような左眼が静かにハニーを見下ろしていた。

そこには冷たさも熱さもなく、ただどこまでも深い空虚が広がっている。

吸い込まれるように色の違うその瞳を見つめる。

一度言葉を切ると、サリエはその真摯な瞳で彼女に向けた。

「悪魔とは人の心に存在する。本などに書かれた黒い姿の異形の者はただのまやかしに過ぎない。魔法陣で召喚できるのは自らの欲に忠実なもう一人の自分だけだ」

強い意志が宿った瞳に思えた。

「ただのまやかし……」

「そう、人の心が生み出した闇だ。その形なき悪魔が異端」

そう宣言した男の瞳には何の迷いもなかった。

ゆつたりと片手を上げると、ハニーの首に回す。

長くしなやかな指がハニーのか細い首を掴んだ。

呆然と、ハニーはただされるがままにその手を見詰めた。

「何を……」

「言っただろ？俺は異端審問官。どんな姿をとっていようと悪を討つのが仕事だ」

さも当たり前のように告げられても、ハニーは恐怖すら感じなかった。

現実を受け入れられずにただただ眼を見張ってサリエを見つめる。

「どうした？抵抗しないのか？」

どこまでも麗しく、そして意地の悪い笑みをサリエは浮かべた。

彼は、その心の内に極上の悪意を孕ませている時ほど優美に微笑む。

その表情に彼の心を覗いたような気がして、ハニーは身を硬くした。

（本気なの……？）

ただ言い知れない失望がハニーを包んだ。

サリエは何も答えずにゆっくりと握んだ指に力を入れる。

呼吸が徐々に苦しくなっていく。

（抵抗しなきゃ……）

頭はそう思うのに、行動が伴わない。

彼も悪意の中で戦っているのだと、勝手にシンパシーを感じていたから。

それを裏切られた衝撃に、常の気の強さが湧き上がってこなかった。

強い輝きを忘れない金の瞳に涙が浮かんだ。  
その時だった。

## 見えない敵7

「ダメ！」

「ふんぎゃ〜！」

真摯な子どももの高い声と野太い猫の声が二人の間に割って入った。驚いたように身を引いたサリエの顔に大柄な猫が飛びかかる。

いきなりのことにハニーはぽかんと口を開け、目の前で繰り広げられている奇妙な光景を見つめた。

あの冷酷な異端審問間が、猫と戯れている……。

それは一種異様な光景で、笑いさえも沸いてこないほど衝撃だった。

驚きサリエを見つめるハニーの手を小さな手が引いた。

おっとりした眼を懸命につり上げ、小さな王子がハニーを逃がそうと駆けだした。

「キアス！」

「こつちに逃げて！」

二人は部屋の外へと駆けだした。

暗い室内にぽっかり浮かんだような出口が見える。

ハニーはあの神殿でエルに手を引かれながら駆けつけた時を思い出した。

いきなり現れたキアスに驚きながら、それでもその手が導く方に駆けだした。

部屋の中で蠢く影のような漆黒の男を見返したが、彼はまだ追っ

てくる気配がない。

ばたんばたんとは大騒ぎしながら部屋を出て、長い廊下を駆けだした二人に廊下の端にいた騎士達が驚いたように手にした槍を向けてくる。

「ちよつと、キアス！これは目立ちすぎだから！」

キアスの先導はエルの時と違っていて危なげない。」

すぐにでも後ろにいる騎士たちに追いつかれそうだ。

しかし使命に燃えたキアスはいつになく必死にハニーの手を引いて走った。

「ぼくだって、おねえちゃまを助けるんだ！」

\*\*\*

猫を撃退し、サリエがその顔を向けた時、ハニーはすでに部屋の外だった。

「くっ……」

腹立たしげに喉を鳴らし、ゆっくりと身を起こす。

面倒くさそうに頭を振るとハニーを追おうと部屋を後にした。

部屋の外の廊下は大混乱をきしていた。

いきなり現れた血に濡れた女王が末の王子と共に廊下を駆けているのだ。

それが自分たちの追っていた人物なら尚のこと。

廊下にいた騎士達が弾かれたように手にした武器を掲げ、その背を追っている。

部屋の扉の枠に手をつき、サリエは眉を寄せた。

遠くでハニーの叫ぶ声と騎士たちの怒号が聞こえる。

「最悪だな……」

「またまた」。分かってて逃がしたくせに」

ため息交じりに呟いた独り言に返答があつた。

「だってあの勇敢な王子様が部屋に入って来たの知ってたんでしょ？知っていたからあえて女王様の喉に手を掛けた。憎い演出だね！」

部屋の外の壁にもたれ、にやにやとサリエを見つめる謎の人物に彼は忌々しげに眉を寄せた。

「黙れ」

「わあ、怖い！さすが邪眼のサリエだ」

ふざけるように手を広げたその者の顔に躊躇なくサリエは拳を叩きつけた。

「君、これはちょっとひどいだろ？」

強か打ちつけられた顔を撫でながら、謎の人物は無表情のサリエを睨んだ。

その姿に一瞥もくねずにサリエは漆黒のマントを翻し、背を向けた。

「異端を狩る。俺の仕事はそれ以上でも以下でもない」

そう静かに答えた男の左眼は血で染まったかのように真っ赤に燃

えていた。

## 見えない敵 8

「キアス！しっかり走って！」

そう叫びながら駆けるハニーはキアスの手を引いて懸命に走っていた。

その背を幾人もの兵が追いかけてくる。

「ちょっと、自分とこの主人でしょ？武器持って追いかけるなんて最低！」

悲鳴交じりに叫ぶ彼女の背に騎士達の怒号が飛んだ。

「王子を離せ！血に濡れた女王を捕えろ！」

「ふざけんじやないわよ！よってたかった同じことばかり言ってる！」

腹立たしさにくうつと喉を鳴らしながら、手を繋いだキアスを引きづるようにして隠れる場所を探した。

先ほどの勢いを失い、キアスはげいぜい息を切らしている。

今まで全てに傳かれて、大切に育てられてきたのだ。

狼に噛まれようが、崖から落ちようがそれでも走り続けるハニーとはバイタリティーが違う。

「あ、あそこの……」

はあはあ息を切らしながらキアスが廊下の先を指さした。

「なるほどね！」

彼女は余裕のない顔で小さく笑うと足に渾身の力を込めた。膝が笑って中々力が入らないが、だからと言って止まってはられない。

ハニーは素早く廊下を横切り、すぐ側のタペストリーの裏に隠れた。

タペストリーの裏は空洞になっているのだ。子ども頃よくエルやウヴァルとここで隠れん坊をして遊んだものだ。

普段城の中に入ってくることに驚き、騎士達がこの空洞を知っているとは思えない。

もしいきなり姿が消えたことに驚き、タペストリーの裏を調べようとしても裏の空洞からタペストリーを止めると簡単に外れない構造になっている。

そこでハニーはあはあと荒れる息を治めながら、走り去る騎士達の声を聞いていた。

（はは…ずっとあの陰険な異端審問官に追われてたから、これぐらいの騎士に追われたぐらいじゃ怖くもなんともないわ）

暗闇の空洞の中でハニーは自嘲気味に笑った。

その側でキアスが苦しそうに息をついている。

「大丈夫？キアス」

「だ、だいじょうぶ……ぼくもおねえちやまを守るって決めたから」

「そう、勇敢な子ね」

ハニーは優しくその頭を撫でた。

（ほんと、エルと同じぐらいなのに、育ちが違うところも違ってるのね）

寂しげに苦笑したハニーはキアスの息が治まるのを待って問いかけた。

「ねえ、キアス、ウヴァルはどこ？」

「おにいちゃまは……たぶん奥の広間かな？ぼくが入りたいって言っても入れてくれないんだよ。それなのにおにいちゃまはずるい」

奥の広間、それは血に濡れた女王を裁くために設けられた偽りの審判の間だった。

白い大理石で全てを包まれたその場所は窓が一つもない、奇妙な広間である。

「何で、そんなところに？」

「分かんない。でもさっき、大司教と一緒にそこに行ったよ？」

仲間外れにされたのが気に入らないのか、キアスは愛らしい頬をむっとさせた。

キアスの気のない返事にハニーは驚いたようにその肩を揺さぶった。

「大司教ですって！」

「う、うん」

キアスは強張った顔で自分を見つめるハニーにびっくりしたようにその眼を見開いた。

弾かれたように立ち上がり、外へ出ようとしたハニーの服の裾をキアスが引いた。

戸惑ったようにキアスを見下ろしたハニーはその真摯な瞳に言葉を失った。

「あのね、ぼく。おねえちゃまのいない間、ちゃんと皆に優しくしたの」

「そう、えらかったわね」

ハニーは泣きそうになるのを懸命に堪えて、その無垢なキアスの頭を撫でた。

(この子は何も知らない。でも知らなくていい。目が覚めたら怖い夢を忘れるように、この国の暗い影は誰にも知られることなく消えるべきなのよ。痛々しい真実は……わたしの胸の中だけに)

「でもね、お城の皆、暗いんだ。まるでね、悪魔がお城に住んでるみたい……」

不安そうに呟くキアスをぎゅっと抱き締めるとハニーはその仮面を外し、素の顔で笑った。

「悪魔なんていないわ！皆、ちょっと怖い夢を見ているだけ。大丈夫よ。わたしがそれを払ってくる。だからキアスはそれまでもっと皆に優しくすること！全て終わればおねえちゃまはちゃんと戻ってくるから！」

「本当？」

キアスは眼を輝かせてハニー見つめた。

「本当よ！わたしが嘘ついたことある？」

「ない！」

無邪気に喜ぶキアスを置いて、ハニーは空洞を抜け出した。

目指すは奥の広間。

決戦の時は近付いているのだ。

顔を引き締め、金に輝く双眸を険しくした。

自分を深き森に追い込んだその黒幕を討つためにここまで道なき道を駆けてきたのだ。

もう何物にも彼女は止められない。

長い廊下を抜けた先、重厚な木の扉が彼女を迎えるように立っている。

はあはあと息を荒らしながら、ハニーは全ての元凶を作り出した審判の場の重い扉を開いた。

ぎいっと軋む悲鳴を上げて、ハニーを導くように重たい扉が奥へと開く。

暗い広間からどこよりも澱んだ空気が流れてきた。

鼻をつく腐臭に思わず顔を背ける。

鼻腔に絡み付く錆びた鉄のような臭いに吐き気が込み上げてきたが、彼女は堪えるように広間に厳しい眼を向けた。

その金色の眼が驚愕と恐怖に見開かれた。

「何で？」

信じられない光景だった。

愕然とし、広間の入口に立ち竦む。

白かったはずの床にはどす黒い血のようなもので歪な円が大きく描かれていた。

その紋様の上に置かれた蠟燭の火がゆらゆら揺らめいて、その広間の全貌を見せる。

部屋の端で打ち捨てられたように転がっている白衣の男。

かつてこの国の大司教と呼ばれた者はただの肉の塊となり、物のようにそこに存在していた。

その男の血でこの紋様が描かれたと想像に難くなかった。

「お帰り、血に濡れた女王。君を待っていたんだ」

鷹揚と告げたのはいつも愁いを帯びた顔をしていたウヴァルだった。

一瞬躊躇してしまうほどにその顔は変わり果て、凍てついたように強張っている。

その顔が揺らめいた蠟燭の影を受けて妖しく微笑んだ。

広間の奥、たった一つ置かれた長椅子に悠然と腰かけたまま、黒幕は彼女を見据えた。

その側にはいつも控えている侍従が卒のない態度で眼を伏せて立っていた。

「なんで？」

ただ、そう言うのが精一杯だった。

「なんで？決まってるじゃないか。全部、姉さんのためさ」

艶やかに微笑んだ彼は不思議そうに首を傾げた。

そして愛おしそうに澱んだ青の瞳を歪な円の中心に向ける。

視線の先にいたのは純白のドレスに身を包んだ儂いまでに繊細な顔だちの女性。

どす黒い血の上に寝かされてもなお失われない美貌は時を止めたかのように固い。

血の気の引いた肌に月のように煌めく白銀の髪がかかっている。

か細い手を胸の上で組んで寝かされているその美しい人にハニーは息を飲んだ。

顔から血の気が引いていく。

それは、何度も何度も名前を呼び続けた人。

かつて月の女王と謳われたこの国の女王だった。

「エル！」

つき上げる衝撃のまま、ハニーは慟哭の声を上げた。

その瞬間、二人を分った運命がひとつになった。

血に濡れた女王はその役目を終えた。

今、この惨劇の場に立ち竦むのはただのいたいけな乙女であった。

親友を守るため、そして自分の愛する国を守るために、自らの胸に刃を刺して血の海に伏した女王。

そしてその女王の失われた真実を取り戻す為にあえて血に濡れた女王を演じたウォルセレンの女王。

二人の交錯した運命がまた混じり合い、そして物語は終焉に向かう。

固い絆で結ばれた二人の乙女を待ち受けているのは、果たして天

使か、悪魔か

。

## 悪魔の正体

「ねえ、ハニー。あなただけでも信じてくれるなら、私は悪魔になっても構わないのよ」

城下を見下ろせる小高い丘の上に立った二人に穏やかな風が吹き抜けた。

数年前、初めて二人が出会った丘だ。

すぐ側にはどっしりと構えるゼル離宮が建っている。

見惚れるほどに美しい銀髪をなびかせ、自らの治める地を眺めた女王は揺るぎない信念の籠った瞳を真つ赤な髪の本二一に向けて。

青々とした芝生と相まって、光を受け輝く淡い赤髪は凜と咲き誇る薔薇の花のように美しかった。

「この国はね、皆が病気にかかっているの。目には見えない、心の病気にね。忍び寄る恐怖に名前をつけなきゃ、皆怖くてどうしようもないの。それは悪魔の所為だって、血に濡れた女王の所為だってそう思うことで不安は少し解消されるみたい。それで皆の心が不安に苛まれることがないなら、私は血に濡れた女王で構わない」

そう言って微笑んだエルは透き通る程に美しく、見つめる本二一はしばし言葉を失った。

「ふふつ。おかしいでしょ？でも、私はこう呼ばれるの嫌じゃないの」

「な、何言ってるの、エル」

戸惑うように友人の肩に手を置いた本二一の右手をそっと取ると

エルは自分の左手に重ねた。

「私達は姿形も髪や眼の色も、生まれた国も習慣も違う。性格だって正反対。なのに、こんなにも似ているのはやっぱり鏡に映った者同士だからだわ。あなたは天使、私はその鏡に映った悪魔。私がどれだけ汚くなっても、対するあなたがその分輝いていてくれるから私は満足なのよ」

心からそう信じているとばかりに屈託なく微笑むエルがハニーは気に入らなかった。

（そんな悲しい自己満足いらないのよ。友情に天使も悪魔もないわよ！）

ハニーは金に輝く瞳をきつとつり上げ、穏やかに自分を見つめるエルの右手を自分の左手でがしつと掴んだ。

そのまま右手同様に合わせる。

「ふん！こうすればどっちが悪魔で、どっちが天使か分からなくなつたわね」

そして合わせた両手を組むように握った。

エルは大きく眼を開き、大きな眼を意地悪く和ませた友人を見つめた。

「エルは悲観的なものよ！わたし、そういうの好きじゃない。国民の不安を晴らす方法はもっと他にあるはずだわ。流行する病の原因を探るとか、国民にもっと気分が明るくなるような行事を提案するとか！」

青みを帯びた月色の瞳が揺れる。

大きな影に怯える、女王の本当の姿がそこにあった。

手を握ったまま、エルは眼を伏せた。

その顔をハニーはぎっと睨みつける。

「……ハニーは本当に強い。私はこの大きな闇が怖い。止めることもできず、ただ不安の捌け口として噂の矢面に立つだけ……。それ以上、何の解決法も考えようとしなかった。私も心のどこかで、姿なき闇に悪魔がいると思っていたかったんだわ。」

両親亡き後、必死に小国を盛りたて、並みいる列強の国々と渡り合っていた。

それでもそのか細い手ではこの国全ては包めない。

そつと忍び寄る悪意が蔓延していつても止める術を知らない女王はその身を切ることでなんとか国を保ってきた。

十四で王となった少女の、それが精一杯だった。

悪意に満ちた噂が高潔な女王の心を徐々に蝕み始めた。

気が付くと自分が本当の悪魔なのではないかと思うまでに。

人の心を蝕むその心こそが悪魔なのだと思ひ知らされた。

しかし……。

エルは視線を上げる。

そこには何物にも染まらない、強き心を持った眩しい天使がいた。

ハニーは初めて会った時から悪魔崇拝者のような陰険な者の国と

思われているエクロ「カナンの自分を何ら変わりない友人として笑顔で手を差し伸べた。

顔で手を差し伸べた。

そして、どんな噂にも動じずと変わらずいてくれる。

エルはそれが嬉しくて仕方なかった。

彼女は何時だって自分のために憤り、泣き、そして笑ってくれる。

その強気に満ちた金の瞳がエルの中の闇を全て払うかのように煌

めいた。

「そんなに自分を責めないで！あなたには皆がついてる。一人で抱え込んだら何の解決にもならないわ！大丈夫、わたしが絶対にあなただの汚名を晴らしてあげるわ。それで、この穏やかな国の国民に知らしめてやる！血に濡れた女王なんていないって。いるのは国民思いで、弟好きで、そして何よりわたしが大好きな、ちょっと風変わりな女王だけだっ！」

金の瞳が燦々と光を放つ陽光を浴び青い空に輝いている。

この真っ直ぐな瞳を見ていると何故だか自分にも何かができそうな気がしてくる。

「あなたが悪魔になりそうな時は私が止める。反対にわたしが悪魔になりそうな時はあなたが止めてね」

ハニーは握る手に力を入れた。

自分には想像もつかない大きな敵と戦う友人をどうやれば励ませるのか。

同じく力なき少女だが、それでも何かしらの役に立てればそれ以上嬉しいことはなかった。

エルは溢れる感情が目頭を熱くするのを感じた。

涙など王位に就いてから流したことがあっただろうか。

どんなに自分を思う家臣や弟の言葉も頑なに心を閉ざし、心配かけまいと心を閉ざしてきた。

その固く凍てついた心に爽やかな風を吹き込んだのはこの眩い夜明けの星だった。



## 悪魔の正体 2

大国ウォルセレンでは聖女信仰があり、王家に生まれた女性は皆『マリス・ステラ』と呼ばれて一生を精錬潔白に生きると聞いている。た。

しかしどうだろう。

今、エル目の前にいる自由奔放で、周りをも巻き込む躍動感に溢れた乙女からはそんな不自由なところは何一つ見えない。

彼女はもう一つ与えられた『ハニエル』という名のとおり、愛と美に溢れている。

かの国と同じくエクローリカナンもまたかつてこの国を創った初代女王の名を代々に継いでいた。

過去に何十人と存在する『レモリー・カナン』  
いずれ自分もその一部として埋没していく。

そう思っていたのに、この輝かしい存在は大勢いる『レモリー・カナン』から彼女をたった一人の『エル』にしてくれた。

『エル』それは神の名だという。  
巷に溢れた名だ。

それでも、ハニエルから分かれたそのエルが、彼女はたまらなく嬉しかった。

自分が『レモリー・カナン』以外で認められた気がしたのだ。

(ハニー、あなたは分からないでしょうね。あなたの一言にどれだけ私が救われたか)

自分の進む道を明るく照らしてくれるこの星のように自分にも何ができるかもしれない。

エルははらはらと流れ落ちる雫をそのままに大切な友人に微笑みかけた。

(ねえ、その金の瞳に映るものが私にも見えるかしら?)

エルの銀髪にハニーの透き通るような赤がかかった。

混じりあつた髪はまるで生まれ出る太陽のように眩い。

こつりと互いの額が触れ合う。

ゆつたりと風が吹き抜ける小高い丘で祈るように手を重ね、瞳を閉じて向かい合った二人の乙女。

「ねえ、鏡越しの存在でもこうやって触れあつた部分の温かさは本物でしょ?」

\*\*\*

それは血に濡れた惨劇がこの地で起こる数か月前の出来事だった。その後再会した二人に待っていたのはあの日の穏やかさの欠片もない、悪魔のような現実だった。

血に濡れた女王として審判にかけられることとなった女王をその場に集まつた人々は問答無用で亡き者にしようとした。

その場に集まつた彼らは悪魔や呪いなどどうでもよかった。

聖職者の仮面を被つた大司教に唆された枢機卿たちの心は闇よりもまがまがしかった。

悪魔を討つた自分に酔いたいのが為に。

聖域が喉から手が出るほどに欲しているそれを自分の手の内にいれるために。

その場に居合わせた人々の欲望が真実に蓋をした。

その場でエルが行つた行為にハニーは戦慄した。

エルを助けるつもりで、無理やりに広間に押し入つた彼女が見たのは、自分の胸に剣を突き立てたエルの姿だった。

止める間のない出来事。

「ごめんね、と消えそうな声で呟き、床に落ちるエル姿。捕われて、聖域の思い通りに殺されるのだけは阻止したかった。エルの、一国の女王としての誇りが選ばせた終焉への序章にハニ―は憎悪以外感じずにはいられなかった。」

その瞬間、ハニ―は優しい友人に代わり血に濡れた女王の道を歩むことを決めたのだ。

血に濡れた女王が死んでしまったら、歪んだ事実が真実になってしまう。

造られた真実を完結させないために、本当の真実を皆に伝えるために。

「エルはみんなが大好きだったのよ！」

天使のように無償の愛に満ちたエル。

その鏡越しの悪魔となって彼女は決死の逃走を図ったのだ。

あの日、この広間から……。

「なんで……ウヴァル、あんたが……」

ハニ―は震えるように声を絞り出した。

魔法は解け、そこにいるのは血に濡れた女王ではなく、ただの親友思いの乙女だった。

小さな口は驚愕に震え、ただただ眼の前に広がる悪夢の光景を見つめる。

その恐怖で凍りついた表情をウヴァルが楽しげに見つめた。

「ハニ―、君は昔からなんにでも首を突っ込む。そして一人で大騒ぎして、結果姉さんを困らせるんだ。いつもそう。でも、姉さんは

優しいから君のことを嫌いと思っていたても口に出して言わない。君はいつもその優しさに甘えていたんだ」

幼い頃を思い出しているのか、ウヴァルは一瞬嫌そうに眉を寄せた。

この隣国の王女が遊びに来るといつも大好きな姉を独り占めしてしまう。

彼はそれが嫌で仕方なかった。

それと同じくハニーも自分と同じような歳のウヴァルがいつも大好きな親友の背にくっついてくるのが気に入らなかった。

エルが冗談半分に二人が結婚すれば私は二人とずっと一緒にいるのに、と言った時とても魅力的な申し出に思えたが、相手がウヴァルなので丁重に断ったほどだ。

それならキアスの方がまだましだと言ってエルを苦笑させた。

優しく、穏やかな月の女王を取り合ってきた二人は今、その女王を挟んで対峙していた。

「何でエルを一番愛しているあなたがエルをここまで追い込んだのよー」

涙の溢れる金の瞳でハニーは白銀の少年を睨んだ。

### 悪魔の正体3

「姉さんは優しすぎる。何故何も知らない奴らに罵倒されなきゃならないんだ。悪魔崇拝者？その何が悪い？神は我々に何をしてくれた？神に祈りを捧げることで俺らは何を得た。答えは、このエクロ「カナンを異端のもののように蔑む視線だけ。そんな視線に晒されて、明るくなかなれない。この国が陰鬱なのはお前らのその心ない思い込みの所為だ。お前らが信仰する神の所為だ！それは許された行為ではない」

お前らの信仰する神 ……。

まるでこの国は違う神を信仰しているかのような言い方だ。

かつてこの国を支配していた邪神がまだ、この国に巢食って神の顔をしているかのような違和感をハニーは感じた。

小さく息を吐くとウヴァルは姉に切なげな眼を向けた。

「姉さんは一人で全ての悪意に立ち向かっていた。聖域の言いなりになり、他の国々との友好を結ぼうとした。でも、それは無駄な行為でしかない。どんなに姉さんが頑張っても彼らはこの国を陰鬱とした悪魔の巢食う国だと思っているんだ。そんな奴らには何を言っても無駄。……でも俺は違う。この国をもっとよくする方法を俺は知っている」

何かにとり憑かれたかのようなどんよりした瞳が狂気に輝く。

薄暗いこの広間で彼の銀がかった瞳は青白い鬼火のようだった。

「大司教はね。とても欲の深い男だ。この国の利権をもっと手に入れたがっていた。影から国を乗っ取り、ウォルセレンにでも売るつ

もりだったんじゃないかな？姉さんにうまく媚いろうと近付き、呆気なく拒絶されたこいつは俺の方にやってきた。欲に塗れたこいつの本性が分からないほど俺は馬鹿じゃない。こいつに自分が動かしていると思ひ込ませ、俺の懐におさめていった。彼は実に優秀な俺の配下だったよ」

歪に歪む口から語られる真実にハニーは眼を背けたくて堪らなかった。

「そういえば大司教が布教に入った村ではよく病に倒れる人がいるみたいだったね。誰一人助からなかった村もあつたみたいだけど」

「それ！謎の伝染病のことじゃない！まさか大司教が……」

「彼自身にはたいした力はないよ。ただ……彼は神を信仰しながら、その欲を満たす為に悪魔と契約したがってた。俺直々に教えてやったのに、残念。一度もその力を発揮することはなかった。でももしかしたら一度くらいは何かを引き寄せたのかもしれないね。そう、病魔のようなものを……」

にまりと優美に歪むウヴァルの顔にハニーは激昂しそうになった。何故、彼は人の命を軽々しく扱い、あまつさえ嘲笑に晒すのか。ここにいる弟の為を思って、エルは孤独の闇に耐えていたのではなかったのか。

何も知らない国民を救うためにあえて噂を打ち払うことなどせず、その裏で懸命に病の原因を探っていたのに、何故ウヴァルはその全てを悉く打ち払うようなことをするのだろうか。

怒りに燃える金の瞳を侮蔑するように見下げ、ウヴァルは鷹揚とその椅子の背にもたれ掛った。

「しかし初めは従順だったのに、この大司教、最近段々つけ上がってきてね、勝手に姉さんを教会に売りつけて、結果幽閉しなくてはならなくなったんだ。まあ、あの審判の場で姉さんが自殺しようとしたのはびっくりだったけどね」

ははつと乾いた笑みを浮かべる彼が信じられなかった。

「聖域に秘密裏に働きかけたのも俺さ。そつとあれの存在をちらつかせれば、すぐに目の色を変えた。今だってこんなにも早く他国に聖十字騎士団の派遣を命じた。これで聖域の動きがよく見て取れた」

もしかしたらエルはウヴァルのこの狂気を知っていたのかもしれない。

潔癖な彼は自分達を蔑む他国が許せず、そして愛する姉が薄汚い噂に晒されるのが嫌だったのだ。

愛情の裏返し、その屈折した思いにエルはどう応えてよいか分からなかったんだろう。

結果、彼女は自分が血に濡れた女王として死ぬことで弟の眼を覚まさせたかっただろう。

弟の犯した罪共々彼女は地獄に墮ちる覚悟だったのだ。

ハニーは突き上げる激情に堪え、じつとウヴァルの独白を聞いていた。

「この国にはかつて崇高な館の神がいた。名をベルゼブルと言った。エクロ＝カナンの王都はここからきている」

「何よ、いきなり。知っているわ。ユーティリティが現れる以前、邪神が国を治めていたと時のことですよ？」

「邪神だと？それは聖域が勝手に陥れただけだ。聖域がこの国の信

仰する神を悪魔にした。そう、俺らエクロカナン<sup>II</sup>の民も一緒さ。いつも君たちに奇異な眼で見られる。暗い森に囲まれた陰鬱とした国だと。君だって、そうだろ？」

「そ、そんな訳ない！」

戸惑ったように答えたハニーにウヴァルはその表情を険しくした。

「違うね、心の奥では邪神を憎むように俺らを蔑んでいる。そう、君と俺らは似て非なるものなんだ」

幼い頃、エルに言われた神の右手と悪魔の左手の話が頭を突き抜けた。

それを打ち払うようにハニーは眩い金の瞳を上に向けた。

「何が言いたいのだよ！はつきり言いなさいよ」

小馬鹿にするようにウヴァルは嘲笑した。

「あははっ。相変わらずだね。じゃあ、教えてあげる。俺はこの国を元に戻すんだ。千年前のあるべき姿に。聖域などに邪魔はさせない。ああ、残念だけど君にはその犠牲になってもらうよ？」

「どづいつこと？」

「この陳腐で騒々しい劇の終幕はこうやって語り継がれる。血に濡れた女王は実の弟によって討たれる。そして彼女は一切の災厄とともに地上から消える。そして次代の王となった俺は親友を守るために傷を負ったウォルセレンの王女を娶り、この国は平和な日々を取り戻す。そこでハッピーエンド。どう、表向きの歴史はドラマテイ

ツクなほづがいいだろっ？」

## 悪魔の正体 4

ハニーは息を飲んだ。

楽しそうにとっておきの秘密を語る目の前の男は誰だろう。

「でも死ぬのは姉さんじゃない。血に塗られた女王として死ぬのは君だよ、ハニー。君の血をもって俺は姉さんを生き返らすんだ。うるさい君には悪魔の捧げ物となってもらおう。君の大好きな姉さんの代わりに死ぬるんだ、本望だろ？」

そこにハニーの知っているウヴァルの面影もない。

(何やってんのよ……)

ハニーの白い頬に涙が伝った。

プライドが高く、頑固で、引込み事案。

いつもハニーに対抗するようにそっぽを向いてる男の子。

でも本当はとても素直ではにかむように笑う顔が董のように愛らしい。

あの彼はどこにいったのだろう。

昔から群を抜いた姉好きだったがここまで倒錯はしていなかったはずだ。

(わたしたち、エル大好き同盟で、ライバルだったはずでしょ？今までも、そしてこれからも)

清かに煌めく一滴の涙が落ちた。

次から次へと溢れる涙が止まらない。

(なんで、そんな方法しか浮かばなかったのよ)

おそらく優しい女王は心配かけまいと弟には何も言わなかったのだろう。

それが人一倍姉の痛みに敏感な弟の心に名前のない不安を作った。姉が賢明に立ち向かう闇に彼は飲みこまれてしまったのだ。

すれ違っただけだった彼らに大司教が歩み寄った。

彼の偽りの優しさが頑なな王子の心を歪ませ、この血に濡れた惨劇を生み出した。

(大丈夫って一言で十分だったはずだもの。噂なんて信じないってその言葉だけでレモリーは救われたはずだわ。それなのに……)

ハニーは目の前に広がる歪な紋様を蔑むように見つめた。

それは自らの欲を簡単に叶えてくれる悪魔との契約のサイン。

(悪魔を呼び出してエルを生き返らそうとしてるなんて)

彼の姉への愛情は誰より深く歪んでいる。

(本当は、もっと素敵な優しさだったはずなのに)

何が彼をここまで変えたんだろう。

ハニーは顔を歪ませて叫んだ。

しかしウヴァルは遠く彼方にいるのか、彼女の言葉に何を言っているのか分からないとばかりに肩を竦める。

「あなた、間違ってる！それでエルが喜ぶわけじゃない！」

「……。なんとも言えればいいさ。もう止められない。君は死ぬん

だ、ハニー」

「いいえ、わたしが止めてみせる！わたしはウォルセレンに使者を送ったの。もしわたしがエルの代わりにここで殺されても、わたしの使者の話聞いたお父様が必ず真実を明るみにする！」

ハニーはぎゅっと唇を噛んだ。

そして潤む眼で目の前に寝かされた哀れな親友を見つめた。

澱んだ広間に僅かに灯る炎がその姿を微かに照らし出す。

その青白い顔が泣きそうに見えた。

風もないのに揺れる炎に映し出され、白銀の女王の儂い影も闇に沈んだ広間に蠢いた。

まるで自分の弟の狂気を止められなかった自分を悔いているようだった。

（大丈夫よ、エル。あなたの弟はわたしが助ける。そしてあなたを陥れた闇を全て打ち払うわ！）

「今のあなたは狂ってる！神とか悪魔とか、そういう目に見えないものを引き合いに出して、後ろ暗いところを見ようとしてないだけよー！」

高々に指さし、高潔な志に燃える黄金の瞳を輝かせた。

透き通る程に美しい赤い髪が静かに揺れる。

血に濡れた女王の代名詞だった血で染まった髪と爛々と狂気に輝く金の瞳。

だがそんな陰鬱な言葉を簡単に打ち消してしまうほどにそれらは輝いていた。

そう、まるで暗い夜空に灯る明けの明星。

強い信念に燃えたハニーは愛と美を司る金星のように美しく、そ

して眩かった。

その彼女をウヴァルはせせら笑った。

「君の使者？ははっ、彼らは本当にウォルセンに着くことができるのかな？」

「どついつこと？」

衝撃の走った顔を強張らせ、ハニーはたじろぐようにウヴァルに困惑の眼を向けた。

その表情をウヴァルは楽しそうに見つめ、意味深に微笑む。

「それでしょ？君の使者」

歌うように告げられ、ハニーはウヴァルが指し示した方を向いた。広間にたった一つしかない重厚な造りの扉、深淵の闇に穿たれたように口を開く向こうには地獄への道を飾るかのような赤い絨毯の道がずっと真っ直ぐに伸びている。

その道を寡黙な騎士達に挟ませるように亜麻色の髪を靡かせた長身の男が颯爽と歩いてくる。

その後ろに黒いマントに全身を包んだ華奢な影を連れて、彼はハニーと眼が合うと悪びれもなく笑った。

「なん……で？」

城の地下で別れたはずの人物の登場に言葉もでない。

打ちのめされたように立ち尽くすハニーの側を男に引っ張られるようにマントを羽織った者が何かを訴えかけるようにして連れて行かれる。

十数人の騎士達がハニーを逃すまいと広間の端を囲んでいる。

( キャ、キャメル )

あの、薄汚れたマントは自分がキャメルに着せたものだ。

小柄な彼女は少年のエルと背丈がほとんど変わりなかった。

ハニ一の足がはみ出るマントにすっぽり身を包み、彼女はハニ一の手を取って大きく頷いた。

『 姫様、本当にありがとうございます。姫様の父上に必ず、姫様の無事を伝えますわ。だから、それまで女王様のことをお願いします 』

そう言っただけで彼らはウォルセレンに発っていったのだ。なのに……。

( なんでも……今頃この二人はウォルセレンに向かっているはず…… )

ハニ一の顔を面白そうに見つめながら、その男は自分の顎に手をやり、小首を傾げるように捻った。

「 よお、悪いな。どうせならいい方で名前を残したい 」

## 悪魔の正体 5

「ラファイ！」

感情を爆発させ、裏切った男を睨みつけた。

優しく、押しに弱い詩人はそこにはいなかった。

闇に揺らめく炎に照らされたその男はハニーの知らない顔をしていた。

歯を食いしばって暴走しそうな感情を抑えつけながら、それでもこの場にいないエルのが気になりハニーの瞳が揺れ動く。

「エルは……エル、あの子は……」

「あの子は森でお寝んねさ。だから、安心しな」

快活に彼は笑うが、もうその笑顔が信じられない。

始めから裏切るつもりで近付いたのだろうか。

目の前の詩人と遠くで冷笑を浮かべながら事態を楽しんでいる黒幕を交互に見つめた。

「始めからこういう予定だったんだ。彼が君を連れてくるって。彼は大司教の知り合いでね、もちろん俺に協力してくれた」

足元が崩れ去るような激震が足元から突き上げるように押し寄せてくる。

全ての手札を押しさえられ、彼女にはもう何も残っていなかった。

あるのは身一つ。

その身も絶望に打ちつけられている。

(これなら、始めから敵って顔してる、あのインケン男の方がましよ!……あいつ、異端を裁くのが仕事なんですよ!だったら早くここに来なさいよ!)

もう涙も出てこない。

ただただ思い通りにならない未来を恨むしかなかった。

どれだけ心の中で叫んでもあの男がこの場に来ないことは分かっている。

それでも何かに縋りたくて、祈るしかなかった。

誰でもいい。

この場から自分を助けてくれるなら。

温かい体温をなくした親友を救ってくれるなら。

そしてその友人の大切な弟の凍てついた心を溶かしてくれるなら……。

「残念だったね。ハニー」

心底同情するようなウヴァルの声がハニーを残酷に打ちつける。

祈るにはここはあまりにも暗すぎる。

窓もなく、天さえ仰げない。

暗闇に心が飲み込まれそうになる。

ハニーは祈るように手を組み、流されそうになる心を押しとどめた。

濁流の飲まれ、支えすら側にはない。

(負けちゃダメ! 悪魔は人の心にいるもの……わたしまで負けちゃダメ!)

ぎゅっと瞑った眼から何かを悟った涙がつつと流れた。

清浄な雫が歪んだ広間の床に音もなく吸い込まれた。

その時だった。

「そうだな、あまりに残念だ。この悲劇はあまりに陳腐すぎる」

闇に染まった広間にそれは朗と響いた。

まるで暗闇にあつて、どこまでも眩く輝く明星のようだった。

いきなり差し込んだ一筋の光がハニーを導くように暗闇を抜う。ばさりと布を払うような音がした。

驚いたように眼を開く。

「えっ？」

「この突き抜けるほど前向きで、崖から落としても死なないうような女を主役にしたのが間違いだ。こいつには馬鹿みたいに明るい喜劇が似合っている」

「ははっ。言ってる」

快活な笑い声を上げているラフィの側に佇むその男はばさりとマントを床に放り投げ、面倒臭そうな眼をハニーに向けた。

ラフィが連れていた黒いマントを羽織ったキャメルはいない。

そこに立っている男を見間違えるはずがない。

それは、怖いほどに美しい、赤い片眸を持つ異端の異端審問官だった。

## 悪魔の正体 6

「なんで？ここに……」

自分の前に立っている人物が信じられない。

強張る声で小さく呟いた。

目の前の漆黒の男は奇妙なものを見るように眉を寄せた。

「俺は異端審問官だ。異端思想のものを裁くのが仕事だが？」

「で、でも……歴史に残らない真実には興味ないって……」

「なんだ？お前は。真実を取り戻すってあんなに意気込んでいたのに、もう諦めたのか？」

「ちが……」

いつもの強がりかでてこない。

ハニーは言葉の出ない口を覆った。

淡々と言い放つ目の前の男が信じられない。

あんなにも自分を殺そうとしていた男がこんなにも力強く見えるなんて……。

(きっと、涙で視界が歪んでるのだわ。じゃなきゃおかしい。この男がわたしの目の前に立って、そしてわたしを助けるなんて)

「俺がお前を助けるのが信じられないって顔だな」

「何で分かるの!」

「そりゃ、お姫様の顔に何でも出てるから」

驚くハニーにラファイが苦笑しながら答えた。

その横でサリエは馬鹿にしたように頭を振っている。

「サリエは始めから君を殺す気なんてないよ。それどころか君が死なないように色々工夫してたぐらいだよ？だから今までの非礼は許してやってね！」

「ちょ……ラファイとこのインケン男は知り合いなの？それに殺すつもりがなかったって……」

衝撃の言葉の連続にハニーはうろたえるばかりだ。

この場の空気を一瞬で変えた男達はハニーが知っている全てを打ち壊す。

「あははっ。インケン男！その通りだな、サリエ！」

「煩い。黙れ、ラファイ」

おかしそうにバンバンと自分の背を叩く男にサリエはにべもない返事を返し、ぶすりとした表情を崩さずに押し黙る。

ハニーの疑問に答えるつもりなど更々ないようだ。

この凍りつきそうなほどの悪意に満ちた広間で二人の異端審問官だけが異端だった。

闇に染まることなく自分達のペースを崩さない。

そして場が白けるほどに空気を読まないのだ。

「俺らは聖域におわす教皇聖下からこの大司教を調べるために派

遣された異端審問官さ。後他にも調べるように密命を受けていたんだけどね。それはおいて置いて、調べている間に血に濡れた女王の審判騒ぎが始まって、ちよっと距離を置いて様子見をしていたんだ」

ははつと朗らかに笑うラフィにハニーは戸惑いの眼を向けた。

険しい眼が全て自分達に向けているこの敵地において、どうして彼はここまで普段通りなのだろう。

「な、なんで……」

「なんだ？崖から落ちても懲りないお転婆がやけにしおらしいじゃないか。頭でも打ったか？さっきから何も言葉になってない」

意地の悪い眼で戸惑うハニーを見つめ、サリエは馬鹿にしたように口の端を上げた。

「ば、馬鹿にして！それどころの話じゃないでしょ！」

サリエはどんな場にあってもハニーをからかう態度を改めないよ  
うだ。

彼がずっとハニーを守っていたなんて。

ラフィの言葉が未だに信じられない。

いや、もう何を信じればいいのかハニーは知る術がなかった。

さっきまで自分を攻め立てていた男が急に味方の顔をして側にいる。

本当に味方なのか、またハニーを陥れようとしているのか。

それでも今はこの存在以外、ハニーにはなかった。

口の悪い異端審問官　でも、これ以上に力強い味方はハニーは  
考え付かなかった。

「あんだね、始めから味方なら味方って言いなさいよ！それに何度も殺そうとしたじゃない！剣を振り上げて切りかかろうとしたこと忘れないわよ！」

感情のままにハニーはサリエにぶつかっていった。

さつきまでとは一変、その顔には常の負けん気の強さが溢れていた。

サリエは麗しい顔を陰険に歪め、色の違う双眸を好戦的に輝かせて形のよい唇をそつと指でなぞった。

「切りかかろうとしただけで、勝手に崖に落ちたのはそつちだろ？あのまま立ってたら剣は上手にお前を避ける予定だった」

「そんなの分かる訳ないでしょ！なんでそんな歪んだことばっかりするの！」

「はいはい、お二人さん。積もる話はまた後で……とりあえず、この劇を終焉まで見てからだ」

そう言いながらラフィは広間の奥で不機嫌そうにこちらを見ているウヴァルに眼をやった。

「まさかこの王子様が黒幕とは思わなかったがな」

「俺も、こんなあっさり裏切られるとは思ってなかったな」

裏切ったと言いながらも、鷹揚と三人を見下ろすウヴァルの表情は変わらなかった。

悠然と椅子に腰掛け、足を組みかえる。

「まあ、ゴミが二つ増えても何も変わらない」

「言ってくれるね」

ラフィは顎を触りながら、ウヴァルを仰ぎ見る。

ラフィは素早く羽織ったマントの下から太い鞭を取り出した。

それをぎゅっと伸ばすように握ると自信に溢れた笑みを零した。

「王子様相手じゃ手荒く出来ないな」

それに合わせるようにサリエも腰の剣を抜く。

闇の落ちる広間に鋭く剣が光った。

その堂々とした二人の背が頼もしく、ハニーは先ほどとは違う涙が胸について溢れて来るのを止められなかった。

自分の首にかかるネックレスを包み込むように握りしめ、涙で霞むその背を見つめた。

「本当によく泣く女だ。そういうものはここぞって時まで取っておけて言っただろ？」

どこまでも冷たい言葉だった。

でもあの崖の上で聞いた時とは違う。

つつけんどんで、不器用な優しさの滲んだ言葉に思えた。

思えば今までひどいことしか言われてきてない。

しかしその言葉に腹が立てば立つほどハニーは自分を奮い立たすことが出来たのではないかと思えてきた。

あの暗い森の中で優しい言葉をかけられたら、もしかしたらハニーの足は止まっていたかもしれない。

ハニーはいけすかない言葉しか言えない男の背中を潤んだ瞳で睨んで、慥然と答えた。

「泣いてないわ！ちよつと目にゴミが入っただけよ！」

「それはそれは。大きなゴミが入ったんだな。なんなら取ってやる  
うか？……あの闇を被えばお前は泣きやむんだろ？」

「え？」

背を向けたままそう答えた男の表情は見えない。

「俺が被ってやるって言ってるんだ。ちよつとはお姫様らしく、大  
人しくしてるんだな」

## 悪魔の正体 7

(……性格悪いのよ)

溢れた涙で前が見えない。

幾重にも光の膜が重なり、漆黒の男の背に光の翼が見えた。

(悪魔も天使も信じない、この男が天使に見えるなんて……笑つちやうわね。言ったら鼻で笑われるかしら？そんなもの存在しないって)

小さく苦笑したハニーはぎゅっと眼を擦り、広間の奥でつまらない物を見るように冷めた眼でこちらを見ているウヴァルを見つめた。胸の前で手を組んだまま、その心に語りかける。

(悪魔なんてまやかしょ。人の心に巣食う弱い心なの。気付いて、ウヴァル！)

「ハニー、悪魔はいるよ？」

「え？」

ハニーの心の声にウヴァルは動じる様子もなく答えた。その瞬間に空間が歪むほどの衝撃が走った。

「アスター、もういい。本来の姿に戻りなさい」

妖艶な笑みを浮かべるウヴァルの側でそれはかっと眼を開いた。ウヴァルの側に控えていた寡黙な侍従がウヴァルの言葉を聞くや

いなや、その姿をぐにやりと歪ませたのだ。

驚くように顔を上げたハニーの眼には信じられない光景が広がる。息を飲む暇も与えない。

一瞬見間違えかと眼を擦ったが、その黒い影は人間とは思えないほどに傾き、ゆらゆら揺らめく火影のように歪な動きでその姿を変えていく。

澀んだ広間に息苦しいほどに重い霧が立ち込める。

眼を逸らすことができない。

徐々に形を顕わにするその禍々しい生き物にハニーの心臓は激しく警鐘を鳴らした。

かつてこれほどまでの恐怖があっただろうか。

これほどまでに心をかき乱され、飲みこもうとする絶望などハニーは知らなかった。

凍りついたように体が強張り動かない。

「あっ……あっ……」

恐怖に引きつる喉から声にならない悲鳴が漏れる。

ハニーは震える体を抱きしめ、目の前にいる異様な存在を見つめた。

そこにいたのは醜悪な姿の悪魔だった。

落ち窪んだ双眸は妖しく光彩を放っている。

そのヘドロのような長い髪の間から三日月のような形の大きな角が二つ伸びていた。

細面の顔の半分は裂けたような大きな口で鮮血で染まったような赤が見える。

手には恐ろしいほどに大きい蛇を握っていた。

「紹介するね。俺が地獄から召喚したんだ。名前はアスタロト。地獄の大公爵だっ」

とっておきのおもちゃを自慢げに見せる子どものように無邪気な声だった。

重たく押し掛かる空気の中、ウヴァルだけは平気なのか、怯えるハニーを指さして嘲笑を上げている。

「はははっ！悪魔はいるんだよ？びっくりした？あの大司教には呼べなかったみたいだけど、俺なら出来る！ アスタロトと俺は契約を結んだ。俺の願いをずっと叶えてくれる。さあ、アスタロト！あれらを君の好きにしてい。君を信じない奴らにもっと君のことを教えてやれ」

「仰せのままに」

鷹揚とした声でその悪魔は呟くと手から蛇を下ろした。

蛇は一度、アスタロトを振り返り、しかし獲物を見つけたとばかりにハニエル達の方に近付いてくる。

「ど、どうしようっ？」

恐怖のどん底に突き落とされた顔でハニーは目の前の男たちを見つめた。

彼らは曲りなりのも中央教会の司教だ。

なら悪魔の撃退法を知っているはず。

継るように聞いたハニーの期待はたった一言で打ち砕かれた。

「わあ、本物の悪魔だ！あんなの初めて見た！」

「専門外だな」

「な、なんですって！」

抑揚のないサリエの声が陰鬱な広間にやけに響いた。

ハニーは眼を怒らせて、サリエの漆黒のマントをむんずと掴んだ。

「どういうこと？」

「ああん？どうもこうも、異端審問官は異端の人間を裁くのが仕事だ。悪魔払いにはエクソシストにでも頼め」

そうこうしている間に蛇は段々その姿を大きくし、そして真っ赤な下を出しながらこちらへ近付いてくる。

それに合わせて、広間の端に控えていた死んだ眼をした騎士達がその手に持った槍をこちらに向けて、淡々と歩みよって来る。

彼らにはもう人の心が無いのかもしれない。

このような状況で恐怖も感じず、ただ落ち窪んだ眼でこちらをじっと見つめている。

四方八方から押し寄せる絶望にハニーは身を竦ませた。

そしてサリエを射るように睨みつける。

「あなた、悪魔を裁くのが仕事だって言ったじゃない！」

「お前が勝手にそう思っていたんだろ？俺はあんな悪魔など信じん」

「目の前にいるでしょうが！」

サリエはわあわあ喚くハニーを面倒臭そうにハエでも払うかのように片手であしらうと後に追いやった。

そして槍を突き出して体当たりしてきた騎士をその剣で軽く捌き、無駄のない動きでその身を床へと打ちおろす。

全く表情を変えずに淡々と騎士を裁くサリエの横で、ラファイが手にした鞭で数人の槍を一齐に打ち払う。

二人の間をついて、ハニーに一撃をいれようと剣を持った騎士がその鈍く煌めく刃を打ちおろそうとした。

驚き、しかし避けることもできないハニーは無駄と分かりつつも頭を抱えて蹲る。

「助けて！」

その頭上で金属同士が擦れ合う嫌な甲高い悲鳴がこだました。

涙で濡れた瞳で上を見上げる。

剣を構えたサリエが打ちおろされた剣を受け、ラファイが阿吽の呼吸でその騎士を蹴り飛ばす。

後ろに激しく飛ばれた騎士が絶妙のタイミングで他の騎士達とぶつかりあい、三人の周りに空間ができた。

「死の天使はね、異端という悪魔みたいな奴を裁くのが仕事なんだ！司教のくせに聖人顔して裏であくどい事やってるとか人を殺してるとか。そういう奴を秘密裏に調べて裁く。中には悪魔と契約を結んだって人もいたけど、基本人相手の商売だから、悪魔自体は専門外」

蹴り上げた足を下ろし、困ったようにラファイが肩を竦めた。

呆然と床に蹲るハニーに優しく手を差し出す。

サリエに比べれば断然優しい言葉だが突き放されたように感じるのは何故だろう。

確かに異端審問官の仕事は一神教に仇をなす危険な思想の弾圧や神の教えに叛く者を裁くことだ。

悪魔を崇拜している者をその罪で裁くことはあっても悪魔自体を裁いたという話は聞いたことがない。

目の前の腹黒男が悪魔はいるだの、異端という悪魔を狩るだの惑わすことばかり言うので彼らが簡単に悪魔を抜ってくれるような気でいた。

呆然と二人を見つめるハニーの心などお構いなし、サリエは目の前の醜悪な姿を取るアスタロトとゆっくりこちらに近付く大蛇を嫌そうに見つめ口を歪めた。

「俺の仕事は異端審問で、悪魔被いなど仕事内容に入っていない。ラファイ、教皇には基本給以外に危険労働手当を請求しろ」

「あははっ。あの頑固おやじが払うか？」

「払わせる」

くつと意地悪くサリエが口の端を歪ませた。

「笑ってる場合じゃないでしょ！信じられない！」

## 悪魔の正体 8

(数分前の涙を返せ！)

危機的状況でこの異端審問官達はまったく役に立たない。

ハニーはこの状況で笑い声を上げる目の前の男達が信じられなかった。

どれだけ倒されても騎士達はその身を起こし、鋭い切っ先をこちらに向けてくる。

ハニーをその背で守りながら、向かってくる騎士達をいとも簡単に打ち払うサリエに懸命に縋りついた。

少しでもこの広間から逃げ出せる希望を見つけたかったのだ。

「あ、悪魔の瞳は？あれ使えば？」

「ああ……。そうだな。だが一個と二個じゃ分が悪いと思わんか？」

にべもない返事を返しながら、サリエは周りが見えていないハニーの手を掴んで自分の方に引き寄せた。

「それ、へ理屈って言うのよ！やってみなきゃ分かんないでしょ！」

ヒステリックに叫ぶハニーに合わせるように大蛇がその太い尻尾を勢いよく飛んできた。

ごうと風を切るそれは触れればその瞬間に木っ端微塵にされてしまいそうなほどな勢いで押し寄せる。

「きゃ〜！」

ハニ一の体をサリエが軽々と持ち上げ、後ろに素早く飛び上がる。その側を太い丸太のようなそれが轟音で駆け抜けた。

さっきまで三人がいた床に大蛇の尻尾がのめり込む。ずんつと体が沈むような衝撃が足元から押し寄せ、広間を震撼させた。

サリエはハニ一を肩に担いだまま、大蛇との距離を測るように重心を落とし身構える。

「困ったな。専門分野じゃないんだ。だから失敗しても悪く思わないよ」

ラファイが髪を掻きあげ、自分の服の懐から小瓶を取り出し、それを大蛇に向かって投げ捨てた。

「慈悲深き神の涙だ。その身を溶かせ！」

じゅつと酸が染み込んだような音が響いた。

大蛇の背から焼けただれるような臭いと黒い煙が上がる。

大蛇は痛みを悲鳴を上げるかのようにその身を高く上げた。

「ああ、聖水って本当に効くんだな！」

驚くように声を上げるラファイをよそに、サリエはそつとその肩からハニ一を下ろす。

呆然としているハニ一に厳しい眼を向けた。

「あんな化け物相手にお前を担いだままいれない。自分の身は自分で守れ」

「そんな冷たい言い方……」

確かにその通りなのだが、一緒に戦う仲間だと思っていたハニーは悲しかった。

足手まといでも少しでも彼の役に立ちたかった。

それがエルの為になる気がしたのだ。

そのハニーの戸惑う顔に構わず、サリエが続ける。

「いいか、数分の時間をお前にやる。俺があいつらの正面に立った時が合図だ。お前は一気に外に逃げる」

「で、でも……」

「こんな状態になっっていると知らず、お前を広間に向かわせた。

これは俺のミスだ。お前はお前の仕事をしろ。俺は自分の仕事のミスを他人に尻拭いされるつもりはない」

戸惑う視線を向けるハニーに構わず、サリエは背を向けた。

「でも、エルをあのまま置いていくわけには……」

「女王は俺らで何とかする。お前は自分の身を守ることを考える。今はお前だけが希望なんだ」

真摯な黒と赤の瞳に見つめられ、ハニーはそれ以上何も言えなかった。

ただ彼の言葉がハニーに別の指名を与えてくれたように思えた。

「一度しかチャンスはない。分かったか？」

ハニーは大きく頷くとサリエの横に立った。

遠くを無然と見つめる彼を仰ぎ見、ハニーは複雑に口の端をあげた。

「この複雑怪奇な異端審問官に、なんと言葉をかけるのがいいのだろう。」

「ずっと言い合いばかりして、素直に向き合うこともなかった。」

「その所為か、彼を前にするとどうしても身構えて素直になれない。でも、今心の奥から湧き上がる気持ちをハニーはすんなりと言葉にして伝えたかった。」

「ありがとう。」

「ふん、礼を言われる覚えはない。」

「あんだ、本当、性格悪いわね。」

「よく言われる。」

美しい顔を無然とさせ、サリエは眼前の悪魔を睨みながら答えた。追いこまれた状況にあつてもけして自信を失いない高慢な男。

彼の強張った口元にこの場がどれだけ異常なものなのかがい知らされる。

それでも彼はこの場の闇を打ち砕くつもりだ。

サリエが小さく振り返るようにハニーを見つめた。

氷の美貌が少し優しく見える。

凍てついた顔に灯る真っ赤な炎の瞳が、闇を押し殺したかのような黒い瞳が、その二つが交じり合った視線が、ハニーの心を突き動かす。

「邪眼を見て立っていられる奴は真の勇者だったか？噂の真相を確かめて来い。この広間を抜けるとお前は女王を救った英雄になれる。」

いくぞつとサリエは小さく呟いた。  
それに合わせてラフィもウヴァル目がけて走り出す。

「聖水の数は限られている！持ち堪えられるか、サリエ！」

「当たり前だ。誰に向って口を聞いている」

走り出した二人に突き動かされるようにハニーも駆けだした。

「無駄なことを！」

激しい憎悪に満ちたウヴァルの声はその背に飛んだ。

それに合わせるように広間全体に身を切り裂く衝撃が押し寄せた。

「あつ」

「ハニー！」

サリエの声が聞こえた気がした。

全てを破壊する波動が広がり、その場に立つ全てのものが吹き飛ばされた。

ウヴァルに切りかかろうとしていたサリエが、聖水を手にしていたラフィが次の瞬間に壁にめり込むように打ちつけられていた。

その光景をハニーは壁に打ちつけられながら見ていた。

その眼の前には邪悪な姿の悪魔。

闇が蠢く手でハニーの喉を掴み、壁に押し付けている。

その背に広がるのは地獄だった。

奥で狂気に眼を怒らせているウヴァルがいる。

ざわりと歪んだ空間で立っているのはその彼とそしてハニーの前

にいる悪魔のみ。

「主の望みです。あなたはレモリー・カナンに代わり死なねばなりません。けしてこの場からは出しません」

何も無い空虚な声だった。

音もなく心に広がるのは無に体が動かない。

見開かれた眼が見つめる先にあるのは絶望だった。

サリエモラフィも壁に打ち付けられたまま、その動きを止めていく。

何度倒しても起き上がってきた騎士達も体があらぬ方を向いてものように打ち捨てられていた。

「わたし……信じない……い」

絞り出した声はようやくとそれだけを言葉にした。

涙が溢れてきた。

悲しいのか、怖いのか、もう分からなかった。

ただ、何かを伝えたくて、このまま終わる訳にはいなくて、ハ

ニ―は最後の抵抗を試みた。

くっと思を飲み、悪魔の手を掴もうとする。

しかし息苦しさに霞む手に力が入らない。

痺れる手が力尽きたように落ちる。

遠ざかっていく意識の中で、何かが落ちるのが見えた。

月の形をしたネックレスだ。

くすんだ銀色が灑んだ大理石の床で跳ねる。

（ああ、エルのくれたネックレス……。エル、ごめんね。約束を守れなくて……）

大きな円らな瞳で屈託なく笑う少年が瞼に浮かぶ。

絶望が支配する虚無の空間の中、その光景を最後に映し出した瞳から溢れる涙はとても温かかった。

薄れゆく意識の中、かすれように遠くにいる愛しい存在の名を呼んだ。

風に乗って、この気持ちだけでも届いてくれたら……。

「エル……」

「やっと、名前を呼んでくれたね？」

そっと耳元でささやかれたのは、懐かしく、それでいて知らない男のものだった。

戸惑うハニーの赤い髪を優しい風が浚う。

## 悪魔の正体 9

ハニーの目の前にあの悪魔はいなかった。

いるのは輝かしい金髪の美しい青年。

湖のように深い青の瞳が優しげにハニーを見つめている。

知らない青年だ。

でも、その面影に見覚えがあった。

「エ、エル？」

「そうだよ。ハニー」

黒いマントに身を包んだ青年はもうハニーが知っている少年ではなかった。

背も体格もハニーよりも大きくなっている。

愛らしかった顔は甘さを少し残して精悍に引き締まっていた。

「な、なんで……」

驚くハニーを抱き締めたまま、エルは困ったように微笑んだ。

そしてその眼を床に打ちつけられている悪魔の方に向ける。

「アスタロト。……いや、かつてエクロカナンで月の女神と崇められていたアシュタロステ。痛い思いをさせてごめんね。でも僕も僕の主人を傷つける者を許す訳にはいかないからね」

醜悪な悪魔が落ち窪んだ眼に驚きを浮かべて、目の前の青年を見つめていた。

その恐ろしい容貌が少しだけ悲しい女性の横顔に見えた。

「しゅ、主人つて……」

「名を失った者に新しい名を与え、血を与えることで契約が成立する。それは悪魔との契約の一種。僕はね、本当の名はベルビュートという。かつてこの国の崇高な館の主、ベルゼブルと呼ばれた神のなれの果てさ。悪魔の烙印を押され、深い森の神殿に封じられた。かつて神と崇められても一度悪魔となり果てるともう元に戻ることはできない。崇める民を失い、邪神と罵られ、暗く陰鬱な時を過ごす中で本来の心を忘れていった。身も心も悪魔になつていった。地獄に住み、悪魔を召喚する者にのみ必要とされる、それが僕の唯一の存在意義だ」

抱き締めたハニーを床に下ろし、ベルビュートは切なげに瞳を揺らす。

「本来なら魔方陣で召喚されなければ、僕たちはこの世には出てこない。しかし、封印が緩んだのか、気がつくとも僕はかつて僕を奉つていた神殿の中にいた。自分の存在も名も全て忘れた僕を君は見つけた。真の名を封印された僕に君は名を与え、そして生の源である血を与えた」

「名前と血……そんなこと……」

「君は何も意図してなかったんだ。ただ狼にかまれた血が僕の上に落ち、そして君はただ愛しい存在の名を呼んだだけ。それが重なっただけだ。でも僕にとってはそれはこの世に存在する意義を与えられたのと同じことだ。君はあの瞬間、僕の世界の全てになつた」

愛しげに青い瞳を揺らし、ベルビュートはハニーの頬に触れた。

「世界の全てだなんて、そんなつもりは……」

ハニーは困惑に眉を寄せた。

あの場でベルビュートに出会わなければ、全てを失っていたのはハニー自身だったかもしれない。

彼の存在がハニーに勇気と希望を与えたのだ。

「この血の盟約は、魔方陣を以って交わす契約とは違う。より深い主従関係が結ばれるんだ。でも君は一度も僕を従者だとはみなさなかつた。もともと盟約を結んだことも分っていないのだから当然何だけれどね。でも君のその全てが眩かつた。心引かれ、ずっと側にいたいと願わずにはいられなかつた」

（たびたび、エルがそれは命令かと聞いたり、わたしの言葉に反抗しようとしなかつたのは、そういう訳があつたのね。きっと盟約がなければ、エルはあそこでキャメルに付いてはいかなかつた）

しづしづと引き下がるエルのすがるような瞳を思い出し、ハニーは息を飲んでいた。

あの誰もいない神殿での出会い。

彼は当たり前のようにハニーの側にいて、そして惜しげもなくその力を注いでくれた。

「君を助けたのは盟約なんかじゃない。僕は本当に君が全てだと思つていた。もちろん今も。自分の正体に何となく気付き始めても君と離れるが嫌で、ずっと心に嘘をつき続けた。僕には君が望めば一発でそれを叶える力がある。それを何度も伝えようとして、でも君に悪魔だと知られたくなくて……」

「エル……」

目の前の泣きそうな顔の青年が本当に悪魔だなんて信じられない。ハニーはおずおずとその頬に手を差しのばした。触れあつた部分が温かい。

「天使じゃなくて、ごめんね？」

「何を馬鹿なことを……。天使じゃなくてもエルはエルでしょ？ それに困った時に助けてくれたのは他でもないあなた。あなたが側にいるだけで、それだけでわたしは嬉しかった」

にこりと金の瞳を輝かすとベルビュートは、ハニーを愛しくて堪らないと言わんばかりにきつく抱きしめた。

そして驚愕に打ち震えているウヴァルに眼をやる。

「僕らは君たちエクロ＝カナンの人間に必要なと思われるは嬉しい。ただ、こんな形はいただけない。アシユタロトは君のエクロ＝カナンの復活に手を貸したかっただけだ、誰かの犠牲の上に簡単に取り戻せるものじゃないんだ。一度悪に手を染めたら、二度と神々しい神になど戻れないんだ」

「で、でもエル……」

とり繕るようにそのマントを引いたハニーをベルビュートはそつと離れた。

「さあ、帰ろう、アシユタロト、ここは僕らがいる場所じゃない」

床に伏した悪魔がその言葉に小さく萎んだ。  
そして膨張するように拡散するように広がる。  
衝撃となった黒い闇が広間を突き破らんばかりに広がり、その天井目がけて噴き上がった。

「怒り、悲しみ……。アシュタロト、君の気持ちは分かるよ。悪魔とはいえ自分を必要としてくれる人がいるのは嬉しいよね。でも、その上辺だけで人の欲を叶え続け、月の女神と呼ばれた君もこんな醜悪な姿になっている。本当に言葉とは恐ろしいな。簡単に人の心を変え、その姿を変えてしまう」

広間の天井が崩れ落ち、たちこめていた霧が一斉に晴れた。  
何もなくなつた上に濃紺の夜空が広がっている。

同じ暗き闇でも心が落ち着く温かさがそこにはあつた。

「よかつた。僕の話聞いてくれて。この世に悪魔なんていなくていいんだ。忘れられてもその方がいい」

元の静謐を取り戻した広間に切ないベルビュートの声が響いた。

「ハニー、ここで僕らはお別れだ。君に悪魔は必要ない。でも一つ我がままを言うなら……この首飾りを持っていてほしい。そして時々少年の姿の僕を思い出してほしい」

ハニーの方を振り返つたベルビュートはただただ呆然と立ち尽くすハニーを抱き寄せ、そしてその首に月の形に首飾りを恭しくかけた。

ハニーはどうしていいのか分からずにただ涙を浮かべてされるがままだった。

「……い、いかないで……」

ベルビユートはあの少年の時と変わらない、無垢な表情のまま屈託なく微笑む。

そしてそつとハニーの赤い髪がかかる額に口を寄せた。

「どうか君に幸がありますように。僕の心にまだ神の欠片が少しでも残っているなら、その全てを君に。愛しているよ、ハニー」

涙で前が見えなかった。

ただ神聖な空気が広がり、そつと明けゆく夜の帳がその色を淡い紫紺へと変えていく。

空には人々を導く希望の星が輝いている。

この広間であつた惨劇の終わりを告げる静かな光だった。

その星を見上げ、ハニーは首にかかった首飾りを握りしめるしかできなかった。

その背に懐かしき声がかかる。

ハニエー弾かれたように振り返った。

「ハニー？」

「エル！」

白銀の美しき髪を揺らし、ぼんやりと立ち竦む月の女王。

ハニーはあの日のように全力で駆け寄り力の限り抱き締めた。

「エル……わたし……」

「ハニー……」

二人の乙女は手を合わせるように握り合い、互いの額を合わせて涙を流した。

その頭上高く、輝く明けの明星が静かに二人の頬を濡らす涙を照らしていた。

そして物語は語り継がれる

どんなことがあっても朝は明ける。

その日エクロ<sup>II</sup>カナンは新しい朝を迎えた。

全ての罪悪を引きつれ、空の彼方に消えたかつての神々。

彼らの消えた跡からは柔らかな日出国の陽光が静かに降り注いでいた。

目の眩むほどに目映く、身震いするほどに清浄な光に照らされたその広間は静謐として、先ほどまでの凄惨さを微塵にも感じさせないほどに穏やかだった。

ただまるで骸のように積み重なった、突き破られた天井の残骸が寒々しい広間に傷跡のようにあるのみ。

「本当は、ただの姉弟喧嘩だったのね」

エルは瓦礫の中で気を失っているウヴァルを抱き締めそう呟いた。

この国を巻き込んだ悲しい喧嘩。

ただの喧嘩だった。

そこには神も悪魔もなく、歴史のタブーさえ存在していなかった。なのに人々の欲が交じり合い歪に歪んだ結果が、多くの血を流した。

「これだけ人を悲しませたのだから、うんと仲良くならなきゃいけないわ。そして、この国を守って見せる」

そう言ったエルはとても可憐で、儂さなどどこにもなかった。

たぶん何か吹っ切れたのだろう。

瓦礫の中、薄汚れた白いドレスに身を包んだエクロ<sup>II</sup>カナンの女王は、即位して初めて心から希望に満ちた顔をして、上を仰いだ。

白みがかつた空は淡い金色と朱色に染まり、世界に新たな息吹を吹き込んでいく。  
暗い闇に覆われていたこの国の新しい始まりを彩るには相応しい夜明けだった。

\*\*\*

あの日から数日、柄にもなく寝込んでしまった。  
その間にエクロ・カナの女王と王子は互いの過ちを悔い、そして国の再興に向け動き出していた。  
目覚めたハニーは事の顛末をエルから聞かされ、度肝を抜かれた。

「え？血に濡れた女王は死んだ？何言ってる……」

「そう。あの瞬間、血に濡れた女王は悪魔たちと一緒に魔界に消えた。全ての醜聞も、謎の伝染病も引き連れて……」

自分の寝ているベッドの側で屈託なく微笑むエルをハニーはこれでもかと目を見開いて見つめた。

「でも、それじゃエルは……」

「これで私は晴れてただのエルになれるわ。きっとね、これが一番いい方法だと思うの。血に濡れた女王は全ての災厄とともに消えたことにするのが。相談したら司教様達もそれがいいかもしれないとおっしゃってくださいまし」

「司教つてもしかして……」

「ええ、サリエ様とラファイ様。お二人ともお若いのに教皇に認められるほどの方なんですって」

「あいつらの言葉を簡単に信じちゃだめよ！」

「どうして？」

声を荒げたハニーにエルは不思議そうに首を傾げた。

「だ、だって、あいつらはわたしのことを騙して……」

「それは不可抗力だったとおっしゃっていたわ。ハニーを危険な目に合わせて後悔してるともおっしゃっていたわ」

にこりと優美な目を細めたエルは心の底からあの二人に傾倒していて、何を言っても聞き入れようとしない。

「いいの？エルはあまり神職についてる人好きじゃないでしょ？」

「あら？ハニー、それは誤解よ。神職についている人によく思いつかないだけ。ハールート・マールート然り。前にいた司教も国のことを思っているように見せかけて、本当は辺境の地の司教にされたことを恨んでいたから。早く聖域に戻ろうと躍起になって、この国を陥れようとする」

痛々しげに青みがかった白銀の瞳を伏せ、エルは心の奥底にある悲しみに耐えるように言葉を切った。

その瞳が映し出す後ろ暗い感情が何なのか、ハニーには検討もつかなかった。

ただ分かり合えなくても彼女のその感情を少しでも霧散させることはできないか。

思った瞬間に、ハニーは行動に出ていた。

「エル……」

ベッドから飛び出し、エルに抱きつく。

エルは驚いたように目を見開いたが、すぐに嬉しそうに目を細めてハニーを抱きしめ返した。

淡い、まるで夜明けの空のような赤色の髪を優しく撫でるとその耳元にそつと囁く。

「ありがとう。愛しい私の半身。貴女はいつでも敏感に私の心に反応してくれる。でも私は大丈夫よ。もう一人で抱え込んで皆に心配をかけないと決めたから。……それにあの人たちは違うもの。神とか国とか、司教の立場とかそういうものを全て取り去って、私たちに一番いい方法を一緒に考えてくれた。それがこれ。女王は死に、新たな王が即位する。これほど分かりやすく、国を新規一転させる術はないと私も思う」

そう言った彼女は今までのどの場面よりも澁刺としていた。

儂げな月の女王　そう評されていたのは、一重に彼女の我慢と忍耐の結果だったのだろう。

本当は感情豊かで、のんびりとした理知的な人なのだ。

「ハニー聞いて。私は一度死んだわ。あの広間で、自分で自分の胸を刺して。ああするのが、国をそして貴女達を守る最善の方法だ。あの時の私は信じて疑わなかった。でも今は違う。どんなに苦しくても生きて、生き抜いて、その先にある希望を見つけにいかないといけないのだ知った。教えてくれたのはハニー。貴女よ。貴女が私

の代わりに血に濡れた女王を演じてくれたお陰で今のエクロー「カナ  
ンがあるの。貴女が守ってくれたこの命を私はもう二度と無駄には  
しない。貴女が繋ぎとめてくれたこの国を二度とバラバラにはしな  
いわ」

こんなにも綺麗な女性だったかな。

全てを振り切り、新たな日々燃える元女王は清々しいほどに堂  
々としていた。

彼女が女王の位を降りることが悔やまれるほどに。

しかし、全ては彼女が決めること。

ハニーはただ、未来に向かって一步を踏み出した友人の背を押す  
ように微笑んで頷いた。

## そして物語は語り継がれる2

「大丈夫かな？」

懸命にこの国を立て直そうとする友人のその背を思い返し、ハニーは一人呟いた。

ここはゼル離宮の客間。

ハニーに与えられた寝室は豪華な寝具が備え付けられた、この離宮で一番広い部屋だった。

寒々しい石の床の上には暖かな毛長の絨毯が敷かれ、壁には色取り取りのタペストリーがかかっている。

そして、寝室からすぐに出られる位置にあるバルコニーからは、ゴモリの森や離宮の裾野に広がる城下を一望できた。

そのバルコニーの手すりに手をかけ、澄んだ青空に目をやる。まるで天使のように愛らしいかの少年の瞳のような色だった。

「エル」

不意に澄んだ青空に少年の笑顔がかぶり、ハニーは顔を伏せた。

あの愛らしい顔の少年はここにはいない。

そう思うと涙が溢れそうになってくる。

(泣いちゃダメよ！エルが心配する……)

悲しみを打ち払うように首を振った。

淡い赤い髪が日の光を受け、透き通るように揺れる。

(あの子はわたしの心に敏感だから、だからわたしは泣いちゃダメ

！)

必死に眼に力を入れて涙を我慢していたハニーはその側に人影がいることにまったく気付いていなかった。

「まったく、涙もろい女だな」

不遜で、傲慢な声が降ってくる。

聞き心地が良いのに嫌味にしか聞こえない、この声はもう馴染みのものになっていた。

「うるさい！レディーの部屋に勝手に入ってくるなんて最低よ！」

金の瞳を怒らせて、睨みつける。

その瞳が捉えた漆黒の髪の毛の男、その左眼には黒い眼帯がされている。

その下にある真っ赤な瞳はあれ以来見ていない。

「悪魔の瞳なんて存在しないよ。もともとサリエの両眼が違う色をしていた。その珍しさにいつしか悪魔の瞳と呼ばれるようになっただけ。言ったでしょ？悪魔の瞳に睨まれて死んだ人は一人だけ。その一人つてのは、瞳の色じゃなくてサリエのあまりの美しさに眼を奪われたじいさんで、驚きのあまり壁に激突して御臨終しちゃったのよ」

ラファイがサリエの陰でこっそりと悪魔の瞳の秘密を教えてくれた。悪魔と呼ばれ、蔑まれる上で腹が立ったサリエはある日、その眼力で人を射竦める技を身につけたらしい。

「せっかくだから悪魔の瞳のご希望添えるようにしてみた、なんて

言ってたよ。そのふてぶてしさがサリエなんだよね。」

そう言って笑ったラフィは少し複雑そうに眉を寄せた。

サリエがどういう扱いを受けてきたか、それを知っているラフィはそのサリエの強がりや痛々しかったのだろ。

「レディーと言える代物に見えないがな……。いいか、いい女つてのはタイミングを見誤らないもんだぜ？」

バルコニーの手すりに背をもたれかけ、ハニーの方を見るとともにサリエが呟いた。

ハニーは食ってかかるようにそちらを向く。

完璧な美貌を湛えた麗しい横顔がある。

その深い闇のような瞳がちらりとハニーを見た。

そして意地悪く細まる。

「今がここぞっタイミングだろ？泣きたい時泣けよ。我慢するなんてお前には似合わない」

突き放したような優しい言葉が何故こんなにも心に響くのだろう。せつかく引つ込んだ涙が溢れだし、止まるところを知らずに流れる。

「ひっく……エル。わたし、わたし、何もしてあがられなかった」

その頭をサリエがあやすようにポンポンと叩いた。

「お前がお前らしくいたら、あのガキは文句なんて言わない。何もしなかったから、あいつはお前を愛してたんだ」

全てを知っているようにかかる慰めにハニーは戸惑ったように涙に濡れた瞳を向けた。

「どうして、あの子のこと……」

どう説明したらいいのか分からずに、エルの正体は言えずじまいだった。

全てを救ったのはこの国のかつての神だとした皆には伝えていない。

彼が悪魔だったなんて、自分が信じたくなくてどうしても言い出せなかった。

「ああん？お前を助けたのは、あの神殿で一緒にいた少年なんだろう？そんでもってやつはかつてこの国で崇められてた神だった。違うか？」

「わ、分かるって……でも……」

ハニー自身信じられないことが何故この不遜な男に全て理解されているのだろうか。

疑問の全てをぶつけければ、簡単に頭の作りが違うからだとトンでもない嫌味が飛んできそうだが、そんなことを今のハニーに考える余裕はない。

こぼれんばかりに目を見開き、サリエを見つめた。

「お前がああ神殿で一緒にいたガキ、あいつには影がなかった。だから俺は悪魔だと言ったんだ。そしてお前が持っていた月の意匠の首飾り。あれはかつてのエクロー・カナンの神殿に用いられていたものだ。お前が逃げ込んだ神殿にも同じような紋章がいくつもあった。

それにラフィの話を合わせれば、あの少年がただの子どもでないことは誰にでも分かる。まあ、この国のかつての神つてのはカマ掛けだ。お前はなんでも顔に出るからな。隠しててもすぐにばれる」

氷の華のような美貌が嫌味なくらい流麗にせせら笑う。  
薄い唇がハニーを小ばかにしたように引き上げられた。

「カ、カマ掛け……。あなた、ほんとに最低！」

ハニーは悲しさを絞り出すように儂げに微笑むと眼をこしこしと拭き、悲しみを取り払うかのように涙を拭った。

(泣いちゃダメよ！泣くよりも笑おう！そっちの方がエルが喜ぶ！)

よしつと心の中でひとりごち、ハニーは金に輝く瞳で天高く見上げた。

そして何か思いついたように勝気な眼をくりくりさせてサリエを見つめた。

「ねえ、よくわたしがハニーだって分かったわね。いつから気付いてたの？」

「馬鹿か。赤い髪と金の瞳なんて珍しい特徴の人間がそういる訳ないだろ。これはウォルセレン王家の始祖の特徴だ。ついでになかなか人前に現れないという出し惜しみまくりの現聖女殿下の特徴でもある。まあ出し惜しむほどの女じゃないと思わされたがな、あの神殿で一目見た時からね」

「な、何を！！」

サリエの心にもない言葉にハニーはカツとなって目を吊り上げた。そのハニーをサリエは実に楽しそうに目を細めて見つめる。その顔を見て、ハニーはいいようにからかわれている事実に思い当たり、恥ずかしさに頬を真っ赤に上気させた。

「ふ、ふざけてんじゃないわよ。この嫌味な傲慢変態司教が！」

膨れ上がった感情のままに手を振り上げたが、その手を簡単にサリエに押さえられ、ハニーはさらに顔を真っ赤にさせた。

「は、離しなさいよ！」

「くくつ。大国ウォルセレンの聖女殿下の手を握れば不敬罪に当たるかな？」

「その前にいろんなことが不敬なのよ！あなたは！わたしのこと、いっつも敬ってないくせいに、口先で馬鹿みたいに聖女って言うて！いいわよ、どうせ、聖女らしくないわよ。自分でも分かってるんだから！聖女らしく振舞えないから表舞台にも出れないんだって！」

サリエは掴んだ手をそつと自分の方へと寄せると、その白魚のような華奢な手にそつと口を寄せた。

「とんでもない。心より敬愛しておりますよ。聖女殿下」

「馬鹿！」

まるで流れるようなサリエの行動に思わず見とれそうになり、ハニーははたと気がついてその手を引き抜いた。

「残念」

そつと顔を上げたサリエは夜の闇のような艶を帯びた漆黒の隻眼を細めて柔らかく微笑んで見せた。

常の冷酷さが影を潜めた、穏やかな顔は本当に残念そうに見える、八二一の胸を沸騰させるに十分すぎるほどに美しかった。

「あなたは司教の癖に、こうやっていつも女を口説いてるのね」

僅かに距離をとると、八二一は口を寄せられた手の甲を撫でながら、愛らしい顔をぶすりと膨らました。

体勢を整えたサリエはいつもの皮肉に満ちた笑みを浮かべると、そつと手すりに体を預けた。

「ずいぶん言い方だな。俺は自分の認めた女しか口説かん」

「嘔吐き。わたしをウォルセレンの王女だと知ってたくせに、ずつと追い回してた人間の言葉なんて信じられない」

「ククつ。手厳しいな。まあ、敵を騙すにはまず味方からというじやないか。お前が逃げている間は大司教が色々ぼろを出すだろうし、建前上ウォルセレン王女ということになっている女王陛下の命にも危険は及ばないだろうとラフィと睨んでいた」

「エ、エルのことは確かにそうだけど……。でもなんでその作戦をわたしに教えてくれないのよ！わたしがどれだけ死にそうになったか、あなた分かってる！あなたに殺されそうになって、他の騎士達にも剣を振り上げられて……。本当に最低！」

「その眼！」

憤るハニーの言葉を遮るようにハニーの頬にサリエが手を当てた。美しい氷の華が咲き、流麗な笑みに思わず眼を奪われる。

「その眼を見た時から、お前ならやり遂げると思っていた。狼に噛まれ血だらけになっても、異端審問官である俺を見据えてもけして諦めようと思わない眼。だからその眼にかけようと思ったんだ」

ハニーの頬が一気に真っ赤になった

そんな風に思ってくれていたなんて。

それともこの言葉もさっきまでと同じ、口先だけのパフォーマンス？

「なんて言えば満足か？」

美しい顔が歪み、底意地の悪い、嫌味な顔がのぞいた。

「なっ！ど、どういこと？」

「ん？そういことだ」

そう言っサリエはハニーに背を向けた。

そしてすたすと立ち去ろうとする。

「ちょっと、話は終わってないわよ！待ちなさい！このインケン、サイテイ男！ちょっと顔がいいからって、冗談もたいがいにしなさい！」

怒りの声をあげてハニーはその背を追った。

ぎゃあぎゃああと騒ぐハニーにサリエは心底迷惑そうな顔を向けな



## エピソード

……そして血に濡れた女王は永遠にこの地から消え失せたんだ。  
ん？女王の幽霊はまだいるって。

確かに、このエクロ＝カナンの街の端、ゴモリの森の側にあるゼ  
ル離宮遺跡では時折女王の幽霊が目撃されるらしいね。

君が見たことはあるのかい？

そうか、一人では心もとないか。

ならば次は君の優しい兄と一緒にいってごらん。

それが本当に女王の幽霊なのか、その幽霊はどんな眼差しで君を  
見つめているのか、その身で確かめてごらん。

ああ、あれが君の兄かい？

心配して、君を探しにきたんだね。

さあ、行くといい。

さっきの昔語りはそつと心の中に仕舞ってね。

これは悪魔のフォークロアさ。

悪魔と蔑まれ、歴史の中に真実を残せなかった者の戯言。

忘れてもいい。

でもこれだけは覚えておいて。

君が今歩むこの地に同じように足をつけ、生きていた人間のこと  
を。

そして、その者の生きた証が今のこの国を作ったことを。

これは紛れもない真実。

さあ、君も思うように生きなさい。

小さな、可愛い僕のハニー。

了

## エピローグ（後書き）

今まで読んでくださってありがとうございます。大変読みにくく、ついでに最後のほうは意味不明だったと思います。でも安心してください、作者も意味不明です。逃げ惑う女王様とそれを追いかける嫌味な男を書きたかったのに、どこでどう間違ったか……。悪魔とか登場させちゃったのがいけなかったんでしょうね。雰囲気だけでも楽しんでくださったなら、作者冥利につきるものです。これからはちゃんと設定を考えて、読んで話の分かるものを書こうと思いました。まあ、いつも思うだけだから話がまとまらないんですけど……。でも本当にありがとうございます。意味不明な作品でもキャラクター達を愛しく思っていますので、完結して、そして皆様に読んでいただいて彼女らも報われると思いますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5856r/>

---

悪魔のフォークロア

2011年7月24日20時08分発行